
太陽系の王様 THE KING OF SOLAR SYSTEM

Novel Factory ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽系の王様 THE KING OF SOLAR SYSTEM

【Nコード】

N2733V

【作者名】

Novel Factory

【あらすじ】

西暦2340年。

表世界と相對する世界である裏世界には太陽系の惑星を模した十の国があり、裏世界の各国の“魔力持ち”は自国と表世界に存在する惑星を守護する役目を持つため、“守護神”として敬われていた。

裏世界に召喚されてしまった記憶喪失の少女・篠原綾乃は、太陽国国王の命で秘密裏に“魔力持ち”を探し、近い未来起こると予言

されている戦争を阻止するため、一人の少年を伴って旅に出る。

だが、巨大で狡猾な陰謀下で運命の歯車はあまりにも残酷な方向に回り始め――。

未来・現在・過去が全てリンクする、第三次魔法大戦ストーリー！。

※他のサイトにも掲載しております。

プロローグ『鳥籠（ろうや）』（前書き）

プロローグ『鳥籠（ろうや）』

裏世界は、表世界の“とある一人の人間の中”に生まれた。

次第にそれは大きくなり、やがてはその人間を食い尽くした。

自らを媒体として成立したために、裏世界から出られなくなって寂しく思ったその人間は、表世界からかつての友二人を裏世界に取り込んだ。

紆余曲折の末、その人間の友であった男女は、アダムとイヴのように裏世界の核心に迫って、独力で表世界に帰ってしまう。

嘆き悲しんだその人間は、裏世界で不死身になるように自らをデーター化し、その後いつの間にか裏世界に他にも人が生まれ、それぞれの文明を築いていった。

時を経て、次々に出来た国々は戦争や、その厳しい気候によって興亡を繰り返す。

そして———今のような十国に落ち着き、互いの国を高め合っている。

表世界と同じ年に、似た出来事が起こっているのは、偶然ではない。

二つは相反する世界であるが故に、互いに影響し合っているのだ。

冒頭の言葉より抜粋

プロローグ 『鳥籠^{ろっや}』

「・・・・・・・・。」

所々破れたボロボロの布を纏った少年が、高く積まれた石の壁を背にして蹲っていた。

ふと正面を見ると、固く閉ざされた鉄の扉があり、辺りには手を軽く乗せるだけでギシギシと軋むベッド、埃の溜まった木製の机と椅子――そして、冷たい石畳の床と壁があるだけである。

ブルブルツと少年は身震いした。

石の壁には微かな隙間がたくさんあり、風が吹き込んでくる上に、一年中冬のような土地なので時折雪が入ってくることがあった。

（寒い・・・僕、どうしてこんな所にいるんだろう）

少年はその汚い牢屋に物心もつかないうちに入れられてしまっていたのだ。

手を動かす度に、チャラチャラと壁に繋がっている鎖が音を立てる。

（まるで、僕は植物人間だ。——いや、僕は植物なんかよりも
“自由” じゃない。ただ……生かされてるだけ）

少年には、もう自分が人間なのか、はたまた生きているのかそうでないのかさえ、疑えてきた。

「“僕”は誰なんだ……？」

泣くような声で、無理矢理言葉を絞り出す。

「なァ」

鉄の扉の向こうで、見張りの兵士の一人が言った。

隣に立っている兵士が振り返って、「何だ？」と問う。

「この中にいる奴ってさ、ガキなんだろう？ 魔力強いのか？ 魔法壁張るくらいにさ」

「前に聞いた。……入って一度も、少しもメシ食わなくても、ヤセたりしないんだと」

うわ、気持ち悪い。本当にオレらと同じ人間か、と牢屋の方を見遣った。

「でもなあ、俺にとって“魔力持ち” 自体が異質なんだよ」

「あ、オレもオレも！ 確かにそう思う。民草の中じゃ、魔物や怪物だって説があるくらいさ」

「魔法使えんだし、変身しててもおかしくないんだよな。でも一般市民からランダムに生まれる辺り、自分の先祖が“魔力持ち”つてのが存在するし。それは置いといて……こんな話も聞いた。コイツは主のご子息で——」

一方の兵士はこの任に着いて五年、もう一方の兵士は先月転任してきたばかりであった。二人共黄色のラインが付いた緑の制服を乱れなく着こなしている。

彼らは、軍のトップエリートだ。

極めて優秀な兵士がわざわざ選抜されて、こんな見張りに任じられるのは変であると言う者も多かったのだが、これからはそう批判する者もいなくなるだろう。

なぜなら。

「直に、死刑になるそうだ」

鉄格子の牢屋ではないけれど、扉も、石の壁も厚いわりに、中まで二人の兵士の

声はしっかりと届いている。文字や言葉を特別習った訳ではないが、自然と会話の

内容を理解することは出来た。

(……………)

「じゃあ、この任務は終了ってこと？」

「まあ、そうなるだろうな。お前、——来たばかりでまた人事異動ってのはどうかと思うけど——、どうするつもりだ？」

「どうするつもりって……人事異動を了承するに決まってるじゃないか。そんなこと聞くからして、そっちはやっぱ違うの？」

「ああ。地方に戻る。この任務、単純なようで結構病んでくるんだ。常に地下で、何にもすることが無い。それを交代制無しに五年だ。確かに人選は間違っていないと思うな。一般兵じゃすぐ死ぬ」

狂ってきて、拳句の果てに自殺。

山を越えて慣れてしまい、今ではどうってことない彼だが、それは自身にも起こり得ていたことだ。

なるほど、ともう一人の兵士はそれに同意する。

「……死刑って、言ったよな」

そして再び、牢に目を向けた。

少年は、今の状態は死んでいるのに等しい、そう思うと別に大して“死ぬ”ということに恐れを抱きはしなかった。

兵士達に何を言われようと、どうでも良かった。

……ただ。

ただ、もし——生きていいって、必要だって言われたら……
生きていたい。

生きていても、何も出来ない。出来はしない。

ただ、本当にただ生きるだけ。

いずれ来る、寿命が尽きるその日まで。

生きることへの渴望には、論理的理由は無かった。ただ単に、

身体が、心が、もしくはそれ以外の何かが、深くそれを望んでいた。

……でもそれも、終わる。

新米の兵士が「十四年も生かしておいて、今更って気はするけど・
・可哀相なもんだな、コイツもさ」と言うのを上の空で聞き、少年は自らの膝を抱える手に力を込めた。

プロローグ『鳥籠（ろうや）』（後書き）

どうも、Novel Factoryです。

初めての投稿ですヨー！！

この『太陽系の王様』は6〜7年物（笑）です。何度も推敲を重ね、表現をよりレベルの高いものにしようと頑張りました！。（ですが、第一章の途中から展開をガラッと変えていますので、書き直したりしていません）

誤字脱字はあると思いますが、よろしくお願いします。

感想・希望等、ありましたら是非教えて下さい。

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Part 1（前書き）

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大い・常夏の城』Part 1

裏世界にある太陽国の王城内の一室、 “ 儀式の間 ” の床に描かれた、光帯びている巨大な魔方陣の中心に、少年少女が七人横たわっていた。

それを、全身真っ白の、所謂白装束の男達を取り囲んでいる。

『・・・——召喚は成功だ。この二十歳にも満たない子供達の中に、彼の者がいるということなのだ？』

『この儀式は神聖で正確なものだ。そうでなければ意味がない』

『そうだ』

『残りの者には、あちらの世界の我が君も含まれているのだろうか？』

言った男の隣に立つ者が、

『私の主もだ』

またその向かいの者が、

『同じく』

白装束達は口々に言った。

彼らの帽子はシンプルかつ縦長で、帽子に付けられた布で顔を被い、足先までしっかり隠れる長さのマントも、当然のように真っ白であった。

次第に魔方陣の光は薄れ、完全に消えた。

それに伴って、白いチョークか何かで描かれたらしい魔方陣自体

の線も、臃げになっていく。

更には、魔方陣上の一人の少年までが、データが分解されるようにその身体が欠けていった。

男達は儀式の終焉を確認し、円陣内に踏み込み、うち一人が残った七人の中で最も年上らしい少女を軽々と抱えあげた。

『その娘は』と、他の男が言い掛ける。

『ウェーブの金髪にこの上品な面持ちの美少女・・・とくれば、私の主、サラ様であろう』

お姫様だっこ状態で、未だ意識の戻っていない少女の顔を、男達全員が見詰めた。

既に成人しているとすると、それにしてはあまりにも幼く見える。していないとしても、もうすぐ迎えるといった年齢。とにかく、十代後半か、二十代前半といったところなのだろう。

レースの付いた淡い空色の服に、ネックレスを首から下げ、抹茶色のバルーンパンツの下に脹脛の中ほどのレギンス、それから銀色のパンプスを履いていた。

彼女の背には小花柄のリュックがある。大学生か、専門学校生のようだ。

『そのようだ』

『やはり裏世界の者と魂を同じくする者だけあって、表世界の者も容姿は似ているようですな。年齢に、違いはあれど』

同感だ、と皆頷く。

『多分、それで間違いないだろうな。その娘、金の姫そのものだ』

『では、外見で判断するでしょう』

床に横たわったままの五人の少年少女をじっくり眺める。

先程の少女より少し年下らしい少年は、男子にしてはやや長めの、茶色がかったさらさらな髪と、インドア派を窺わせる白い肌が特徴的だった。

彼が着ているのは制服で、深い緑のブレザーにネクタイ、ズボンと同色系統のチェック柄だ。胸元には、皐嶺学園の紋章。

『このお方は・・・レイト様では？』

『確かに似ていらっしゃる。間近では見たことはないが・・・・・・・・間違ったなからう。では、こちらは・・・・・・・・誰であるか』

近くに倒れている漆黒のセミロングの髪の少女も、学校は違うようだが制服（因みにそれはセーラー服）を着ていた。その少女は先程の少年からまた更に年下に見える。

『他の“魔力持ち”――、もとい守護神様は、ステア様とティム様だけの筈であろうが・・・・・・・・この者はステア様でも、況してティム様でもあられますまい』

『では、“ 予言の君 ” か？』

ちよつと待て、と誰かが引き止めた。

『見てみろ。まだ男女合わせて三人もいる。うち二人がステア様とティム様にしても、あと一人余る』

3、4歳程度の男の子と、5、6歳の女の子。それから十代半ばの、これまた制服姿の少女。

『この幼子・・・・・・・・』

『ティム様だな。性別も変わってしまうものなのか・・・・・・・・』

『どうやら、この一番ちっこいの・・・・・・・・男の子だがステア様のようだ。残りの二人・・・・・・・・片方は“ 予言の君 ” であるとして、もう一人は。よもや、“ 魔の国 ” の守護神ではあるまいな？』

『分からぬ。まあどうであれ、いつかは覚醒するのじゃ。その時を待つのはいかなかな。何が起ころうとも、彼のご意思に背くことは許されないじやろうて』

『遅いな。もうとっくに儀式は終わったのだろう。何かあったのか？』

その声に、皆一斉に振り返った。

白装束の男達の中の背後にあったドアが開き、そこから偉そうな

三十代前半の男が顔を覗かせている。

『サフィール王！お体の具合は！無理してはなりません！』

顔を青褪めた一同を前に、王サフィールはふんぞり返って見せた。

「ほうら、この通りだ。今日は体調がすごく良いから大丈夫だ」

本当かなあ、と疑いの目が向けられる。

何しろこの数週間というもの、彼はずっと寝たきりで、時々調子の良い時に出回っては悪化するということを繰り返しているからだっ
た。

要するに、彼には前科がある。

「信じてはくれないようだな。ところで、何があった？教えてくれ」

『それについては後ほど。この計画には、彼と、あともう一人・・・

・・・預言者の協力が必要になりますぞ』

『幸か不幸か、その預言者は今ここにいらっしやる。・・・

ですが、我が君、運とは無縁な感じでございますな。 予言の君の

記憶が失われれば、忽ち預言者も失ってしまわれるだろう』

・・・いや、もう既に、言うべきか。

男の予言めいた言葉に、王は眉間にシワを寄せた。

「その因果関係は」

『分かりませぬ。“ 魔力持ち ” 間には数多の“連鎖”があり

ますゆえ、特定に至りませぬので』

それにしても、と召喚された七人のうち唯一消えた少年が横たわ
っていた場所を見遣った。

「やはり、死体は保たない。召喚するだけ無駄だったか・・・

だが依代は一人で、もはや十分」

『はい、その通りに御座います』

『王、この後は手順通り、預言の君らしき者を除いたその他は用意
されております、彼の宝玉に封印するのでしたね』

「ああ、そうだ。魂の同じ者が同じ空間にいるのは双方体に良くな
い。時が来るまでは、宝玉の中の異空間で眠っておいてもらわねば
な」

『過去の例も、あることですし……ね』

一瞬王の目が鋭くなる。それから、至極真面目な面持ちで深々と頷いた。

「……皆の者、解散を」

『承知いたしました』

儀式の間を出て行く男達のうち、一人が残って、『王、実は……』と、今まであったことを耳打ちした。

「なっ！何だと！それでは“予言の君”が誰なのか分からぬではないか！敵国がいつ攻めてくるか……！」

憶測の域なので絶対ではありませんが、と男が前置きをしてまたボソリと王に何かを告げると、王の表情が一変した。

「おお！そうであったならこちらに好都合だ。現実であることを願おうぞ」

『はい』

「王、サフィール王。それで、どうなさるおつもりですか。予言の君であるかもしれないと思われる者は二人。あの高貴なるお方が眠っていらっしゃる以上、判定は不可能です。我々の同胞の中には、覚醒まで待つのが良いかと考えておる者も多いようですが、私はそのようには思いません。王は、どのようにお考えで……」

儀式の間にいた白装束達——もとい、各国の神官達の中で一番若かった男が、普段着に着替えて王の前に跪いていた。

若い割りにしっかり神官の任を務める彼を、常々サフィールは評価している。

五、六十代の神官が多い中、二十代後半にして難なくこなしているのは心底凄いと思う。違う国の神官であるが、友人のような関係を築いているのには、自身の年齢に近いという理由に加え、こうした身分を越えた尊敬の念が関与している。

とはいえ、公の場、もしくは個人的にでも政治に関することにおいては、勿論自らの身分を弁えた言葉遣いを心がけている。

プライベートともなれば、面白いほどに違うのだが。

「うーん、どうかなあ」

気の抜けた調子の返答に、若い神官・ソロンは目を細めた。

ここまで公私にメリハリを付けなくてもいいと思うのだが。

「……いろいろな意味で不安だ。」

「ダメじゃないか、王のキミがそんなじゃ。ただの一国の国王ならまだしも……キミは、この“裏世界”のリーダー国である“太陽国”の王なんだぞ！俺ら神官だけでなく、民まで不安にさせてしまう」

王の言動に合わせ、政治に関することながらタメ口に切り替えた。

「そうなんだが、そうもいかないんだよなあ。王の一存で物事を決めてしまうのはいかがなものか。いっそ、何事も国民投票とか……」

・

「王！」

「……冗談さ」

本心的には冗談ではない。

王の一言で全てが決まるのだ、責任は相当重い。

王の政策によれば情勢は百八十度変わるし、それが民に受け入れられなかった時はクーデターだって起こる。

やはり、慎重にすべきだと思う。……だからこそ、迷うのだが。

それに、国民の気持ちは宮廷生活の国王には量り兼ねる。

何が今一番必要なかは、本人達にしかわからない。その意見を出来る限り反映させられるのが理想的な賢王だと考えている以上、

目安箱のようなものがあればいいのにと考えてしまう。

「冗談は時と場合を考えて言うように。・・・その意見、強ち間違っていないけど、問題なのはキミの決断力の無さだ」

「それはそれは。ソロン神官も苦勞なさいますなあ」

「まるで第三者のような口ぶりだな。ところで、そろそろ本題に戻るよ。で・・・どうするつもり？」

「・・・・・・。取り敢えず待とう。どちらにせよ、旅させないといけないだろう？そうして“魔の国”にバレないように移動するなら、徒歩で各国に行くしかあるまい。十国の内、半分は敵国の領土だしな。その上空をワールドコネクトベルトで行くのは危険としか言いようが無い」

「・・・・・・その旅の中で、分かるのでしょね、予言の君が誰なのかということが」

ソロンは口調を元に戻した。

ああ、と頷いて、サフィールは六人の子供達を思い浮かべる。

その内の四人の少年少女は、各国の神官によって宝玉の中に封印されたと、つい先ほど報告があった。

残った二人の少女の内の片方が味方で、もう片方が、敵・・・・。

「すぐに、事態を納得して協力してくれるだろうか」

「すぐに、というのは難しいでしょうが、表世界から裏世界に来て、もといた世界に戻れないのだから――、せざるを得ないかと」

「我々は、卑怯だな」

「卑怯でも、裏世界を救うことで、表世界も救えるのですよ。仕方ないことです。何と言いましても、表世界は裏世界に、裏世界は表世界に影響を与えるのですから」

表世界は現実世界のことで、裏世界は、虚像とか、パラレルワールドといった一見曖昧な世界のことだ。

詳しいことは分かっているが、裏世界は『とある人』の中で生まれ、拡大したものだという。

西暦二三四〇年現在となつては、表世界と裏世界はコインの表裏——、要するに表裏一体の存在で、一方無くしてはもう一方は存在出来ないようになってしまっている。

だから、厄介なのだ……。

裏世界が存続の危機に瀕している今、表世界も同様な状態に陥りつつあった。

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Part 2

「お兄ちゃん・・・」

道路脇のアスファルトの、血が付着しているところ。

篠原綾乃の三歳違いの兄・湊生は、三年前そこで死んだ。

一見事故の例としては在りがちな――トラックがコンビニエンスストアに突っ込むという事故で。

でも、その事故は単なる事故ではなかった。

誰も。誰も、乗っていなかったのだ。

それにも関わらず、トラックは道路を走り、突如として右折して歩道を歩いていた下校中の湊生を撥ね、そのまま近くのコンビニに突っ込んだ。

運転手はいなかった。

目撃者はそう訴えた。

後にトラックの持ち主は発見されたが、100パーセント確実のアリバイがあった。

警察は轢き逃げ事件として処理し、今もなお捜索中である。

犯人など、見つかるはずが無い――綾乃はそう思っていた。だって。

湊生は既に何度も同じような目に遭っていたから――

でもいつだって、心配する綾乃に「何泣きそうな顔してるんだよ。大丈夫だって」と、事故に遭った張本人のくせに、まるで何も無かったかのように笑いかけてくれたのだ。

だから、死んだのが信じられなかった。

自転車が最高速度になっている時に限って、ブレーキが利かなくなつて崖スレスレのところで横転したり。

頭上に八階建てのビルから鉄骨が降り注いできたり。

本当に、そんなことはしよっちゅうで。

その都度、二人の母である明日香は氣を失いそうなまでに心配していた。

無事なことに、異常なまでに安堵して。いちいち泣いた。

綾乃には、どうしても自然現象には思えなかった。

もっと、こう——、意図的な。

そういう点で湊生は、所謂不幸体質とは明らかに異なっていた。

もう、彼はいない——。

綾乃だって、分かってはいる。ただ、認められないだけで。

其の時、暗闇の中で立ち尽くす綾乃の目の前に兄の姿が映った。

《待つて》

駆け寄ろうと一步踏み出す。

《待つて……行かないで》

距離は、一向に縮まることなく。

寧ろ、近付こうと歩いた分だけ離れていった。

だんだんとその存在が、薄れて。

記憶が、拒否するかのように湊生の存在する記憶の断片を吐き出していく。

気付けば、偶然目に留まったのが兄だっただけで誰か限定といったものではなかったらしく、他の人達も写っていた。

お父さんに、お母さん、近所の人に貰ったばかりの子犬のメイ・・

その今までの何もかも全ての記憶が、ガラガラと崩れていった。った。

抜け落ちて、空のようになっていく心。

それを、綾乃は為すすべも無く受け入れるしかなかった。

(・・・ここは、どこ?)

目覚めた少女は、記憶を全て手放した状態だった。

表世界から裏世界に来る過程で何らかのショックが加わり、そうなることはよくある。

おそらく、七人のうち少なくとも半数はそうになっているだろう。上半身をゆっくり起こし、自らのいる部屋全体を観察した。

綾乃の眠っていたベッドの横には、外開きの大きめの窓があり、近くにはベランダもある。部屋の中央には円形のテーブル、そこに椅子が二脚、壁際にはドレッサーやクローゼット等が備え付けられていた。

全体的に、桜色で統一されている。

いかにも、女の子の部屋っていうか。

見たことがない部屋なのは、明確だった。

「・・・!!」

窓の向こう。

そこには、信じられない世界が広がっていた。

普通ならば、太陽からの光に地面が照らされているはずなのに、その真逆の光景がそこにあった。

地面が黄色ともオレンジ色とも赤色とも言える色に輝き、空の彼方は暗黒の闇だった。

まるで、太陽から宇宙を見渡しているようで。

すごく、すごく綺麗だけど。

怖くなった。

身体が震え始めて。

記憶を失い、感情に乏しくなった彼女が最初に抱いたものの、それが恐怖だった。

美しい世界への、感動ではなく。

綾乃は、不意にベッドから降りて駆け出した。

ベッドから対極的な位置にあるその部屋のドアを、乱暴に開ける。

開けっ放しのまま、近くの螺旋階段を駆け下りた。

ここは。

ここは、一体どこ。

自然と、目頭が熱くなっていく。

なんだろう、直感的にだけれど、帰れない気がして。

そうしてふと、気付く。

帰るって、いったいどこに？

脚の動きが鈍くなり、ついに止まった。

そうして、また意を決したように走り出す。

周囲に構っている暇などなくて、エプロンドレスを着た小間使いらしき女の人達に何度もぶつかったけれど、それどころではなかった。

女の人達の焦った声と、食器が赤い絨毯が敷かれた床に落ちて割れる音がしたが、それどころではなかった。

一階まで下りてきて、玄関と思われるドアを思いっきり開いた。
そうして綾乃は、目の前に広がる世界に絶句した。
窓から見えた、そのままがそこに映る。
夢では、ない———。

「どうして、泣いているのです？」
その声に、綾乃はびくりと肩を震わせた。

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Part 3

「どうして、泣いているのです？」

その声に、綾乃はびくりと肩を震わせた。

声のする方に目をやると、フードを深く被った紺色のマントの少年が少し離れたところにある巨木の根本に鎮座していた。

「……あ、私……」

言われて自分が泣いているのに初めて気づき、先程までいた建物の前にある白い階段を下りながら慌てて目尻に浮かぶ涙を拭う。

階段を下り切ったところで、立ち止まった。

少年との距離は、おそらく6〜7メートル。

「何か、お辛いことでも？」

「えっと……その」

「言いたくないことであれば、仰らなくて全然構いませんけれど……、あまりにも貴女の顔が悲しそうに見えて……」

どうしても、放っておけませんでしたが、そう言う彼の表情はフードで窺い知ることとは出来ないけれど、何となく空気が柔らかくなった気がした。苦笑、しているのかもしれない。

そんな彼の姿に釣られてか、口元にほんの少し笑みを乗せ、綾乃は近寄ろうと更に一歩踏み出した。

「近寄らないで！」

少年が焦ったように叫び、その気迫に圧されて綾乃は怯えた。

記憶がなくて、頼りなくて、感情が些か機敏になっているのかもしれない。

「あつと。．．すみません。怖がらせるつもりはなかったんです。それは申し訳なく思っています。が、本当に僕に近付いてはいけません」

綾乃の様子を見てとった少年が、すかさず詫びを入れる。

チカヅイテハイケナインデス．．．．。

その拒絶の意味がさっぱりわからなくて、どうして、と問い掛けようと口を開きかけた。

が、タイミング悪く、少年の目は綾乃が先程までいた建物の方に向けられ尋ね損なってしまった。

「．．．．『常夏の城・太陽城。そは“太陽大命神”なる者に治められし国なれば、彼の魔の国の侵略を許さずして．．．．』」

「それは．．．．？」

「『歴史ノ書』の各国史のこの国、太陽国の項中で最も有名な一節です」

少年の言っていることが理解出来ず、綾乃は首を傾げる。

「太陽国？」

「『その大地夕暮れに染まりしは、かくも美しからん。消えゆくものにこそ“そ”は宿れり』」

少年は、また別の一節を呟いてそっと立ち上がった。

それから、少年とは逆に階段の一番下に腰を下ろした綾乃へ視線が移される。

「貴女は・・・この世界の人間ではない、ですよね」

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Part 4

「君は．．．この世界の人間じゃあない、ですよね」

ごくり、と唾を飲み込んで、聞こえるか聞こえないかというほどに小さな声でその問いに答えを返す。

「私は．．．．．せん」

「はい？何でしょう？」

「私は．．．何も知らないんです」

「．．．．それは．．．．．ということですか？」

「何も．．．．覚えてなくて．．．．」

「名前も、家も．．．家族も？」

ごくり、と綾乃が頷く。

少年は僅かに驚いた様子を見せたが、それは彼の中で確信へと変わる。

「じゃあやっぱりその可能性が高いです。きっと、記憶を飛ばされてしまったのでしょうか」

「記憶が．．．飛ばされた？それって．．．？」

「近頃、いるんですよ。自分が誰か分からない、ここがどこなのか知らないという方が。でも、その人達は大体が次第に記憶を取り戻します。そうして、この世界と並行して存在する異世界が存在することが知られるようになったのです」

「異世界？」

「はい。その異世界はこちらより未来を進んでいるらしく、“表世界”と名付けられました。それに対し、こちらは“裏世界”と名付けられたのです」

「じゃあ．．．私は、その“表世界”ってところから来た異世界人で、こっちの世界に来る時に記憶を失くしちゃって．．．．」

でもそれは、しばらくしたら戻る、ってということ？」

「そういうことです」

「・・・・・・・・・・。」

大き過ぎる事実、綾乃は考え込んだ。

と、突然チチチと鳴きながら一羽の鳥が少年の頭向かって飛んで来て、そのままちょこんととまった。

全身は基本黄緑色で、頭の辺りはオレンジ色。

二色のグラデーションが愛らしい、スズメ位の大きさの小鳥だった。

少年がそつと手を伸ばし小鳥を撫でると、小鳥も嬉しそうにその手に頭を擦り付けた。

「その、鳥・・・・・・・・。」

「ああ、この子はですね、数日前出会ったんですけど・・・・・・・・どうしてかついて来ちゃうんですよ。・・・・・・・・ほら、クウ。」

呼ばれて、クウという名らしい小鳥は、差し出された少年の手に移った。

服のポケットから何やらクッキーのような焼き菓子を取り出し、少年はそれを与え始める。

はた、と何かを思い出したのか綾乃の方を振り返った。

「そういえば、持ち物で何か手掛かりになるものとかは無いでしようか」

綾乃の少し膨らんだ制服のポケットを指差す。

どうやら、自分がポケットから焼き菓子を取り出したことでその可能性に行き着いたようだ。

その意図を捉え、ポケットに手を突っ込んでごそそと手探りで搜索を始めてすぐ、四角くて固い物体を出した。

「あ・・・・・・・・何これ・・・・・・・・学生証？」

「何て読むんだろう・・・・・・・・こう・・・・おう・・・・学園？・・・・・・私立、皐謳学園中等部二年A組・・・・・・・・篠原綾乃？」

そこに写る写真は、間違いなく自分のもの。

「それが、貴女の名前なのでしょうね」

「篠原……綾乃……、それが、私の名前……。記憶が無いからなのかもしれないけど……。違和感無い」

「きつとそうですよ。貴女にお似合いの名です。違っていたら、記憶が戻ってから直せばいいんですよ」言って、少年が笑う。

「……。あ、ありがとう」

少年のあまりにも直球な言葉に、思わず顔を赤らめてしまい、更にはお礼の言葉が吃ってしまう。

「綾乃……。さん。改めて説明します。ここは、裏世界。そしてあれは、裏世界にある太陽国の城・太陽城です。太陽国は裏世界の国々を総合統治する、二大国家の一つで、現城主は太陽国第十二代国王サフィールⅡヴァーイェルド様です。」

「これがお城……。？あ！うわ、何！？」

純白の城が、太陽国の特徴である夕日のようなオレンジとも赤とも言える色の光で、幻想的な感じに染まっていく。

そんな様が、綾乃の目に映った。

「綺麗……」

「はい。」

二人は見惚れ、その場に沈黙を落とすが、不意に綾乃が俯いた。

「ねえ、私は……。どうして城の中になんていたのかな……」

けれど、少年はその問いに答えようとはしなかった。

「貴女は、これからどうするおつもりですか」

「どうって……」

綾乃は明らかに不安そうな顔をした。

「やはり……。では、僕が国王陛下に取り次いで来ましょう」

「は……？そこで……どうして国王様……？」
話が跳躍して、さっぱり分からない綾乃はポカンとしている。

「綾乃さんは、先程『どうして城の中にいたのか』と仰ってましたよね？思い出したのですが、つい先日王城にて何らかの儀式が執り行われたそうです」

「えーと、それで？」

それがどうかしたのかと言いたげな視線を送る。

「表世界から人を召喚する儀式ではないのでしょうか……と、つまりはこういうことです。」

「それが正しかったなら、私がこっちに來たのは事故なんかじゃなくって、もっとこう……意図的なものがあるってこと？」

「あくまでも仮定の話ですが」と少年は付け足した。

「でもでも、城にいたのは間違いないし……何か聞けるかもしれないでしょ。だから国王様に会うんでしょ」

「はい。その通りです」

「我々のような“パシエンテ”へのご支援、日々感謝申し上げます
ります、国王陛下」

「おお、レン。気にするな。当然のことをしているだけだ」

「……あの人、名前レンっていうんだ……そういえば名前聞くの忘れてたなあ。っていうか、“パシエンテ”って何？」

国王らしき男の言葉から少年の名を知るといふ、思わぬ形での情報入手に綾乃は内心そう呟いた。

あの後、二人は城の衛兵に国王との謁見を申し込んだ。

相手が相手なので、承諾される可能性は明らかに低いと思っていた綾乃は、『玉座の間にてお待ちです』という返答に少なからず驚いていた。

だがそれ以上に驚いたのは、少年の態度。

『謁見をお願いします』と言った時の彼は、し慣れているようで全く動じていなかった。

城の内装もよく知っていて、『こっちです』と国王の待つ玉座の間に誘導してくれたのも、衛兵ではなく彼だったのである。

で、そんな彼は今、国王に挨拶の決まり文句を並べているところだ。

一方『呼ぶまで待って』と言われた綾乃は少年の指示で、玉座の間のドアの隙間からこっそり話を聞いている状況である。

「ですが……その為、私は陛下にご迷惑をお掛けしている身。申し訳なく存じます」

どうやら、その“パシエンテ”というのを理由に、少年を含めた人達は何かして貰っているらしい。

玉座から下りて、片膝をついたまま悲しそうな表情を浮かべる少年の前にしゃがみ込んで、国王・サフィールは慈しむような微笑みを向け、そっと少年の頭の上に手を置いた。

「だから、気にするな。お前は賢く冷静で、何より優しい。私はそんなお前を信頼もしているのだぞ」

「ありがたきお言葉……」

「だが、レン、実は今……城内で騒動が起きているのだ。緊急の用件以外は、控えて頂きたい。また後日、いや騒ぎが収束次第使いを送るから、その時話そう。時間を取る」

「お言葉ですが陛下、その騒動……よもや、大切な客人の消息が掴めないなどでは」

待ってましたとばかりに口を挟んだ少年に、サフィールは驚きを隠せない。

更に、離れたところで聞いている綾乃も、本題に入ったことを悟り気を引き締めた。

「……………そうだ。お前は本当に勘が鋭い。隠し事も出来たものではないな」

「その客人については？」

「気付いたのは半刻ほど前だ。この広い城内を総出で搜索させたが、発見には至らなかった上に、城下に下りている可能性がある、その客人を見掛けたメイドが証言したとも報告が来ている」言いながら、サフィールは玉座に戻ろうと少年に背を向け、歩き出した。

「陛下、私の話は……………その件に関わってくるのです」

「……………どうということだ？」

「お目通り頂きたい者が御座いますが、お許しを頂けますか」

問いの言葉を吐き、立ち止まったサフィールの是非を聞かずに少年は立ち上がり、綾乃が覗いているドアの方へ踵を返してまっすぐ突き進んでいく。

サフィールの方は何事かとその様を目で追って行った。

ドアが開けられ、綾乃が姿を現す。

「この方、名を篠原綾乃さんと申されます」

ただ呆然としていた国王の表情が一変した。

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Part 4（後書き）

『パシエンテ』という語は存在します。意味も一緒です。
スペイン語で、『paciente』と書きます。

何か気になる人、もしくは先読みしたい人は検索してみてください。
（ネタバレですが、えーと、はっきり言います。物語に関わってきますが、一話前を書く時に即断即決な感じで出来た設定なので、この小説を書くにあたって設定した謎の中枢にはリンクしません・・・はい。）

第一章『光の掟』・第二話『蘇る記憶・呪われた旅路』Part 1（前書き）

西暦2340年。

表世界と相対する世界である裏世界には太陽系の惑星を模した十の国があり、裏世界の各国の“魔力持ち”は自国と表世界に存在する惑星を守護する役目を持つため、“守護神”として敬われていた。裏世界に召喚されてしまった記憶喪失の少女・篠原綾乃は、太陽国国王の命で秘密裏に“魔力持ち”を探し、近い未来起こると言われている戦争を阻止するため、一人の少年を伴って旅に出る。だが、巨大で狡猾な陰謀下で運命の歯車はあまりにも残酷な方向に回り始め……。未来・現在・過去が全てリンクする、第三次魔法大戦ストーリー。※他のサイトにも掲載しております。

第一章『光の掟』・第二話『蘇る記憶・呪われた旅路』Part 1

「その子は……！」

先程とは打って変わって、安堵した表情を見せる。

「彼女、どうやら記憶を失くしていらっしやるようです。」

「記憶を……？」

「はい」

「……なるほどな」

サフィールも少年同様、異界の者について知っているため、納得の色を示した。

それから改めて、綾乃の方を向き直る。

「私の名はサフィールⅡヴァーイェルド。この国の王だ。お前の名は……確か、綾乃……だったか」

「はい。篠原綾乃です」

少し間を置いて、「あの、陛下、先日行われたといいます儀式……召喚の儀では御座いませんか？それ以外に、私には思い当たることはありません」と少年がサフィールに問うた。

秘密事項ながら少年を信頼してか、さも隠すつもりはないというように頷く。

「そうだ。その召喚した少年少女数人の内の一人で、“太陽大命神”の、かもしれぬ娘が、綾乃、お前なのだ」

「太陽大命神かもしれない、ではなく……太陽大命神の、かもしれない……で、ございますか？」

「左様。」と、前よりも深く頷いて言った。

だが、今は肯定するだけでそれ以上言うつもりはないらしく、話題を転換させる。

「綾乃。記憶を失わせてまで呼び寄せてしまつてすまない。だが、お前の住んでいた世界も、こちらの世界が危機に瀕していることでその影響を間接的だが受けている状態にある。記憶を失っている今、故郷のことなどさっぱりかもしれん。それでも、我々に協力をしては貰えないだろうか」

「それで……いつかは、帰らせて貰えるんですか」

「勿論」

「具体的には何を？」

「旅に、出てもらうつもりだ」

「た……旅!？」

「綾乃さんを旅に……って、護衛はどうするのですか!？」

あまりに唐突な発言で綾乃は困惑を隠せず、また綾乃が太陽大命神に関わる者だと知ったばかりの少年も、過剰な反応を返した。

「そうだな、忘れていた。確かに護衛は必要だ。それで、どうだレン」

「……何がです？」

呼ばれた意味が分からなくて、少年は首を傾げたが、次いで発せられるサフィールの言葉に全てを悟った。

「綾乃の旅の供をする気はないか」

「……だ、ダメですよ!！」

「何故だ」

サフィールの表情が曇る。

「陛下、私はパシエンテなんですよ!？」

「関係などない」

「大あります! お考え直し下さい!」

少年が一緒なら旅もいいかな、などと考えていた綾乃は少しどころかがっかりしていた。

そんな中再び登場した知らない単語、パシエンテ。

だから、一体何、それって。

その意味が分からないままだと、以後の会話で綾乃は蚊帳の外に

なりそうな気がしてならなかったため、言い出し難いが口を開いた。

「あの……」

「どうした、綾乃」

「パシエンテって、どういう意味ですか……?」

「一言で言えば、病人のことです。不治の病を持つ……」

「え、それってうつ……!」

「そのようなことはない」

「ああ、良かった……」

少年には非常に失礼にあたり申し訳ないが、心底綾乃はほっとした。

「僕の病は、“欠損病”です。罹患してしばらくは高熱が続き、回復しかけた頃に突如として記憶の一部が欠け、永遠に戻らなくなってしまうのです。失われた記憶が幼い頃のモノであればあれば、得た技術・知識が消えてしまったりし、誰か他の人と出会った時期と被ってしまった場合……その人に関わる全ての記憶が連鎖的に抹消されてしまうなどといったことも基本症状の例の一つですね。更に、滅多にないのですが、記憶領域の縮小に伴って、脳内の神経領域の圧迫による負担で全身麻痺を引き起こすことがあります。」

「何それ、聞いたことがない……」と、綾乃は愕然と呟く。

「当たり前ですよ。表世界には存在しないんです。因みに、この病気の因子を持つかは遺伝で決まり、それを潜在的に保持していても発病するかはわかりません」

「得た技術と……知識?……なら、読み書きも出来なくなるなんていうのは……」

「有り得ますね。といいますか、現に知人に一人。」

ええと確か、と顎に拳を当て、少し上に視線を投げかける。

「じゃあ……貴方にも、失った記憶がある?」

「あります。ですが、どうやら僕には麻痺もなく、記憶が無いからといって生活に支障はないんで軽い方です」

「それなら何故、ダメなの?」

「そうだ。問題なんて無いだろう」

サフィールもそうだそうだと言わんばかりに少年に言う。

「・・・・・・・・・・」

二人に追い詰められて、少年は口籠った。

「それとも、私とじゃ嫌？」

「そういう訳では・・・・・・・・・・！ただ・・・・・・・・」

「ただ、綾乃さんは・・・・・・・・・・、太陽大神様と縁のある者。例えば異世界の方でもご身分は遥か上となります。いずれは、僅かなれど表舞台に立つ時が来るやも御座いませぬ。そんなお方が、私と共にいるのを見られますのは、避けるべきです。ただでさえ、陛下が私共に関わることを快く思っていない者も多いのです。これ以上信頼を揺るがすようなことはなさって欲しくはないのです・・・・・・・・・・！」

辛そうに顔が歪む。

そんな場合ではないというのに、彼の一人称が、その言葉を向ける相手に合わせて僕と私が切り換えられていることに今更ながら綾乃は気付く。何とマメな。

少年の真面目な性格と、サフィールに対する忠誠心が覗えた。

「・・・・・・・・レン」

自分のことを親身になって考えてくれたの発言だと分かり、嬉しかったのかサフィールの口元が思わず緩む。

その様子を見て取ってから、少年は綾乃の方を向き、まっすぐ見つめた。

「言いましたよね、綾乃さん。”近付かないで下さい”と。人は、パシエンテを含む、僕らに近付く者までもを遠ざける。風当たりは確実に冷たくなる筈です。たくさん病気が有ります故、うつる病も数多くありますが、うつるうつらないなど・・・・・・・・彼らにとつてはどうでもよいのでしょうか。ただパシエンテとその関係者であれば敬遠されるのです。僕は、綾乃さんを・・・・・・・・そのような目に合わせたくはなかったのです」

「だから、ここに来るまでずっと私と距離を取っていたんだ……」
「やっとわかった。」

あの拒絶の意味は――。

城から出て来た綾乃がたとえ偉い人と関係なくっても、きっと彼なら同じように守ろうとしていたに違いはない。

会ってまだ半日も経っていないのに、彼がどんなに優しい人かわかる。

記憶が無くて自分の居場所が無くて。不安だけど……彼がいてくれたら安心する。

出来ることなら……彼と一緒に、旅を。

「はい。本当に申し訳ありませんでした」

「ううん、気にしないで。私のこと考えてくれたの行動だし。ありがとう。えっと……貴方の名前……は……」

「なんだレン、名乗っていなかったのか」

「忘れておりました！綾乃さん、すみません。僕の名は、レウィン。レウィンⅡエステイです」

「エステイ……君」

なるほど、だからその略名でレンという訳か。

おずおずと名を呼んだ綾乃に少年は微笑む。

「はい。」

「私……貴方について来てくれるなら旅に出る」

「……綾乃さん……？さっきの話……」

「分かっているけど、貴方がいい。強かろうとなんだろうと、話したこともない人といきなり旅なんて嫌。私はこっちの世界で何とか頑張っ、自分のいるべき場所にちゃんと帰りたい。今何もせずに帰って、自分の世界が侵されていくのを……ただ後悔しながら呆然と見ることになるのは嫌。して後悔するならいい。しなくて後悔するのだけは、どうしても自分が許せない」

「君は本当に……出来た子だな」

「違います。ただ、我儘なだけなんです」

感心して、確かに知っている人の方が良いと言って笑うサフィールに、綾乃は頭を振った。

「もし国への信頼がどうので国王様自身がエステイ君との旅を却下するなら、仕方ないと思った。きつと諦めてた。．．．でも、国王様がそれを勧めて下さる以上、一緒に行きたくて．．．．．
．．．エステイ君、ごめんなさい。我儘．．．過ぎるよね．．．」

「綾乃さん．．．」

「私は、貴方をお願いしたい」

「どうかな、と上目遣いで問うた。

「綾乃さん、僕は．．．」

本当は．．．本当は、僕も一緒に行きたい．．．。
気持ちにはハッキリしてる。

けれど、決心は出来ない。

この旅は、呪われた旅。

秘密裏に出発し、存在が敵国にバレたなら即時妨害及び抹殺命令が施行される筈の旅だ。

命に関わる。

見れば、自分と同じ年位らしい少女は平然としている。

分かっているのだろうか、今貴方が置かれた状況を。貴方があつ
さりと返答した、その度の危険度を。

危ない。恐ろしい。それなのに。

陛下——サフィール様の様子からすると、恐らく僕が”是”と言った瞬間に綾乃さんの、僕というたった一人の護衛を引き連れた旅が近々決行されることになるだろう。

綾乃さんの”知らない人は嫌です”発言に同意していた彼だから、きつと僕以外にもう一人護衛を付けるなど考えてはいないだろう。

元よりその気だろうし。

僕には、自惚れかもしれないけれど、人並み以上の知識はあると言えるだけの自信はある。とはいえ、武術においては残念な状態できつと、護衛とは名ばかりの——寧ろ、情けないことにも逆に守られてしまう方に回りそうな気がしてならなかった。

「……だから……だから……」

「綾乃さん、一つ……質問させていただいてもよろしいですか？」

「何？」

「僕は……戦力にはなりません。それで、どのようにして……？」

「逃げる」

「はいっ!？」

「……逃げる!？」

「だから、逃げるの」

何を、そんなにあっけらかんと……!

とても重要なことなのに、彼女はさも当たり前のように言い放った。

今までそんな素振りが無かったから思わなかったのだが、綾乃さんは生来能天気な子なのだろうか。

脳裏に一抹の不安が過る。

それは、どんどんと増大していった。

「この旅が……如何に危険か、その点は……」

「一応、分かってはいるつもり。敢えて獣道を通る的な感じで細心の注意を払って旅を」

「余計に危ないですよ!! 毒を持つ虫や植物、動物だっているんです!」

しかも、国によって気候が天と地ほど違う。

伝え聞いたり、本で読んだりして表世界の——綾乃さんが住んで

いたという世界についてはいくらか知識があるが、彼女にとってここは魔力が存在する異世界。

勝手が違うのだ。

「まあ……確かにそうだけど……うん、大丈夫」

「何が大丈夫なんです？」

何処から来るのかわからないその自信に、レウインは眉間に皺を寄せた。

「一人じゃないから」

綾乃は笑う。

「ですが、戦闘になれば、僕はきつと……いえ十中八九足手纏いに……！」

「レン、隣国の水星には守護神がいる。彼のところまで行けさえすれば彼が戦力になってくれる筈だ。これは———守護神達を集めるための旅なのだからな」

「それが、旅の目的なのですか、陛下」

第一章『光の掟』・第二話『蘇る記憶・呪われた旅路』Part 2（前書き）

西暦2340年。

表世界と相對する世界である裏世界には太陽系の惑星を模した十の国があり、裏世界の各国の“魔力持ち”は自国と表世界に存在する惑星を守護する役目を持つため、“守護神”として敬われていた。裏世界に召喚されてしまった記憶喪失の少女・篠原綾乃は、太陽国国王の命で秘密裏に“魔力持ち”を探し、近い未来起こると言われている戦争を阻止するため、一人の少年を伴って旅に出る。だが、巨大で狡猾な陰謀下で運命の歯車はあまりにも残酷な方向に回り始め……。未来・現在・過去が全てリンクする、第三次魔法大戦ストーリー。※他のサイトにも掲載しております。

第一章『光の掟』・第二話『蘇る記憶・呪われた旅路』Part 2

「それが、旅の目的なのです、陛下」

「ああ。目的を言うのが遅くなってすまない。私が各国の神官を呼び、儀式を行ったのは……それは、こちらでまだ残っている守護神達と魂を同じくする者達を召喚するためだ。そうすることで表世界に魔の手が及ぶを防ぐと同時に、守護神達の身の安全を図ることが出来るのだ」

「では、綾乃さん以外にも召喚なさった方々が……？」

驚いたような口ぶりだが、レウインは予想はしていたのだろう、表情は少しも変えなかった。

「いる。綾乃以外は、今は皆宝玉の中で眠っている状態だ。旅が始まれば、綾乃、お前に渡すつもりでいる。守護神に出会って旅の同行、もしくは同行はせずとも協力が叶った場合は彼らに合った宝玉を手渡してやって欲しい」

レウインは急に黙って、考え込んだ。

もしその宝玉を綾乃に託した場合、守るべきものは増える。

しかも奪われた場合……終わった、と思ってもいいかもしれないほどの。

でも……水星国は近い。

更に他の国に比べて城が太陽国寄りにある。

ならば……。

「水星国……そこまでなら、大丈夫かもしれません」
俯いたまま、ぼつりと言った。

少々小さめの声だったが、二人にはしっかりと届いていて、綾乃が期待に目を輝かせる。

「っていうことは……!？」

「行きます」

顔を上げた彼の口元が緩む。

相変わらず深くフードを被っているから、顔の半分ほどは見えないけれど。

「いいの!？」

「はい。よろしくお願いします、綾乃さん」

「やったー!」

綾乃が高く飛び上がる。

その嬉しそうな様子に、サフィールもにっこりと笑う。

「良かったな、綾乃」

「はい! 国王様も、ありがとうございます!!」

「レウィン、承諾に礼を言う」

「そんな……。頭を下げないで下さい、陛下。私も、本当は同行したく思っていましたので無理はしていませんのです」

「なら、良かった。あと、もう一つ頼みたいことがあるんだが……。そっちの方も頼めるか？」

「何でしょう？」

「綾乃は記憶が無いが……。話せたりしているだろう? だから、基礎的な記憶というか知識はあるのだ。だがあくまでもそのベースは表世界のモノ。裏世界についてはさっぱりだろう」

「そうですね」

「そのまま旅に行かせるのは不安だし、無知なのは危険だ」

「私が……。綾乃さんに、教えればいいんですね？」

「うむ、頼んだ」

こうして綾乃は、翌朝からレウィンのスパルタ指導の下、裏世界について勉強することが決まった。

ただ、彼も忙しい人で、もう一人宮女のクイルさんという方が勉

強には付き合ってくれるらしい。

また、そのクイルさんという人は、綾乃専用の侍女で身の回りの世話も担当してくれるということだった。

あくまで予定であり、変わるかもしれないのだが……旅立つまではおよそ一か月半。

サフィールにより、昼間目覚めた、あの時の部屋へ通された綾乃はそこが自分用に用意された部屋だと教わり、夜をその部屋で過ごした。

アヤノ……………

ヤッパリ……………キテクレタンダナ……………。

城の地下室の一角。

光も無く真っ暗なその部屋の中で、霞んだ様な声が小さく響く。

床から天井まで繋ぐ、まるで太い柱のようなガラス製のチューブの中に、一人の少年が眠っていた。

データの如く、時々白い衣を纏った彼の全身をノイズが駆け巡る。見れば、向こう側が透けている部分もある。

存在が曖昧で、実態ではない、ということだ。

そんな状態のまま長く眠りの中にあつた少年の目が、薄く開いた。

「綾乃様！世界史のお時間でございます！」

レウインと、男のようにゴツイ宮女のスパルタ教育が始まって四日目。

いつもは二人でか、もしくはレウインが教えてくれるのだが、今日は用事があるらしくレウインは城に来れないらしい。

綾乃は勉強用のテーブルに腰掛け、黙々と書物を読み耽っていた。一通りの歴史を学ぶためである。

綾乃の服は約数十万円という超セレブ状態となっているが、それは当たり前、仮にもここは王宮だ。客人にはそれ 相応のおもてなしがある。

それよりも更に凄いのはこの宮女。

「ねエ、クイルさん。“魔力”て、具体的に何？」

一人で綾乃の世話係を難なくこなす宮女・クイルは、そうですね、と言って少し考え、

「魔力を持つ者・守護神には属性と特殊能力がありますね。例えばこの太陽国の守護神・・・それを太陽大命神というんですが、その場合は、属性は光、特殊能力は制御、時間を司ります」

「セイギョ？」

「他の守護神達の暴走を止めるためのモノですよ。・・・ただ、多くの条件があるので、有効とは言えませんが」

聞いて、綾乃はやっぱり裏世界でも太陽は絶対的存在なんだなあ、と感じた。

今まで学習したことをまとめると、こうだ。

この世界では、“魔力”という摩訶不思議な力が存在する。

それを駆使出来るのは、数少ない人々のみで、彼らをこの世界ではまんまだが“魔力持ち”と呼ぶ。

“魔力持ちは”守護神”になることがこの世界では義務付けられているという。

重ねて言うが大変人数が少なく、裏世界に存在する国全て守護神が揃うことは稀で、魔力持ちの証としては翼と、魔力開放時の瞳と髪の変化が上げられる。

「むう……」

綾乃は唸った。

本当にこの裏世界の歴史は興味深い。実に結構だ。

でも……本当に魔法なんて有り得るのだろうか？

また、魔法と違って実際には無いというのは常識である。漫画やアクション映画での話は別として。

記憶が無くとも、尋常じゃないと思ってしまう。

だが、真面目で知識が多い宮女クイルまで言うのだ、嘘である訳ないだろうと綾乃は頭を抱え、この理を超越した国々の歴史書を見た。

隣には、表世界——綾乃の住んでいたらしい世界の歴史の年表が置いてある。

二つの世界は関わりが深いため、両方を並行して学ぶ必要があるのだ。

確かに、第一次魔法大戦と第二次魔法大戦というのがある。それは、元の世界でかつてあった第一次・第二次世界大戦と同じ年にあったことであった。どうやら本当に二つの世界は連動しているようだ。他にも、革命、紛争、条約締結、大陸発見など……表世界であった“世界を揺るがす出来事”は、この世界で何かしらの大イベントがあった年と一致している。

二〇〇六年のところを見た時——綾乃は数秒固まった。

《冥王星、太陽系連盟を脱退。》

「太陽系って連盟だったんだ・・・？」

「はい。綾乃様達のいた表世界で冥王星が太陽系の一つというポジションを失くした事で——惑星の守護していた国の一つである冥王星国を外すしかなかったのです」

綾乃は、立ち上がって窓の側に寄り、窓ガラスに手をつけて下を見た。

その下では、兵士達が訓練中なのだが、度々綾乃はそうして彼らを観察していたのだった。

「ずっと・・・」

「はい？」

「ずっと、思ってた。兵見て、軍備強化中っぽいなって。それに、国王様・・・じゃなかったお父様が昨日、『今日は武官はいない』って言ってた。・・・たとえ昨日一日のことだったとしても、王がその時城にいて——武官・・・兵士が一人もいないって普通は有り得ないよね・・・」

綾乃は、城に”養女”という形で住むことになった。

そこで、サフィールは自分を”お父様”と呼ぶように綾乃へ言ったのである。

いつも訓練をしている兵達が、昨日は見えなくて。

どうしたんだろうと思って昨日の夕方にサフィールに尋ねていたのだ。

「・・・冥王星国が、敵に回ったんじゃないの？」

クイルは悲しそうに、深く頷いた。

「守護神の役割の一つが、言っていないかもしれませんが——表世界の惑星の守護なんです。彼らは忙しく、もしものことを考えればどうしても前線で戦っていたくことが出来ません。ですから・・・」

第一次・第二次魔法大戦時だけは、守護神が先陣を切って戦った。だが、魔法大戦とは言えど、実質魔法が使える者はごく一部・守護神しかいない。例外はあるが、どちらにせよ他の兵士達は銃や戦

車、爆弾といったものの戦いであり、守護神とその例外を除けば第一次・第二次世界大戦とさして変わらない。

クイルはそれから今年・・・2335年までの冥王星国の悪事について語り出した。この国——太陽への圧力、他の国々を支配下に置くなどし、今や、地球、火星、土星、天王星は冥王星によって王族を失って敵となっていることを。

今年が何年であるかを聞いて、正直綾乃は驚いた。表世界が現在2340年であるところからすると、三年も後に行く（要するに、西暦2335年）裏世界とは時間軸が違うようだ。それでも、同じ年に対応した出来事が起こっているのならば、二つの世界はよほど結び付きが強いということだろうか。

「そういえば、外見でも線路なんてないね・・・」

「あ、綾乃様、ご存知です？旅は徒歩ですよ」
笑顔でクイルは言い放つ。

一瞬にして、場の空気は凍りついた。

第一章『光の掟』・第二話『蘇る記憶・呪われた旅路』Part3

裏世界に来て四週間が経過しようという頃。

向かいのソファに腰を下ろし手元の本に目を落とすレウィンに向け、綾乃はぼつりと呟いた。

「最近、少しずつ記憶が戻ってきてるの」

綾乃の声に顔を上げたレウィンは、嬉しそうに微笑んだ。

「異世界に来る過程で失ったものだから——何らかの衝撃を受けて戻るといふのは違います。だから、前にも言いましたけど、時間の経過と共に少しずつ思い出すのです」

「全て戻る日も近いのかな・・・」

「もう、数日内に戻るでしょう。戻り始めたら早い、とも聞きますから」

「本当!？」

綾乃は歓喜のあまり立ち上がり、身を乗り出してレウィンの両肩を掴む。

わあっ、と突然のことでレウィンは声を上げた。

「はい」

頷いてから、急に言い辛そうに口籠らせた。

「・・・・・・・・失礼ですが、綾乃さん・・・・・・・・あの・・・・・・・・その、えっと・・・・・・・・」

「なあに？」

「あの・・・・・・・・」

「ほら、言って。何？」

「思い出したこと……教えて頂いてもいいですか？」

「いいけど……興味あるの？」

「はい！とっても！！表世界について知りたいんです。憧れ……ですから」

レウインの顔色が変わった。

目が輝き、この上なく喜びを表現している。

先程まで手に握られていた小さい字だらけの分厚い本は投げ捨てられ、今は彼の隣にある。

普段大人しいレウインの変化に、綾乃は驚いて、思わず少し仰け反った。

「憧れ？」

「そう、憧れです。僕は、ずっと表世界に憧れていたんです。もう昔のことと、きっかけは覚えていないのですが。教えて……いただけですか？」

表世界の存在を知ってから、様々な書物を読み漁ってきたレウインは、かつてないチャンスに胸を躍らせた。

今までに、何人か裏世界に来たという人がいることも認知はしているし、彼等について多少なりと知識はある。

けれど、そのことを知るのはいつも人伝か、または書物からだ。

面と向かって表世界人と話すのは初めてのこと。

最初綾乃が表世界の人であると知って、記憶が無いと聞いた時、戻り次第表世界やその世界に住む人である綾乃自身について話を聞こうと心待ちにしていたのだ。

まさか、そんな人と旅が出来ることになろうとは思いませんでしたのだけれど。

「もっちゃん！！いつも裏世界のこと、教えて貰ってるんだもん。

お返し。」

綾乃は自分の故郷を褒められて少しいい気になり、「あのね……」と話し掛けて、不意に口を噤んだ。

「あ……でも、やっぱり無理かも……。ごめん」

「え？何が”ごめん”なのです？」

訳が分からず、レウインは首を傾げる。

「今はまだ話せるようなことが無くて……。」「

断片的だから……。」「ですか？」

「それもあるけど……。私の――家族のことばかりだから」

てへ、と後頭部に手を当てて小さく舌を出して苦笑する綾乃の言葉
を、レウインは反復した。

「綾乃さんの……。」「ご家族……。」「

「うん。それは――表世界のことはあまり関係ないと思うし」

「聞きたいです」

それも当然聞くつもりだったため、はっきり言う。

「関係……。なくても？」

「もし、プライベートなことは話したくないと思われるなら、仰らなくても構いません」

「そ、そんなことない！けど……。面白くも何とも無いかな。なんて……。」「

「そんなことはないと思います。綾乃さんがどんな家庭に生まれ、
どうやって育ったのか、知りたいです」

「じゃあ、聞いてくれる？」

「はい」と、レウインは満面の笑みを見せた。

「お？何だか楽しそうな話をしているようだな？」

綾乃が自分の世界について話し始めてしばらくして。

二人とお茶でもしたかったのか、ひょっこりとサフィールが応接
間にやってきた。

「お父様！！」

「陛下！」

「何の話だ？笑い声が廊下まで聞こえたが」

にこにこしながら、ドアから近いソファの方に――レウインの方に近付いた。

慌ててレウインは隣に無造作に置いた本を綾乃の座るソファとの間にある低めのテーブルの隅っこに置き換える。

どうぞこちらへ、と促されて、サフィールはレウインの隣に腰かけた。

「それは申し訳ありません。実は、綾乃さんの表世界のご家族について話を伺っていたのです」

「ほお。それは興味深い」

公務も終わったことだし私も混ざろうかと言って、手を二回叩き、ドアの前で待たせていたらしい小間使い達を呼んだ。

小間使い達の手にはジュースや紅茶などの飲み物と、一口大のお菓子がいくつも入っている底の浅いバスケットがある。

飲むお茶が麦茶限定で、紅茶が飲めない綾乃の前にはオレンジジュース、他二人の前には紅茶が置かれ、その中央にはお菓子のバスケットが三つ並べられる。

「わあ！！今日のお菓子も美味しそう！！マドレーヌに、クッキーに……あと、マカロンにそっくりね」

「ま、ど……れーぬ？」

「くつきー？まかろん？」

その単語の意味が分からず、レウインもサフィールも疑問に思った。

そんな二人の前で遠慮の欠片も無しに焼き菓子の一つを取って口に放り込んだ綾乃は、蕩けたような顔をする。

「んんー、味も似てる！でも何か違う……分量も、材料も違うからかな」

こちらの世界に来てからいろいろなものを食べさせて貰っているので、どの料理も平均的に表世界の料理と負けず劣らず美味しいと

は心底思っているのだが、綾乃はかなりの甘党なので毎日のお茶の時間に出されるお菓子の方が好物となっている。

世界が違うので、存在する動植物が違う。

だから、共通のメニューは一切ない。

どれも美味しいとはいえ、自分の世界で食べる習慣のない物にそっくりな物がテーブルに並ぶとどうも手が伸びない。

それでもクイルに半ば脅されながらだが食べてみれば、驚嘆してしまうことも多い。

ああ、こんなに美味しいんだ、と。

「さっき言っていたのは・・・綾乃さんの世界の食べ物ですか？」

「そうなの！こっちでも食べれるなんて思わなかった！！凄く美味しい！」

「どういったものなのか、見てみたいですね、陛下？」

「うむ。綾乃の世界とこちらでは、似通ったものもあるのだろうが・・・やはり基本は違うのだな・・・そう、改めて思う」

「ですね・・・」

ぼうつとしてると綾乃に全部食べられてしまうぞ、とサフィールがレウインにもお菓子を食べるよう促して、苦笑しながらレウインも食べ始めた。

失礼なその言われように、綾乃は頬を膨らませる。

それを見て取ってか、サフィールはかわすように話題を戻そうとした。

「お、話が逸れてしまったな。確か、綾乃の家族の話だったか」

「そうです、そうです！あはは、あんまり美味しくて忘れかけてました」

そう言う綾乃の頬には、お菓子が詰まっている。

「綾乃らしいな」

「お父様、それはどういうことですか？」

「いや、何でも無い」

再びかわされてしまった綾乃は、少し不満有り気だった。

一方、レウインは先程までのやり取りを傍観していたが、その会話の終わり方に思わず笑ってしまった。

「先程までの話を掻い摘んで説明致します。綾乃さんには、ご両親と、三年前に亡くなったそうですが・・・お兄様がいらっしゃったそうです。それから、表世界にはこちらで言う学習施設である学校というものがあり、そこでさまざまなことを学ぶのですが、同じ学習施設でもこちらとは勉強内容が大きく違う、という辺りまで話しました」

「ほお・・・。今更だが、ちゃんと綾乃の記憶は戻っているようだな。レウイン、見立てではあとどれくらいで全て思い出せそうだろうか？」

「数日内には。寝ている間に思い出すのが多いみたいですけど、時々どこかの記憶の映像らしいものが脳裏を過るそうです。大抵はもうしばらくかかるのですが、綾乃さんの記憶の思い出し方は比較的早いのでそれくらいだと思われます」

「数日内か・・・勉強の方は？」

「そちらの方も順調です。各国の情勢については後々教えるつもりですが」

レウインが何か紙を取出し、それを見ながら答えた。

「それでよい。覚える物が多過ぎるからな」

うんうん、と何度もサフィールは頷く。

その日は、夕食の支度が出来るまで三人は表世界について至極楽しそうに話し合った。

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part 1（前書き）

『僕には貴女を守る力はありません。だから、代わりにこの石が綾乃さんを守ります』

異世界の少女・綾乃はパシエンテ（不治の病を持つ者の意）の少年・レウィンと旅立つ決意をする。知識を一定以上得るまで指導を受けるべく、太陽城に滞在することになった綾乃だったが……！！？

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part 1

アヤノ……アヤノ。

オレハ……ココニイル……。

「はい、全問正解です」

「よっし!!」

「よく勉強していらっしゃるようですね」

「エスティ君の教え方が上手いからだよ。勉強するのが楽しいの」

「そう言っていたら、とても嬉しいです」

「あーもう、勉強疲れた……。レンだけの時はいいんだけど、クイルさんいると、はい勉強勉強勉強ー!! って詰め寄ってくるんだもん。疲れるよ」

想像するのが容易過ぎて、レウインは苦笑した。

勉強用のテーブルに突っ伏した綾乃は、不意にむくりと頭だけ起こす。

そうして、視界に立ったまま勉強用の教材を先読みするレウインを捉える。

「ねーエスティ君」

「はい? 何でしょう」

「太陽城の城下町ってどんなところ?」

「賑やかで……活気に満ち溢れてて。僕にとっては凄く好きな場所ですけど……急に……城下町がどうかしたんですか？」

「城の小間使いさんに聞いたの。いいところだった」

綾乃は裏世界に来てからたった一度だけ城を出た。

けれど、出たのは城の門の中までだ。

その際レウィンと出会ったのだが、遠巻きに街が見えたくらいだった。

城から出て、のびのびしたいのは当たり前のことだ。

「行って……みたいなあ」

「行ってみますか？」

「え……いいの？」

ひよきつと、跳ね上がるようにしてもものすごい勢いで起き上がった。

「陛下の許可を取って参りましょう。ずっと室内にいらっしやると体が鈍りまってしまうすし。一息入れるということ、いかがですか？」

「行く！行きたい！！」

「けれど、いつも通り課題は出しますよ」

「うん。どうせ本一冊読んでくるようになって言うんでしょ？」

一応しっかり課題という形で釘を刺すレウィンだが、この課題はいつもと同じ。

「はい、そうです。読書好きの綾乃さんには難なく熟せるでしょう。この国——太陽国の風土記です。旅に出れば、すぐにでも必要になることでしょう。念入りに読んでおいて下さい。いつものように、それについて話し合い、内容の再確認と記述されてないことを補充しますから」

「了解。ちゃんとやる」

綾乃はその課題が結構好きだ。

翌日にあるその話し合いが、勉強開始時間より始まりが早まるの

はそのためだ。

大抵はレウインが城に來次第始まる。

いつも勉強の本であるとは限らず、レウインが読んで勉強になると感じた物や童話なども含まれている。

趣味が合うらしく、レウインの選んだ本は面白くて流れるように最後まで読んでしまうものばかりだ。

勿論その全てをレウインは読破しているので、毎回会話は弾む。

その時間は、綾乃にとってもレウインにとっても楽しい時間となっている。

「では、許可を取ってきますから。その間に本を片付けたり資料を纏めておいて貰えますか？」

「わかった！」

課題で喜ぶのは少し可笑しいかもしれないが、どこか嬉しそうなオーラを放つ綾乃を見てレウインも微笑んでしまう。

よほど城下町散策が楽しみなのか、綾乃はいそいそとテーブルを片付け始めた。

「わあ、これ可愛い!!」

サフィールの許可は何ともあっさり得られ、綾乃とレウインは城下町にやってきた。

綾乃は初めてでテンションが上がり、主に装飾店に寄りたがった。それにレウインは嬉々としてついて行っていた……が。

「ね！これ良くない？……ってあれ？」

オレンジの石が付いた指輪を自らの指にはめて振り返ったが、そこにレウインの姿はなかった。

「まあ……ほんとについさっきまでいたんだし、何か買った物でもあったのかも。すぐ戻ってくるだろうからここでゆっくり

見せて貰ったところ」

小声で言って、綾乃はまた商品を吟味し始めた。

流石太陽国だけあって赤・黄・橙系の色のものが多い。

店の数は計り知れないほどあり、回れても三分の一程度だと思われる。

「これ、いくらだろ・・・4マルト？」

「お客さん、どうかしたかい？」

見兼ねた店の人が店内から出て来た。

50代くらいの、少し体付きのゴツい女だった。

「あの、マルトって・・・？」

「違うよ。Maltって書いて、メルトって読むんだよ」

「メル・・・ト？」

「おや。通貨単位も知らないのかい。全国共通の筈なんだがねえ」

「すみません・・・」

女の呆れたような言い方に、綾乃は俯いて謝った。

・・・と、そこによく知る声が聞こえてくる。

「4メルトは表世界で言う1004円のことですよ。1メルトは251円なんです」

レウインが小さな包みを持って綾乃のすぐ後ろに立っていた。

「中途半端だね・・・」

「そんなものです。本当は、250・876円ですから。そんなに上手く換算なんて出来ないものです」

言って笑みを見せる少年の姿に、女は見覚えがあった。

「あれ・・・お前さんは・・・レウインじゃないのかい？」

久しぶりだねえ。元気にしてたかい？」

「お久しぶりです、おばさん」

笑顔を見せるレウインの頭を女がくしゃくしゃと撫でた。

「その子はもしかしてレウイン君の連れかい？可愛い御嬢さんだねえ」

「お、おばさん!!」

レウインも、綾乃も照れて俯いた。

「おおっと。余計なこと言っちゃまったかねえ」

「ところでエスティ君、どこに行ってたの？」

「ああ、忘れてた。……はい、これ綾乃さんに」

持っていた包みを開け、中から取り出したものを綾乃の首につけた。

革紐に、直径1？くらいの大きさの、透明のガラスに覆われた虹の宝石が付いている。

「ペンダント……？凄く綺麗……」

似合っていしゃいます、とレウインも嬉しそうにしている。

「レウイン、それはまさか……」

「はい。そのまさかです。護り石のペンダントです」

「なら、またダルテさんとこ大変なことになってるだろう。お前が来ると損なのか得なのか訳が分からないってよくアヤツ言ってるよ。アタシにとっちゃ、商売上がったんじゃないじゃ？って思うけど」

「えへへ……」

突然、女がレウインに向けてにやりと笑う。

意図がイマイチ掴めない綾乃は、超傍観者的な立場で二人を交互に見つめた。

「レウインの知識には恐れ入るよ。今日がいいのが手に入ったのかい？」

「それなりに！」

「いくつだい？」

「そうですね、三つ、といったところですね」

「三つ！？凄くないかい！！そう簡単には見つからないよ！！」

「よかったねえ、御嬢さん」

「何のこと……ですか？その三つとかって……何が三つ何ですか？教えて下さい」

「護り石のペンダントは有名だろう？通貨の単位も知らなかったようだし……どうしたんだい？」

「え、あの・・・えっと・・・」

「彼女、記憶喪失なのです。少しずつ思い出しているようなのですが、それらについてはまだ・・・」と、レウインは表世界の話に触れないようにそのことだけを事実から抽出した。

「そうかい。何か辛いことでもあったんだろう。可哀相にねえ」

「いえ・・・」

「で、何なんですか？」

「この護り石のペンダントはねえ、各国で産出される宝石から作られているんだ」

「宝石・・・？」

縦縞の虹のように輝くその石の一層一層は、実は原石から価値の少ない残りカスの部分を薄く加工し、外側を透明のガラスで包むことで接着させたものである。

一握りの価値の高い宝石には、魔力が宿っていることがある。

採掘技術のあまり発達していない国があるために高級であるそれを買うのは、各国の上位層でしか有り得ない。

だが、その価値の低いものならば一般市民でも手に入るのだ。

運が良ければ、中に一度だけ魔力が使える部分が混じっていることがある。

「じゃあ・・・このペンダントの石の十層の内、三層に魔力が宿ってるっていうこと？」

「はい。それが先程話していた“三つ”の意味です」

「御嬢さん、レウイン君は凄いなだよ。そうやって見ただけでどれが魔力を宿してるか分かるんだ。一つでも稀なのに運がいいねえ。そんなものをあげるなんて、よほどレウインにとって大切な人だと見える」

「お、おばさん！！からかうのはやめて頂けませんか！？」

「おおっと、怖い怖い」

「・・・ったくもう」

真っ赤になって怒るレウインが何だか無性に可愛らしくて、綾乃

はじつと見つめていた。

長話をしていたせいで日が暮れ、城まで綾乃を送り届けるとレウインはそそくさと帰ってしまった。

心なしかフードから覗く顔が赤く染まったままだったような気がして、そのこと思い出した綾乃も頬を赤く染める。

レウインは、いつもどこか自分のことを隠してる。

サフィールは理由を知っていたので、教えてくれたのだが、自分がパシエンテであるからということらしい。

やはりパシエンテというのはいろいろ付き纏ってくるのだ。

綾乃が心に描いている以上に。

でもそんな彼の一面が見えた気がして、何だか嬉しかった。

名前の分からぬ感情が、この日を境に綾乃の中で渦巻き始めた。

翌朝

起きてすぐ違和感を覚えた綾乃は自室に備え付けられた巨大な鏡に、自分の姿を映した。その途端、綾乃はフリーズする。

「な・・・な・・・な・・・っ！何これ！わ、私・・・」

映ったのは少年。顔が綾乃と瓜二つの。

セミロングだった綾乃の髪は、思いつ切りショートだった。でも、男子にしては少し長めな気がする。

性別関係無しの服をわざわざクロゼットから探し出して、それを身に着けた。

それから急いで、朝食を食べ、自室にいるだろうサフィールの元へ駆け出した。

第一章『光の掟』・第二話『虹の破片・重複せし灯火』Part 1（後書き）

活動報告、これから少しずつ書いていきます。
是非見て下さい！

pixivにてキャライメージ画を掲載しているので、そちらもヨ
ロシク！！

本当に読んで頂きありがとうございます！

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part 2（前書き）

『僕には貴女を守る力はありません。だから、代わりにこの石が綾乃さんを守ります』　異世界の少女・綾乃はパシエンテ（不治の病を持つ者の意）の少年・レウインと旅立つ決意をする。知識を一定以上得るまで指導を受けるべく、太陽城に滞在することになったが……記憶が戻り始めたある日、何と綾乃は男の子になっ
てしまっ……!？

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part 2

「お父様!! お父様!! 綾乃です!!」

切羽詰まった声がドアの向こうにいる筈の養父に投げ掛けられる。すぐに気付き、食事をする手を止めたサフィールは、臣下の者にドアを開けるよう命じた。

だがサフィールはふと、綾乃だと名乗ったその声が些か低く感じたような気がして――、でも気のせいだったと思い直す。

ドアが開け放たれた途端に入ってきたその人に、許可を出した本人も、そしてそれを実行に移した臣下も驚き、目を見開く。

付近にいた衛兵が、迷わず銃口を綾乃に向けた。

「姫の名を語るなど、お前はいったい何者だ!？」

ひ、姫……!？

綾乃は、銃よりも自分が姫と呼ばれた方が気になった。

確かに、養女だから姫なんだろうけど。

いつもは、綾乃様と呼ばれていたから、少し気が引けた。

「名を語るって……私、本当に綾乃です、信じて下さい! 朝起きたらこうなって……!」

「黙れ。そのようなこと、誰が信じるか! お前、さては、敵国の……!」

「ならば、生かしてはおけん! 城への不法侵入、及び国王の殺害容疑で即刻死刑を!」

「そんな! わ、私は……!」

大戦争を控えているために緊張度が生半可なものではない衛兵達は、綾乃の反論を許さない。

国内に刺客が送り込まれているという情報もちらほら入っているという。

やはり来たか、という思いを誰もが抱いた。

子供が刺客、という点においては何ら不思議ではない。

油断を誘うにおいては、有りがちなことであるから。

兵の一人が抵抗を止めない綾乃の腕を掴み、部屋を出ようとしたその時。

「待て」

サフィールの一言が、その場にいる全員の動きを止めた。

「お前……本当に綾乃か……」

「……はい」

「でも、男の子じゃないか」

半信半疑と言った感じのサフィールに、どうにか分かってもらおうと綾乃は叫ぶように言う。

「だから、朝起きたらこうなってたんです！！……私にはどうしてなのかさっぱり……！」

どう説明すればいいのか分からず、口を噤んだ綾乃をじっと観察して。

ふいに、王が首を傾げた。

「何かいる」

「……」

「こ、国王陛下？何かいるとは……」

未だ綾乃の両腕を捕え、変な行動に出ないか見張る衛兵も問い掛ける。

そちらにサフィールは視線を移し、少年となった綾乃の解放を命ず。

衛兵は戸惑いを見せながらも手を放し、端に控えた。

「どうやら……お前は、確かに綾乃のようだ」

「な、なら！姫はどうしてそのような姿に！？お分かりなのですか、王！！」

黙って頷いたサフィールは、調べるような視線を再び綾乃に向けた。

「綾乃、キミは一人ではないようだな。……何かの依代にさ
れているのではないか？」

「ま、さか、憑依されてるってことですか？」

「うむ」

魔法について齧ったことがあるから、それくらいは何となく見抜けるのだ、と自慢げに続けた。

それは間違いない。

問題は……！！

そうして二人が重視した点は、僅かにずれ合っていた。

「そ、そそそそれってゆゆゆ幽霊なんじゃ……」

「吃っておるぞ。安心せい、そのまさかだ」

安心せい？

寧ろ安心出来ないんですけど！？

綾乃は全身に鳥肌が立ったのを感じた。

「私が一番言いたいのは、そんな前提的なことではない。それが誰かということだ」

「幽霊が……誰か？」

「完全に一体化しておるな。シンクロ率が非常に高いようだ。ここまで合致出来る者は、身内や恋人など、関係が深い人でしか有り得ない……それでも有り得ないかもしれないくらいだが」

……あれ？

綾乃は何かに気付きそうになっていた。

幽霊。高いシンクロ率。身内や恋人など、関係が深い人。

知ってる……私、何か……心覚えがある……。

そこへ、都合良く記憶の一部が蘇る。

『綾乃……お前は、本当に俺のマネが好きだな。母さんに怒られても知らないぞ?』

『いいもん! アヤ、お兄ちゃんと一緒にいたいんだもん』
『……ったくもう』

いつも、綾乃は兄である湊生あつきと共にいた。

兄妹関係は良好で、お調子者で後先考えない湊生も、綾乃についてだけはかなり気を配っていたほどだった。

綾乃は、何でも湊生のマネをしたがった。

口調、行動、考え方までも。

それ以前に、生来二人は似ていたのだ。

外見もそっくりで、綾乃がもう少し身長があれば双子だと言われるかもしれないほどに。

現に、湊生が中一の時に女装した姿に、綾乃はそのまんま当てはまるのだ。

加えて、珍しい……というより新製品のプリクラ機で、性別転換加工という機能を発見して二人で撮ったことがあるが、限りなくお互いに近かった。

シンクロ率、と言われれば、彼のことを思い出す。

しかも幽霊なら、やはり死者だし……とくれば、彼の可能性は非常に高かった。

「お兄ちゃん……?」

ゆっくり、そして深く頷いて、サフィールは肯定の意を示す。

「綾乃の兄は亡くなっていたと、言っていただろう」

「はい。……あ！安心しろって……まさかそういうこと？」

思い当たった事実には、綾乃は思わず納得してしまう。

「可能性は極めて高い。こういうのは、さっきも言ったが本当に身内や恋人など、関係が深い人に有りがちなんだ。悪意も見られないし、多分そうだろうとは思っていたからな」

「死んだ……お兄ちゃんに、また……会えるの？」

「それが、綾乃の兄ならば。」

サフィールに言われて喜び、テンションが明らかに高くなった。

そんな少女（今は見た目は少年だが）に、何かを言おうか言うまいかと悩んで、やがて重い口を開いて言った言葉は、予想外のものだった。

「なあ、綾乃」

「はい！何ですか？」

「その……そのまま、暫くいてもらうことは出来ないだろうか」

「え？」

理解出来ず、聞き返す。

同時に、綾乃の顔から一瞬にして笑顔が消える。

「頼む」

「い、嫌だと……言ったら……?」

「強制するつもりはない。運よく、明日……ソロンが来る

予定だしな」

「ソロン……さん？」

誰だろう。

それからどう運がいいのかもわからない綾乃は、ただただその聞き慣れない名前を反復した。

「ああ。綾乃をこちらに呼び寄せた時の神官だ。」

「ヤツなら分離は容易だろう。どうだ、頼むか？」

「はい。でも、どうしてこのままでいた方がいいんですか？」

悪さがばれた時のようにばつの悪い顔をして、肩を落としたサフィールは、

「男の子であれば、式典が執り行えるかもしれないなどと思ったのだ」と白状した。

「式典？」

「ああ。太陽大命神の守護神継承の儀を執り行う式典だ」

「何で私が？この国の守護神の人、いるんでしょ？城にずっといるのに会ったことないけど……その人にして貰えば」

そういえば、守護神であるという人には会ったことが無い。

初めは、そんな重要な人が城内をうろろしている訳ないし、戦争が近いから、きっと誰とも接触しないような場所を選んで大切にされているのだろう。

そう思っていた。

小間使い達やクイルなどと話しても、話題に出ることはなく、聞いてみても知らないという返答だけがいつも帰ってきていた。

他言無用だから教えてくれないのかとも思ったが、そうでもないように。

更に彼らもあつたことが無いというのは、おかしいなと感じてはいたが。

それでも、いないのかと聞けばいるのだと全員口をそろえて言う。だから、気になってはいた。

「出来ない」

「どうして？」

「彼は……存在していないながら、存在していないのだから」

「存在してて、存在してない……？」

ああ、だから……。

「綾乃と魂を共有する者だ。そろそろ会っておいてもいいだろう」

「その、太陽大命神になる人に、ですか？」

「そうだ」

「彼の名前はアレン。本名はアストレインだ。彼が太陽大命神だという啓示が来て異世界である表世界から呼び寄せたのだが、眠ったまま目を覚まさないでいる。更に彼は肉体を持たない。魂のみの状態だったのだ」

サフィールの部屋の、一番奥。

鍵が幾重にもかかった扉の向こうに、石造りの螺旋階段が深く続いていた。

いくらか炎が灯っているだけの中は、薄暗く足を踏み外しそうになりそうなほどだった。

そこを通るのを許されたのは、サフィールを除き、綾乃だけ。

下りながら、サフィールはその太陽の守護神について、ほんの少しだけ語った。

階段を下り切ると、そこには広い空間があり、中央には天井にまでつくほど長い、太いチューブ。

炎からの光の反射で、もしくは離れ過ぎのためにチューブの中身は見えなかった。

「近くに行こう」

「はい」

中にはたつぷりと水ではない、青っぽく僅かにとろみのある透き通った液体が入っていて。

真ん中あたりに、何か大きいものが浮かんでいるのが見えた。

「これが、太陽大命神の“魂”だ」

近付くにつれ、それが何なのかはつきりしてくる。

直径40センチくらいの、丸い球だった。

第一章『光の掟』・第二話『虹の破片・重複せし灯火』Part 2（後書き）

活動報告も、是非ご覧下さい♪

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part3（前書き）

『僕には貴女を守る力はありません。だから、代わりにこの石が綾乃さんを守ります』 異世界の少女・綾乃はパシエンテ（不治の

病を持つ者の意）の少年・レウインと旅立つ決意をする。知識を一定以上得るまで指導を受けるべく、太陽城に滞在することになったが……記憶が戻り始めたある日、何と綾乃は男の子になっ
てしまう。綾乃に乗り移ったそれは、綾乃の実兄で……!?

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part 3

「来てもらって早々、頼んで悪いな」

「いえいえ。これが本職ですから」

儀式の間の中央に大きな魔法陣を描く手を休めず、神官・ソロンは端の方に設置された椅子に腰かけたサフィールに答えた。

「まだかかるか？」

「いえ、もう終わりますよ」

王の足元には、頭一つ分の大きさのぬいぐるみがあった。

それは綾乃チョイスで、空色の、少しデフォルメの入った魚のデザインのもの。

その魚のぬいぐるみに綾乃の兄である湊生を移すつもりなのである。

因みに、それは綾乃が裏世界に来て2、3日した頃、女の子の世話が出来ると喜んだ小間使い達が持って来てくれたものの中の一つだ。

ぬいぐるみの他には、どうもオーダーメイドっぽい服、髪飾り・ネックレス、アンクレットなどのアクセサリー。部屋の装飾品があった。

聞いてみれば、サフィールには既に嫁がれた三つ年下の妹君がいらっしゃって、彼女の幼い頃のもの未だたくさん城に残っているのだという。

綾乃がその贈り物を喜んだため、小間使い達も調子に乗って、そ

れらから綾乃に似合うものを見繕ってきてくれるようになった。

時々、ファッションショー状態になって疲れることもあるのだが、綾乃も多感なお年頃なだけあって服装にこだわりを持っているので、基本的に楽しくやっている。

小間使い達の平均年齢は若干高めだが、登用対象年齢幅は広く、綾乃と同じ年くらいの子もいて、恋バナに花を咲かせることもある。「お父様、本当にお兄ちゃんを移すことが出来ますか？」

「ああ、出来るとも。要は、憑き物を落とす割合でやればよい。そうだろう、ソロン」

「はい。これくらいよくやっていますね」

「つ……憑き物を、落とす……ですか」

湊生が完全に亡霊扱いだ。

まあ、確かに幽霊には違いないけど。

魔法の存在する世界上、表世界にも増して霊傾向は強いらしい。ソロン神官のみならずサフィール王自身も、何度も除霊をしたことがあると堂々と言い放った。

「王！！準備が整いました！始めましょう」

「よし。綾乃、真ん中に立て」

「はい……」

恐る恐る、綾乃は魔法陣の中心に立つ。

カン

魔方陣を描いた時に使った杖を床につけ、魔法を発動させた。

光る魔法陣に向け、ソロンの呪文の詠唱が始まる。

すると、何かが前のめりに倒れ始めた。

それは自分だと、綾乃は思った。

だが、それは違った。

自分は立ったままで、それとは別の、透き通ったものが自分から分離していったのだ。透き通ったものは、間違いなく自分の兄。ガタガタガタガタガタ！

完全に離れきったところで、地震のような揺れが生じた。

それは魔法の作用だったらしく、サフィールもソロンも反応しない。

ソロンは続けて、魚のぬいぐるみに魂を移す呪文を唱える。

彼が使う魔法は、彼の持つ魔力を根源としているのではない。というより、彼自身は何の力も持っていない。彼が今使っているのは“本の魔力”。

ソロンのような“神官”とは、その本を自在に使えるように鍛錬を積んだ者の事なのである。

だから今、ソロンは分厚い本を小脇に挟んで呪文を詠唱しているのだ。

魔法陣は、詠唱の補助的なもので、対象の指定に使うのだという。綾乃から離れた透き通ったものが、呪文を紡ぐのに呼応して床に転がされたぬいぐるみに吸い込まれていった。

ぬいぐるみに入り込み、呪文を言い終えたとき、ぬいぐるみの目が瞬いた。

そして上昇。

どうやら飛べるらしい。

《おお？》

「お兄ちゃん!!」

《綾乃……。久しぶり》

「よかった……もう一度……お兄ちゃんに会えて……」

《泣くなって。お前泣き虫だな》

「あんな死に方したんだから泣くに決まってるでしょ!! お父さんもお母さんも凄かったんだから……!!」

《すまんすまん。何となく、死ぬ予感してたからさ。とうとう来たんだなー的な》

「とうとう来たんだな、じゃないよ! 感動の再開も何もあったもんじゃない……」

また綾乃は顔をくしゃくしゃにして泣き出した。

泣くと顔がブサイクになるぞ、と言いたかったが、言ったら殴られそうだったので言葉を飲み込んだ。

《よしよし。泣くな泣くな。………ところで、そちらサンは………っと、サフィール王か!?!》

どうやら湊生は、綾乃と同化中も意識は無く、眠っていた状態だったようだ。

明らかにこの状況に驚いている。

「そうだが。どうして知っているのだ? お前は、表世界の人間だろう?」

《そうさ。綾乃の兄貴なんだから。でも、俺とサフィール王、アンタとは初めて会った訳じゃないぜ》

意味が分からないと顔に書いてあるサフィールを見て、ニツと不敵な笑みを見せる。

「ど、どういうことだ、湊生?」

《ふーん。にしても、いつもとは俺の呼び方が違うんだな?》

「いつもって………」綾乃が問う。

「俺のこと、サフィール王は何でか“アレン”って呼んでたんだよね。名前に頭文字の“あ”は合ってるから、おおニアピンとかって思ってたんだけど」

言って笑う魚の前に、サフィールを始め、ソロン、綾乃も全員が凍りついた。

今、何と………?

「お兄ちゃん………何て呼ばれてるって言った?」

「だから、“アレン”。その王様がさー、“まだ目をお覚ましになっていないのですか、我が国の守護神、アレン”って感じでな」
バツとソロンと綾乃がサフィールの方を見る。

本当か? という視線を投げかけて。

「言った………」

「じゃあ!?!」

「お、お、お………お兄ちゃんが、太陽大命神・アストレイン

!？」

綾乃の声が、城中に響き渡った。

「まあ……なんだ。取り敢えず儀式は成功したようだな。……綾乃も戻ったみたいだし」

「え……あ」

自らを見ると、確かに髪は前のセミロングに、身長も縮んだ気がする。

先程までそれどころではなかったため、気付かなかった。

前もって手鏡を用意していたので、右ポケットから取り出して見ている。

……戻った!!

湊生との分離中、普通なら自らの変化にも気付いた筈だが、その時綾乃は三年ぶりに見る兄の姿に完全に気が行ってしまったのだ。

そしてその後は、兄が太陽大命神だったと知って。

慌てて自室に戻り、地下室に確認に行ったサフィールが戻ってきたのはついさっきのこと。

チューブには、丸い球体どころか水も入っていなかったという。

その報告時湊生は、だから言ったじゃん、とサフィールが儀式の間を出ようとした時に言った言葉を信じて貰えず拗ねたように愚痴

を漏らす。

今もまだ、口を尖らせてそっぽを向いている。

「戻ってる・・・私、戻ってる!!」

小躍りする綾乃の隣で、腕組みをしようとした湊生が、それが出来ないことに疑問を持っていた。

何かおかしいな。ふよふよ揺れつつけど・・・。

そして、自身の手と足を見た。

《な、なんじゃこりゃー!!!!!!》

叫んですぐ、目が座った。

眉間に皺をよせ、明らかな犯人を凝視し、その人の名を呼ぶ。

こんなことになったのは、ヤツしかない。

《ちよつと綾乃。喜んだり笑ったりする前に、俺がこうなった経緯を聞きたいんだけど? 何で魚な訳》

湊生が実に不満そうに言った。

裏世界に来てから今の今までを手短に説明すると、何かに納得したような素振りを見せたが、その上で《お前センスないんじゃない?》

《と魚についてコメントした。

これに入らされる身にもなってみろ。

魚が、妙にリアルで、妙にコミカルで、変にデフォルメされていてキモかった。

「それをプリティーと言います」と、綾乃はセンスを不定されて張り合うように言った。

《な、サフィール王!! お前はセンス無しだと思うだろ!?!》

「私も綾乃に賛成だ」

至って真面目に答えた。

味方だと思っていた奴が、敵の増援だと知ってがっくりと湊生は肩を落とす。

「恐れながら王、私もそう思っております」

そして、ソロンまでもが。

「特にウロコがリアルで素晴らしいぞ。肩乗りサイズという点にお

いても、誠に良き物である」

「ですよ。お父様とは意見が凄く合いますね」
「うむ」

《あーはいはい。プリチーね、プリチー》

全員に言われ、湊生の不機嫌度合いはマックスに到達した。

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part3（後書き）

次、第二章に入ります！他国編。”水の掟”です。

『水の掟』を含む以降のストーリーを、活動報告にて掲載するので是非ご覧下さい。コメントいただけると嬉しいですよ！

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 1（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』 大切な人を次々に失くし

た少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立つて早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。

その国の守護神・ティムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……！！？

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 1

「お前には、もう王たる資格は無い」

玉座に座る少年王を囲うように、七人の男が一斉に述べた。

「降りろ。降りねばならぬぞ、近いうちに」

「貴国の守護神が亡くなった以上、新たな任命を」

「新たな任命を」

「新たな任命を。」

新たな、任命を……

少年王は耳を塞いだ。

いやだ。俺はこの国の王だ。

……降りろだと？冗談じゃない。

彼は、まだ王になって間もなかった。

父からこの位を譲って貰って。

華々しい未来が待っていると思っていた。

幼い頃から、王位を継ぐのは自分であると、生れ落ちたその瞬間から――、そのもっと前、母が自分を身籠った時から決まっていたのだ。

それなのに。

一瞬にしてその輝かしい未来は自分の手をすり抜けていった。

少年は、見えないように拳を握り締め、歯を噛み締め、男達を獣のような眼差しで睨み付けた。

お前達に俺の気持ち解るものか。

譲れない。譲らない……絶対に。この座だけは。

他の何と、引き換えにしても。

「プッ。わはははは　！　また引っ掛かってやんの」
水晶玉を前に、そこに映ったものを見て二十歳前後の青年が笑った。

「ティム様、少しやり過ぎでは？」

「いーんだよ。オレが何のために“悪戯好き”を演じていると思ってる？・・・全ては、これからの計画のためなんだ」

「バレたらどうするのです。あまり大きなことはなさいますな」

「・・・むう。少し控える」

「そのようにしていただけると光荣です」

ティムと呼ばれた青年は玉座から降り、手近な窓を開けて旅人達かやって来るといいう方角を眺めた。

それにワーム秘書も従う。

「だが、“その日”が来れば・・・奴らをどうにか出来る。小さい頃はずっと慕っていたなんて、今の自分からしたら笑っちゃうし・・・虫唾が走る」

「左様でございますね。私めも、かの日・・・ティム様の苦しむお姿を見て辛く思っております。この件、最後までお付き合いさせていただきます」

「早速、頼みたいことがある」

「はい。なんなりと」

「では――――」

「……………っていうことがあって、お兄ちゃんそれ以来不機嫌でね」

《寝起き早々驚いたんだ。だって、考えてもみる。……起きたら、視線が低くて、見たら魚なんだぞ。なんじゃこりゃって感じ》

「いや、でも可愛いし」

《男にカワイイってのもどうかと思うんだけど……》

言い合いする二人——もしくは、一人と一匹を前に、綾乃の隣に座るレウィン少年は笑いを堪えられず嘔き出した。

アレンが綾乃と湊生に分解されて、もう三日経っていた。

そしてもうすぐ綾乃がこちらに来て一か月半。旅立ちの日が近づく。

城下町に二人で出かけた日以来、多忙により城へ来れなかったレウインは、自分のいない間に起こった大事件についての報告を楽しそうに聞いていた。

「ケチケチうるさいデスネ、太陽大命神殿」

《オホホホホ》

上機嫌に尾びれをヒラヒラさせた。

意外と気に入ってるんじゃない、そう心底綾乃は思った。

「……………僕」

ずっと笑うだけで基本黙って二人の話に耳を傾けていたレウインが、不意に口を開いた。

《お、なんだなんだ？ 開口一番、“僕”。ナルシストの傾向があります》

「お兄ちゃんは黙っというて。……で、何？」

「本当は……綾乃さんが旅に慣れて、その仲間が出来るまでのつもりで旅に同行しようと思っていたんです」

「……え！？そうだったの！？」

「……は、はい……国王にもそのように、と」

綾乃は身を乗り出した。

思わずレウインは仰け反り、たっぷり間を取って頷く。

途端、しょんぼりした綾乃にレウインが微笑んだ。

「だから……当初よりも、もっと……長い同行を、許可願えますか？」

「う……うん！ずっと、付いてきてくれるものだと思ったし」

「そうはしたかったのですが……その……」

「ん？」

取り敢えず、ウキウキしながら綾乃がレウインを尋問にかけたところ、想像していない答えが返ってきた。

「……僕も世界を見て回りたかったですし、綾乃さん一人ではやはり危険で、僕の知識が少しはお役にたてると思って同行をお願いしたのですか……よく考えてみましたところ、やっぱり女の子と二人で旅するのはちょっとって」

だから、そう陛下にお願いしたのです。

レウインは顔を真っ赤に染め、言った。

「……何この子、意外とどころか可愛い！！」

“きゅんとくる”という言葉の意味を綾乃はこの瞬間改めて知った。

《へーい、お二人さん、俺完全に蚊帳の外ですかー？》

「うん、総じて無視。最初は二人だけど、増えるし。きっと楽しい旅になるよ」

綾乃は湊生の主張を完全に無視した。

「問題も、山積みですけどね」言って、レウインが笑う。

《まあ、何だ。最初は二人ってのに俺が頭数に入ってたの？》

「うん」

綾乃の発言を思い返して突っ込んだ兄に、綾乃はさも当然といふかのような返事を返す。

彼女から湊生のことを聞いていたレウィンだったが、その時想像していた凄く暖かい家庭とは大いにイメージがずれていたことを沸々と感じていた。

でもこれはこれで、楽しくていいのかもしれない。

《人でなしー！！》

人じゃないのはお前だ。

後に綾乃はそう愚痴ったという。

「でも、湊さんが一緒っていうのは心強いです。」

半ば口喧嘩が始まりかけ、どうにか場を治めようとしたが、逆に煽る結果となる。

《おお、ということは俺も頭数に入れた結果、同行期間延長決定？
ホラ見ろ、綾乃。ちったあ見習え、この人でない……し》

湊生が“人でなし”を“人でない”と言い間違えて、慌てて添加の形をとって訂正した。

が、“し”が付属したために、逆に変になった。

「……確かに、人ではないですね」とレウィンは分析。

「噛んだんでしょ。……お兄ちゃん頼むから、その自分の見た目には気をつけて発言して？」

侮辱の言葉も、その状況と発言者によっては本来の意味を成し得ないことをいい加減学んで、お願いだから。

突っ込みに疲れた綾乃は反目眼で兄を見た。

気まづくなったのか、湊生は話題を変えて、「それはそうと、エスティ君、お前気に入った。すっごいピュアでさ。ほんとヨロシク

な！」

「はい。……あの、今更なですけど、湊生さんだなんて太陽大命神ともあろう方に……」

「そ、そんな！ 気にしないで」

謝罪は、向けられた本人ではなくその妹によって許された。

勿論、その点に兄は異議あり。

《言いたいことを代わりに言ってくれたのは嬉しいんだがな？ お前が言うなよ、お前が》

「だって、どうせ私のお兄ちゃんだし？ 太陽大命神だからって気を遣わなくていいのよ。こんなチャラけた太陽大命神、笑っちゃうし」
《おっまえ、好き放題言うなあ。仮にも兄に向って……》

今日でこのパターン何回目だろう。

二人のやり取りにまた爆笑したレウインに釣られ、当事者達も噴き出した。

笑いが収束したところで。

「これから、よろしく願います。綾乃さん、お魚さん」

《あーはいはい、こちらこそ……って“お魚さん”！？》

「そうよ、エステイ君、一応コレでも中身人間なのよ」

《コレでもって言うなー》

ぷ、とレウインは小さく笑って、「冗談です、湊生さん」と言い改めた。

旅出発前夜……

レウインが了承してくれた旨を王に話し、一同は早速旅の準備に

取り掛かった。

アレン分離の儀式の後、湊生はというと綾乃の部屋の一角に取り付けられたクローゼットの中が部屋となった。

……そこには同居人がいる。

そこでこの度、一悶着があった。

《綾乃オ。友達連れて行っちゃダメ？愛着ついちゃってさー》

「だめ。どうせ持つのは私なんだから」

湊生が持っているのは……彼の同居人。いや、同居魚。

彼の部屋であるクローゼットとは、所謂、綾乃のために用意された人形置き場のことである。初めは少なかったのだが、綾乃が最近腕に魚のマスコットを抱いて歩き回っていたので、小間使い達は同じ魚のぬいぐるみや犬・猫のぬいぐるみを買って漁ってきたのだ。

お陰で湊生の寢床はぬいぐるみだらけで、たまに埋まっているので綾乃が発見に苦しむことがある。

取り敢えず、埋まる中で湊生はお気に入りが出来た。

それが同型のお魚マスコットミニ版。

《ちっ。分かったよ》

「分かればよろしい」

「入っていいですか？綾乃さん、湊生さん、準備の方はどうですか？出来ました？」

コンコン、とノック音がして、入室を求める声がした。

「入っていいよー。準備の方は、残念ながらあんまり進んでないけど」

「それはまた……あれ、湊生さん拗ねてませんか？」

《聞いてくれよー、綾乃はかくかくしかじかで薄情だー兄に対して酷いんだぞー！》

「かくかくしかじかは止めてください……具体的に」

《俺の友達、旅には連れてくなって言うんだ》

「もしかして、それですか？」

《ん。》

湊生が器用にヒレを使って持っているものを見て、それを指差した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「やっぱり置いていくべきだと思わない？」

そつとレウインは“湊生の友達”だというマスコットを手に取り、部屋を出て行った。しばらくして戻ってきた彼の手には、ストラップを取り付けられた例のものが乗っかっていた。

「はい、どうぞ。これなら、綾乃さんのバッグに付けられますよ」

《おお！！気が利くな！綾乃、付けていいだろ！？》

「仕方ないわね。いいよ。ホラ」

綾乃がバッグを差し出し、そのチャックに湊生が取り付けけた。

「どっちが上なんだか、って感じですね」

拳を口元に当てて笑うレウインを、綾乃は感心したような目を向けた。

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 1（後書き）

第二章に入りました。

でも、水星国メインは第二話からになりそうです。

第一話は殆ど太陽国内の話です！

活動報告チェック、コメントの方、よろしくお願いします！

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 2（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・ティムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……！？

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 2

「服何でも貸したげるって言ったのは私だけどさ……」
出発一時間前。

綾乃はレウインが選んで着てきた服一式を見て、絶句した。
アレン用にと、城には少年物の服はたくさん用意されていた。

それらとレウインはサイズが同じだった上、アレンは今事実上存在していないし（魚だし）、彼の持つ服が一種類しかないということとで……服をあげることにしたのだが。

「……ん？もしかして、似合っていませんか？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……。寧ろ、よく似合ってると思うんだけど、あんまりにも庶民的かなって」

彼が選んだのは、深めの緑のバンダナ、同色のタートルネックのシンプルな長袖に短パン、少し装飾のあるブーツにペンダントだった。

やはりバンダナを深めにして、目から上が見えないようになってる。

どうしてそうしているのか、聞いてはいけない気がして未だ尋ねたことの無い綾乃である。

「僕元々庶民ですし、この旅、秘密裏のもので、目立たない方がいいですし。それなら尚更です」

《そーだぜ、やっぱ身分通りの格好が一番だよな》

そう言う湊生の頭には、王冠が乗っかっている。更には、尻尾に黄金の輪っかが付いていた。

「アンタ・・・さっきのエステイ君の話、ちゃんと聞いてた？」
《実の兄をアンタ呼ばわりって・・・》

「目立たない方がいいって言ってんの。エステイ君のはもうちょっとお洒落してもいいとは思うけど、目立たない方がいいっていう考えには賛成。・・・それに、身分通りの格好って、魚の分際で偉そうに。お兄ちゃんの中じゃ、魚は元来王冠してるもんなの？」
《してる！！》

そう言い放ったぬいぐるみを殴り、王冠を奪った。
レウインは、二人の遣り取りをいつものことだと言わんばかりに微笑んでいる。

王冠（勿論、湊生サイズの小さいもの）を小脇に抱えて、
「いったいこんな小さな王冠、どうしたの」と聞くと、
《他の人形から貰った》

どうやら、クローゼット内の人形から奪ったらしい。
「あらそう。・・・この金属のリング、取れないんだけど！！」
尻尾の輪っかはいくら引っ張っても抜ける兆しを見せない。

《痛い！！》
「あら、入れ物の身体で・・・しかも尻尾の方まで神経通ってたのね」

わざと言って、無理矢理引っ張り続ける。
《尻尾取れる！！・・・これは、サフィール王から直々に貰ったものなんだぞ！！》

言われた途端綾乃がパツと手を離して、心構えが無かった湊生は地面に落ちた。

「先に言ってくれればいいのに」
何も無かったかのようにレウインと話し始めた綾乃の足元で、湊生はしばらく痛がっていた。

「案は通ったらしいな」

二十歳程度の青年が、ソファに腰を下ろした。

「はい。彼らは・・・旅に出る、とのことでございます」

「ならいい。利用させてもらわなければならないから、協力求めに来てもらわないと困るんだよな。オレだけでは達成など出来ないし。」

自らの指にはまった厚めの指輪を見て、言った。

「奴らの動きはどうだ？また裏で密約を交わしていたりしないだろうな？」

「そのようなことが最近では二度ほどありましたが、全て破談になるよう取り計らっておきましたので、心配なさらなくてもよろしいかと」

「これからも頼む、ワーム秘書」

「綾乃様、行ってらっしゃいませ」

「行ってらっしゃいませ」

城の衛兵、小間使い達が次々に声を掛ける。

「はいっ！！行ってきます！」

綾乃は、その後ろに湊生を抱えたレウインを連れて、城門まで来た。

出発は三十分早くする筈だったが、行く先々で小間使いから餞別にお菓子やらパンなど、王からは裏世界共通貨幣を渡されたため、初め持つて行こうと思っていた荷物の二倍以上になった。それらを除くと、野宿に対応して薄くて軽い毛布、服数着、火熾し用のマッ

チ、マントっぽいコート、薬、縄・・・取り敢えず、二人で分けて持てる程度にしていた。

これから行くのは、水星・金星・木星・海王星の四国だが、徒歩で行くためにその間の国も通る。それぞれで気候が異なるため、服も夏服・合服・冬服と、全て用意しなければならなかった。

しばらく歩いたところで、不意に綾乃が切り出した。

「・・・・・・・・ねえ」

《んあ？》

「何ですか？」

後ろを歩くレウィンと、彼のバッグの上で平泳ぎの真似をしていた魚の方を振り返って、

「・・・・・・・・・・ヒマ」

「・・・・・・・・・・。」

《・・・・・・・・・・》

沈黙が逆に落ちた。

「仕方ないですね。じゃあ、これから行く水星国について話しておきましようか。大まかな世界史については教えましたが、各国についてあまり触れていないですからね」

「静かよりはいいけど、こんなトコに着てまで勉強かぁ・・・」

《イシシシシ・・・・》

湊生がニヤツと綾乃を笑った。

「湊生さんも聞いて下さいよ」

《・・・・・・・・はい》

それからレウィンは自分の知識を頭の奥の方から引っ張り出すように、訥々と語り出した。

水星は、至る所に湖を持つ“水の都”と呼ばれる国。

二十数年前、王権が移行し、現在はリコレット家が王家となっていて、世界で使用されている水の半分を賄っている国だ。

その国には、今現在レウインが危険視しているというある問題があった。

「・・・・・・・・王権交代問題、です」

《・・・・・・・・なんだそりゃ？》

「すっごく分かり易くかつ簡潔に言くと、ある王が新しく王位に着いて間の無い頃に、すぐある理由で王権交代が起こったため、退位を余儀なくされた。それで怒ってる、といったところですかね。・・・・・・・・僕、ずっと気になっていたんですけど、王から聞くと“旅をして協力を求めに来い”って言い出したのは水星なんだそうです。それって、湊生さん、もといアレンさんという表世界から来た新たな太陽大命神に、その問題を解決してもらおうって言うんじゃないんでしょうか」

《可能性は高いな》

「そうね。・・・・・・・・でも、解決ってどうやって？」

「魔力を以って、でしょうか」

《お、レウイン鋭い！！オレも戦う気がするんだよな》

あれ、と綾乃が魚を見た。

「お兄ちゃん、今更だけど・・・・・・・・本人に会うまで、エステイ君って呼んでなかったっけ？」

《昨日男同士で語り合った。うん、会い通じるものがあつたな。そこで、もっと親密になりましたよ的な感じで、呼び方変えた。・・・・でも、レウインの方は俺が仮にも守護神様だから“さん”以下の敬称はいけないってさ。寧ろ本来は“さま”であるべきなんだって言い張って》

「一般庶民と王族・・・・・・・・しかもそのトップである守護神では、身分違いにもほどがあるんですよ。湊生さんって呼ぶのもやっぱり恐れ多いっていうか」

レウインは、呼び方は確かに湊生に対しても、綾乃に対しても“さん”で統一しているが、扱いだけは神に対するもののそれだった。分解され、今は湊生と綾乃でも、二人共を守護神と考えているのである。

綾乃も、一応太陽大命神・アレンと魂を共有する者だから、間違っ
てはいないし。

「……さて、もうあと十分強くらい歩いたら、国境ですよ」

「国境!？」

「はい。表世界から来たお二人には、面白いものかもしれませんね」
《面白い……もの?》

太陽国はもう夕暮れ時になり始めた頃。

二人と一匹は見晴らしが良い丘までやってきた。

そこからは太陽国が一望出来て、見納めな感じに、太陽城とその城下町を一通り見渡した。

《オレンジ色に染まった王国……太陽国っぽい景色じゃないか?》

「そうですね……」もはやレウインは感無量でそれ以上言葉が続かない。

見たことがそもそもないのか、寧ろ見たことがあって何か感じる
ところがあるのか——それは不明だが、彼は半泣きだった。

とはいえ、同じ風景を見たのは見たけれど、夕暮れの中のもの
は格別だと綾乃も思う。

レウインによると、この裏世界も勿論惑星なのだが、表世界と違
って、あくまで太陽国や水星国といった国の集合体で一つの星（分
かり易く言うと、アメリカ合衆国や日本、イギリスなどは全て地球
という星の上にある、みたいなイメージ。）になっていて、表世界
の太陽とはまた異なっているけれど、果てしなく類似した光源の
星があるらしい。

要するに、表世界の惑星の名を持ち、その惑星を守護しているだ

けで、同じ惑星として各国が裏世界に存在しているという訳ではないのだ。

綾乃は、レウインと、その頭の上で垂れている湊生の隣に立った。

「ありがとうございます」

「急に何っ？」綾乃が過剰なまでに頬を赤く染めた。湊生がそれに気付いて、《ほおお》とニヤニヤしながら言う。

「綾乃さんと旅に出ることになったからこそ、今こうして僕はここにいられるんです。日々多忙で同じことの繰り返しだった僕は、このようなところに来ることはありませんでした」

照れたようにレウインは笑って、「さ、行きましょうか。“面白いもの”は国境にあります」と先を促した。

「な、何これ!!」

国境線のそのラインを隔てて、太陽と水星で全く違っていた。

例えば地面。赤っぽい土が一面に広がった道を歩いていたのだが、きっちりその境界線を境にして草原になっていた。

空間が切れて、また異なった空間と接合されているみたいだというのが綾乃の率直な感想だった。

《面白いな。俺、裏世界にいた間はずっと太陽城の中にいたからよー、サフィール王については詳しいけどそれ以外、外のことなんかはさっぱりだったんだよな》

「じゃあ、お兄ちゃん、エステイ君、国境越えるよ!この旅で初めて国境を越えるんだから、せっかくだから同時に一歩踏み出さない?」

「いいですね」

《あの一、綾乃さんや。》

「何、お兄さんや」

《踏み出す足を持ってない奴はどうすればいいんでしょう？》

「・・・・・・・・踏み出すの止めて、ジャンプで身体全体で入る」

《了解》「わかりました」

三人は一列に並んで、身構えた。

「行くよ！！3，2，1・・・・0！！」

とりゃ、と誰かが声を上げて飛び込んだ。

水星国領土に到達！

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 2（後書き）

二日で一気に四話投稿とは……（苦笑）

まあ、この辺は前書いたのいじった感じだから早いんです。

少しずつ活動報告更新してます！是非読んで下さい。

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 3（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・ティムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……！？

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 3

「あ。おはようございます、綾乃さん」

少し早く起きて朝食の用意をしていた綾乃の元へ、近くにあったらしい小川か何かで顔を洗ったレウインがやって来た。

昨日、水星国に入った頃にはもう暗くなっていて、そこら辺りの木の根元で、三人は毛布を身体に巻付けるようにして眠りに就いた。綾乃がタオルを渡してやり、レウインは笑顔で受け取って顔を拭いた。

「おはよう」

「何だか、凄く寝ちゃった気がしますねー」

「そうね。昨日は初日で疲れてたし、ランプを持ってくるのを忘れちゃったから、早く寝るしかなかったし。城にアルコールランプがあったけど、どうにかなると思うって持って来なかったのは誤算だった」

「荷物になる、とも思ったでしょう？綾乃さんなら」

言われて、そうねえ。それに油が漏れても困るし、と空を見上げた。

入国してすぐに寝た（水星入りしました↓暗いです↓では寝ますか、となった。）ために、あまり太陽国と比べたりはしなかったが——こうしてみると、水の都だけあって大規模の湖が転々とあって、植物や鳥類も多く存在しているようだった。

気候も穏やかで、梅雨みたいに一気に雨が降る月があるが、それを除けば常春の国だ。

太陽国は常夏だから、夏から春に戻った感じがした。

「それに、暗くなったら必要以上は無理に動かない方がいいものです。自然は危ないって言いますから」

「なるほど……じゃ、日々早めに就寝ってことで」

「それがいいと思います。ところで、太陽国―水星国間の国境から、次の目的地となる金星国―水星国の国境までは少なくとも二週間はかかりますから、そのつもりでお願いします」

「二週間……じゃ、ここから水星国の城までは？」

「今の現在地・僕の立っている方向――太陽国を背にしている状態で、太陽国を北として金星やら他の国々のある方角を南とします」
コクリ、と頷いた。

「城は東です」

「それって……どっち？」

「……あっちです」

若干現実逃避しかけている綾乃に、レウインは指差して方角を示した。

つまりは、城経由で行くと三週間近くかかるということだ。

明らかな遠回りに、二人の間に沈黙が落ちる。

《お前ら何話してんの？メシは？》

寝坊して起きてきた湊生の前では、どんよりした雰囲気漂っていた。

「そ、そうね！取り敢えず朝ご飯食べよう？」

「……はい」

朝食を食べ、毛布を片付けて一行は移動を開始した。

《なあ、ずっと聞きたかったんだけどさ、お二人さん》

「何?」「何ですか?」

声を掛けられ二人は足を止め、綾乃は隣を歩くレウインの頭の上を、レウインは顔を上げた。

レウインの頭の上に、現在湊生は寝そべっている状態だ。

水星国は殆ど小島で成り立っており、いくつもの島を無数の橋がそれを繋ぐ形をとっている。

今彼らは、その橋の一つを渡っているところである。

《どうして……徒歩な訳?》

「あー!!それ、私も気になってた!!何で!?!」

綾乃も思い出したように過剰反応し、レウインを見た。

「えーと。そうですね。説明します。移動手段はあるんですけど、敵国の上空を通らなくちゃいけないくて。その際に動向を読まれてしまわないように、とのことですよ」

《ちえー》と、不機嫌そうにごろりとレウインの頭の上で寝返りを打つ。

「徒歩で国境超える人、少ないんじゃない?」

「まあ……そう、少ないですね」

《意味ないっていうか、余計に変なんじゃね?》

短いヒレで頬杖をついた湊生の目は、完全に据わってしまっている。

「要するに、無駄苦労……?」

「いや、無駄じゃないですって。こっちの方がばれにくいです……
……少しは」

「……」《……》

あくまで少しなんだ、と二人は思った。

バレル可能性があるならまだ徒歩の方が……となるのは正しい考えだと分かってはいるのだけれど、これからの遠い道のりを思えばどうしても楽な道が欲しかった。

如何に長い旅になるかは、しっかり太陽城で勉強したから。

ともかく、城まで約三日かかる。だからこの日は、城までの距離

で三分の一の地点にある水星国最大の湖まで辿り着くことが目標だった。

初日同様何かしら話したがった綾乃に、レウインは宮女・クイルが教え切れなかった知識と技術を教えることにした……のだが。

「湊生さん、魔法……使えます？」

《んー？……わかんねエ》

「お兄ちゃん、太陽大命神でしょ！？魔法使えるんじゃないの」

綾乃はクイルから教えられたことを思い出す。

『魔力を持つ者・守護神には属性と特殊能力がありますね。例えばこの太陽国の守護神……それを太陽大命神というんですが、その場合は、属性は光、特殊能力は制御、時間を司ります』

言われた通りなら、光属性魔法が使える……筈。

期待に胸を膨らます二人に、頭をポリポリ搔いて、ケロッとした顔をして湊生は言い放った。

《わかんねエけど、多分無理》

「そう、ですか……」

《少なくとも、この姿じゃあな》

「え……ということとは？」

しょんぼりしかけていた二人が、目を見開いた。

「まさか、使えるかもしれないんですか！？」

《ああ。綾乃の体借りてならな》

「私の体を……それはヤダ」と、綾乃は即答。

そんな綾乃に、レウインは苦笑した。

「あ、綾乃さん……」

《ほーらな。だから出来ないって言ったんだよ。綾乃の体を借りたら、十中八九出来る。でも、練習とかしたことないし、失敗とか力が弱かったりとか、コントロール不能の暴走の可能性が付き纏うけどな》

言いながら、自分の下にいるレウインの頭をポンポンと弱く叩く。乗っかられているレウインはというと、魚のぬいぐるみは比較的

軽く、最初は気にしていなかったようだが――、歩き始めて三時間半も経てば負担に感じ始めたようで痛む首に手を当てている。

いい加減気の毒になってきた綾乃は、そんな兄をレウインの頭から叩き落とした。

《うおっ！ あつぶねーな。何すんだよ、アヤ！》

「エスティ君が重いでしょ。自分で飛んで」

綾乃は、幼い頃湊生に”アヤ”と呼ばれていた。

生前、彼は大きくなって綾乃とよばれるようになって、たまにアヤと呼ぶことがあった。

それを思い出して、綾乃は若干の懐かしさを感じる。

《むー》

「って、魚って、飛んじゃっていいの？」

徒歩の理由に次いで、今度は綾乃からの質問。

《フライングフィッシュー！》

「魚ですか？ 飛びますよ。あれ？ 表世界では飛ばないんですか？」
本気で驚いたようだった。

言われてみれば、さっきから視界の隅を何かが浮遊している気がする。

それは……魚だったのか。

信じたくなくて見なかったことにしていたのかのか、ただ気付かなかったのかはいいとして、現実はそのだった。

「飛ばないよー！！」

《魚は、食べるんだろうな？》

「あ、それは分かる！ 食べるよ。お城のお料理に出て来た！ ムニエルっぽいヤツ」

「はい。その通りです」

美味しかった……と回想モードに入る綾乃。

レウインも過去何度も晚餐に呼ばれたことがあるので、ああもう一度食べたいと思った。

《ならさー、捕まえるの楽じゃね？ 水の中以外もうろついてるなら

さ」

「それが・・・そうでもないんですよね。」

橋を跨ぐように魚が湖から湖へ移動しようと飛び上がった。

目の前の出来事だったため、反射的に手を伸ばした綾乃だったが、つるつと通り抜けてしまった。

「速いし・・・なんかぬるぬるした」

「と、いう訳なんです」

《ほー。》

湊生が魚が消えた水面を覗き込む。

澄んだ水だから、底まで見える。

そこには、たくさんの魚が泳いでいた。

「ところで、今日の昼食なんですが」

「それって・・・もしかしてもしかする？」

《魚？》

はい、と言って渡されたのは釣竿。

黙って受け取り、レウインの次の行動を見てみると、朝食に食べた果物の余りを取り出していた。

その林檎に似た物を含む多種多様な果物は、水が豊富な水星国では至る所で手に入る。

しかも、所有者がいなかったため、タダで。

「この魚は、果物で釣れます」

「これ・・・で？」

水星国の――もとい、裏世界では、魚は果物を食べるらしい。

綾乃も湊生も異常に感じる生態系を前に、啞然としていた。

「ほら、綾乃さん！湊生さん！夕食の分まで調達しますよ！目的地に到達するころには夜になってると思うので、今のうちに釣っておかないといけません」

レウインはやる気十分といった感じに、袖を腕捲りして釣竿を振るった。

現在午後三時。

水星城に着くのは、あと二日と少し。

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part 3（後書き）

活動計画に、今後の章の流れを書いています。

（各話サブタイトルも少し公開！！）

是非ご覧下さい！（コメントを頂けると幸いです）

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』 Part 1 (前書き)

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・ティムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……!?

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part 1

「本当に、水星国は豊かな国ですね」

ぐつぐつという美味しそうな音を立てる特製スープを掻き混ぜながら、レウインは焼き魚担当の太陽大神兄妹に目をやった。

身体がぬいぐるみであるがために、火から近すぎず遠すぎずの距離を保って覗き見ている湊生の様子は笑わずにはいられない。

ヤマアラシのジレンマみたいである。

現在焼かれている魚は昼間、途中飽きた湊生が離脱して昼寝する中、二人が黙々と釣り上げたもの。

その数、合計八匹。

《確かに。果物も美味いよなー》

「うん、美味しいよね・・・おっと、エステイ君、魚そろそろ焼けるよ」

綾乃の声に、レウインが手を止めて駆け寄ってきた。

「あ！はい。・・・わあ。焼き加減いい感じですね」

《だろ。腹減った》

ぐうぐうとお腹を鳴らせた湊生に、綾乃は訝しげな目線を送る。

「え？お兄ちゃん食べるの？」

《な！？ちよっと待て。どういう意味だよ！当たたり前だろ》

湊生は腕を組み、綾乃に迫るように近付く。

だが、魚に迫られても何も応える訳はなかった。

「だって共食いじゃない。ねえ、エステイ君」

「あははっ！そうですね。それで、どうします？本当に湊生さんも食べるんですか」

《レウイン、お前もかよ》

その時、少し冷たい風が巻き上がった。

焼けていく魚を常に視界に入れ、焦げないように注意しながら一旦焼き魚から離れたレウインは綾乃を手招きし、地面に敷いたシートを飛ばないように重石をさせる。

一方自身は、皿を用意してその中にスープを注ぎ、重石をし終えた綾乃に手渡してシートの上に並べさせた。

「魚焦げてしまうので、冗談はさておき食べましょうか」

三人はシートの上に座り、日が落ちて中央の魚を焼いていた火以外の明かりの無い中夕食を取った。

裏世界の木は平均的に、木の枝が巨木でもかなり低いところから分岐しているものが多い。

だからその日は、レウインが用意したハンモックを太く頑丈な枝に取り付けて、そこで眠ることにした。

先日寝た時は、水星国の気候が春の初め頃あたりのイメージであるが故に若干寒く、夜中に綾乃が厚く温もる布団を配って回ったということがあったので、今日は各自前以ってその布団を掛けた。

「お兄ちゃん・・・もう、寝ちゃった？」

斜め下のレウインのハンモックを覗き、彼と一緒に寝ている筈の兄に声を掛けた。

表世界ではないから月は無く、お蔭でおおよその時間すらわからない。

勿論月光も期待出来ず、本来は結構暗いようなのだが、意外と月

が無い分瞬く星々がちょうどいいくらいの明かりとなっている。

因みに、実際の時間的には十時以降くらいといったところだ。

《んにゃ。まだ起きてる》

隣で熟睡しているレウインを起こさないように、小声で返す。

当のレウインは、旅出発以前フードを深く被っていたが、出発後はバンダナを鼻が見えて目が見えないくらいまでの深さまで被っている。

そして、夜はバンダナを外す代わりにアイマスクのようなものをして寝ていた。

「ねえ」

《何だ？》

布団からそろりと抜け出し、湊生は綾乃のハンモックに移った。

綾乃が布団を少し持ち上げ、横に湊生が潜り込んだ。

「私ね、記憶全部戻ったよ」

《そっか》

「お兄ちゃんがまだ生きてた頃。私、よくお兄ちゃんの部屋に忍び込んで、一人で寝れないからって一緒に寝て貰ったよね。覚えてる？」

今みたいに、と言って、綾乃は照れたように笑う。

《俺が死んで、表世界では三年経ったんだっけ》

「うん。そうだよ」

《じゃあ、もう4、5年前か》

懐かしそうに湊生は目を細める。

「お兄ちゃんの趣味の天体観測。邪魔しちゃってたけど・・・楽しかった。いろんな星とか、星座、惑星見たよね。彗星も見たし、日食も見たよね」

湊生の趣味は天体観測であり、“星見の会”とか何とかついているものに所属し、積極的に活動していた。

彼の部屋は亡くなった今も当時のまま保管されているため、相変わらずその本棚にはびっしり星とか宇宙に関する分厚い図鑑など

の本が詰まっている。

彼の影響で、綾乃も星を見るのは好きな方だが、そんな分厚い本を読むほどではない。

ただ、ギリシャ神話の星座エピソードの本に限っては、兄に借りて自室で読んだりすることもあった。

《見たけど・・・どうした、急に。表世界に戻りたくなったか？》

よしよし、と綾乃の頭を撫でた。

いつもは払われるが、少し弱気になっているからだろうか、そのようなことはしようとしなかった。

寧ろ、少し嬉しそうに見える。

「違うって言ったら嘘になるけど・・・私は裏世界好きだよ。

留学だと思って、こっちの世界の問題が解決するまで帰るつもりはない。だって、それが私の“役割”なんだから」

《“役割”・・・か。俺にもあるんだろうか》

「あるでしょ、太陽大命神殿。」

寝っころがったまま、敬礼。

《あー。そういやそうだった。そんなのあったなー》

「もう。忘れちゃいけないトコでしょ。ほんっと緊張感というものが欠けてるんだから・・・」

《それでこそ俺だろ。お調子者で、ノーテンキの篠原湊生！》

っていうか、忘れてるんじゃないじゃなくて逃避しているのだと綾乃は認識した。

「アレン・・・ううん、太陽大命神アストレインⅡヴァーイエルドであるお兄ちゃんと、私の命が連動してるなんて・・・不思議」

《若干違うな。命が連動してたら、俺が事故で死んだ時お前も死んでんじゃない》

「あ、そっか」と、綾乃は苦笑した。

《同じ魂を持つ存在。だから言っとくけど、こっちにもう一人の綾

乃はいねーよ」

「当たり前なんじゃ……だって、その存在がお兄ちゃんなんでしょ」

《そうだ。けど、普通は片一方の世界に魂を共有する者が、合わせて二人いたことの方が異例なんだ。しかも、俺とお前以上にそっくりさんなもんだぜ？》

「そうだったの！？それ気にしなかった！」

《ちょ、綾乃！声大きい！レウインが起きるだろ》

「おっと……むぐ」

思わず叫んだ綾乃は、ハンモックから上半身を乗り出し、レウインの様子を覗った。

綾乃が見ている間に一回だけ寝返りを打ったが、起きることはなかった。

それを見て、綾乃は胸を撫で下ろす。

「良かった。寝てる」

《おお》

綾乃は元のように寝ころがり、天を仰いだ。

「見て。表世界よりも星がはっきり見える」

《そりゃまあ、近所のコンビニとか家とかの光があるからな……》

二人の表世界での家の二軒先にはコンビニ、向かいにはそれなりの規模の塾がある。

コンビニは24時間営業だし、塾も授業が終わっても自習とかで残っている生徒や事務処理的なもので遅くまでの仕事している先生達がいるから、12時くらいまでは明かりが絶えない。

「何の星なのかな。……あれ、私たちが知ってる星じゃないんだよね」

《……》

やっぱり、綾乃は故郷が恋しいのかもしれない。強がっているのかも。

そう考えて、“魂を同じくする者”である自分が綾乃を引き寄せ
てしまって、記憶まで失わせてしまったことを思った。

儀式を行って来させたサフィールやソロンではなく、原因は自分
にあった。

湊生は押し黙り、ただ意味深な綾乃が漏らした言葉を心の中で反
復させた。

が、一泊置いて言った綾乃の照れくさそうな発言に、今までの考
えは全て吹き飛んでしまった。

「裏世界で……お兄ちゃんと再会出来てよかった」

《綾乃……》

「自分が男の子になったのには驚いたけど」

《それなんだけどな、綾乃、お前は表世界と裏世界の時間の流れが
違うのは知ってたか?》

「うん。エスティ君と世話係のクイルさんから教わったけど?」

勉強を始めた初日、クイルと初対面した日だ。

まずは表世界と裏世界の因果関係について教えてくれたつけ。

《ずっとチューブの中で眠ってた俺の魂が綾乃の体に入ったのは、
俺が生きた年数、時間がちょうど綾乃のそれと合致した時じゃない
のかなってさ》

「え!? でも、それって……」

《基準が表世界だから、合ってるんだよ》

「そうなんだ……やっぱり、お兄ちゃんと私。繋がってるん
だね」と、綾乃が笑う。

《おう。俺はもう死んで、これ以上死ねないし、映画に出てくる
ような魂を消滅させる装置もないし。俺は、綾乃がこっちにいる間
は傍にいる》

「……うん」

何だか眠たくなってきて、瞼が落ち始める。

それでも、一番言って置きたいことを言わなきゃいけない。

これから関わってくるから。

「あのね、お兄ちゃん？」

《んー？》

「もし、必要な時が来たら」

《うん》

「私の体、使ってもいいよ」

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part 1（後書き）

P i x i vでキャライメージを公開しています！

一番新しいのは、”旅前・旅中”。

旅前と旅中の綾乃とレウインの服装及びキャラ自体のイメージが掴めます！

”太陽系の王様”で検索して下さい。他の同シリーズの絵もたくさんあります。

活動報告更新中！小説の最新情報とかあります！是非チェックしてみして下さい！コメントを頂けると幸いです。

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』 Part 2 (前書き)

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・ティムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……!?

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part 2

翌日。

「やあっと着いた……」

午後5時にしてようやく見えた水星国の城下町に、綾乃が気の抜けた声を漏らした。

「何だか疲れちゃいましたね。町に入ったら、今日はもう宿でゆっくりして、明日の午後謁見しましょうか」

「うん、そうしよ……ふああ眠い……」

綾乃の斜め掛けのバッグの上には、既に飛び疲れたらしい湊生が倒れるようにして寝ている。

時折、頑張って歩いている中暢気そうに寝ている様が恨めしく思えて、ヒレを掴んで逆さ宙吊りにしてみたりもしたけれど。

それでも湊生は睡眠を邪魔されることなく爆睡していた。

一足先にリラックスするぬいぐるみとは打って変わって。

レウインと綾乃は目標を目前にして、よろよろする体を叱咤し、三倍速で歩き出した。

朝、彼らが泊まった宿では一騒動あった。

それは、朝食を食べに行こうとレウインが綾乃の部屋へ誘いに行った、七時半のこと。

「綾乃さん？起きていらっしやいます？」

ノックをしても、反応はなかった。

昨夜は、話した通り二人はさっさと夕食を取ってそのまま部屋に入った。

サフィールが手配してくれていた旅の所持金は、並々ならぬもの。お金の管理は、まだ裏世界に不慣れで物価や通貨単位すら知らず、旅を始めて尚勉強し続けている綾乃より、裏世界に慣れ博識であるレウィンが担当するのが妥当だったため、サフィールは彼に多額の所持金を託した。

お金を持つレウィンは、綾乃の判断に従う旨を伝えた。それをサフィールは許し、レウィンは綾乃に使用用途を尋ねたところ。

その金額さえあれば、楽に旅が出来そうなくらいだったが、綾乃は必要最低限のみ使うようにしようとレウィンに提案してきたのである。

元々同意見だったレウィンは、アッサリ承諾した。

そのため、その日とった宿は一室のみで、ベッドルームが二つあるものを選んでいた。

「綾乃さん！？綾乃さん！！」

何度呼んでも。

いくらドアを叩いても。

鍵の掛かったドアは、開く訳もなく。

《どーしたー？早く飯食いに行こうって》

レウィンと湊生が寝ていた部屋からひょっこりと姿を現した湊生の方へ、必死の形相でレウィンが振り向いた。

「綾乃さん、部屋にいる筈なのに……声を掛けても……何にも答えてくれないのです！！」

鍵も掛かってるし、どうしようもなくて。

《綾乃ー？おい綾乃ォー？》

「綾乃さん！！……湊生さん、どうしましょう！？」

《落ち着け。》

落ち着けなんていられないですよ、と言って彼らしくなくおろろするレウインとは裏腹に、湊生は完全に落ち着き払っている。

旅の荷物の中から綾乃のヘアピンを一本取出し、パキンと二つに折ってカギ穴に差し込んだ。

器用にヘアピンを操作して、一分弱。

ガチャリと音がした。

《お》

「開きました!？」

《開いた》

「っ! 綾乃さん!!」

叫んで、ドアを勢いよく開く。

そこで見た光景に、レウインは息を飲む。

ベッドの傍に、ぐったりと綾乃が蹲っていた。

一瞬間まっていたレウインだが、すぐさま駆け寄って抱き起す。

顔色を窺えば、真っ赤で額に汗も滲んでいる。

「大丈夫ですか!？」

抱き上げ、ベッドに寝かせる。

《相当参ってるな。レウイン、氷水と薄手のタオルを頼めるか? 俺はこんな体だから出来そうにないんだ》

「はい。すぐに用意致します。綾乃さんを看ていて下さいね」

《おうよ。頼む》

やっといつもの冷静な彼に戻り始めたレウインは、湊生の指示通りのものを探して部屋を出て行った。

《これはヤバいな。呪いの部類だ……。くそ……。》

レウインとは逆に、先程とは打って変わって辛そうな顔をして、悪態をついた。

「少しは楽になったでしょうか？」

額に冷たく濡れたタオルを乗せ、別のタオルで汗を拭き取る。

汗をかいているだろうから、本当は服を着替えさせるべきなのだろうけど、流石に相手は女の子なのでそれは出来ず、出来るだけ汗を拭った。

《ああ、多分》

言いながらも、湊生はそうは思っていなかった。

おそらく、言いたかったのはこれ。

“ああ、多分駄目だろう。原因を絶たない限りな。”

空中を泳ぐ彼の目線も、泳いでいる。

それに気付いたレウインは、湊生の尻尾を軽く摘まんだ。

湊生は、何だ？と言わんばかりにレウインを見る。

「嘘……なんですね」

《俺って嘘下手だな》と、湊生は思わず苦笑した。

「で、本当のところは？」

《非常にまずい。これは呪いだ》

「呪いですか？」

《かけられたのが強い守護神なら、打ち破れるもの。ハッキリ言って、俺にかけられていたなら何とも無かった筈だったんだよ》

魚にかける奴なんていないだろうけどな。

おそらく、死には至らずとも激しい衰弱は免れないだろう。

そう、おそらくは。

「ワーム」

ティーカップに紅茶を注いでいたワーム秘書は、呼ばれて俯いていた顔を上げた。

「何でしょうか、ティム様」

「別件の方、手配通りしてくれたんだらうな？」

「はい。今頃は・・・きつと」

カップがティムの執務机にそっと置かれる。

そのカップに口を付け、僅かに飲んだ彼の口元には、怪しい笑みが形作られていた。

「使えるなら手駒に。使えないならカスだ」

「うっ、けほ・・・」

綾乃が咳き込み、近くの椅子で看病しつつ分厚い本を読んでいたレウインが焦って近寄った。

支えながら上半身を起こして呼吸し易くし、緩和薬を飲ませる。それから何度も背中を優しく擦ってやった。

「大丈夫ですか？」

体調不良であるというのに、綾乃は密着するレウインに気がいつて仕方なかった。

そして少年であるというのに、彼からは甘い匂いがする。

優しく、温かな、彼の。

どうしてか聞いたことがあったが、レウイン自身思い当たることはないという。

綾乃は鈍感な方ではない。

だから、彼女自身、あの太陽国で城下町に二人で出かけた日以来自分の中で渦巻く感情の名を理解している。

彼を意識しまいとしても、それは不可能な領域まで達していた。
まだ出会って、二月にも満たないというのに。

「う、うん……今日はいつもより少しマシかな」

レウインが心配そうに顔を覗き込んで。

過剰に彼を意識する綾乃は、発熱しているからも体温が高くて顔が赤いのは当たり前のことだが、それとは違う理由で顔を赤らめて俯いた。

「本当……ですか？」

「やだ、そんな心配そうな顔をしないで」

「綾乃さん……」

「ごめんね、本当はこっちに來て次の日に謁見しに行こうって言ったのに……もう、一週間、経っちゃって……」

そう、もう水星国の城下町に着いてから一週間も経つ。

その間、ずっと綾乃の具合は悪い。

レウインと湊生はそれが呪いから來るものであると分かっているが、当の本人は、表世界には無い裏世界特有の——レウインの欠損病みたい——ものであると、思い込んでいるようだ。

彼女の前でのみ平生を保つ二人からは、その状態の深刻さが窺えない。

だからか、綾乃は長引いてるな程度にしか思っていないのである。

「そんな……気にしないで下さい！」

「何だかお互い励まし合いみたいないな感じだね」

苦笑する綾乃に釣られ、レウインまで口元を緩ませた。

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part 2（後書き）

ちよくちよく活動報告を更新しています！

今後のこの「太陽系の王様」についての情報が書かれていたりします！

是非読んでみて下さい♪コメントを頂けたら嬉しいです！

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』 Part 3 (前書き)

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・ティムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……!?

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part 3

「何だかお互い励まし合いみたいな感じだね」

苦笑する綾乃に釣られ、レウインまで口元を緩ませた。

・・・その時。

「!・・・うう、頭痛い・・・」

急に綾乃が頭を抱え込んで、悲鳴のような声を上げる。

その頭痛はどんどん酷くなって、刺すような痛みから、頭が割れてしまうような感覚に襲われた。

「頭・・・割れそうっ・・・!」

「大丈夫ですか!？」

「痛い痛い痛いっ・・・!!」

「あ、綾乃さん・・・!」

その痛みを変わってあげられたら、とレウインは思う。

綾乃の痛みがりは尋常ではなかった。

目尻に涙を浮かべ、ただ悲鳴交じりの言葉を漏らすだけ。

何か出来ることはないか必死な顔で周囲を見回したところ、室のドレッサーの上に大切そうに置かれた小箱に目を留めた。

「もしかして・・・!」

立ち上がって手に取り、開いたその小箱の中には、レウインの予想通りのものが入っていた。

それはあの城下町に行った時、自分が綾乃にプレゼントしたものの革紐で作られたその先端には、直径1?くらいの大きさの透明の硝子に包まれた虹色の石が付いている。

各国の宝石の廃材を重ねて接着し、丸く削ったもので、因みに手ごろな値段で手に入るものだ。

このペンダントは大変な人気商品で、その売りは一回だけ魔法が持ち主を守る時に発動するかもしれないという半伝説的な商品。

自分の見立てによると、今自らの手の中にあるペンダントは珍しくどれか分らないけれど、十層の内三層が魔力を秘めた物。

もし、第三層目の金星国産出の石が魔力を持つものであれば。

金星国守護神が持つ“癒し”が使える。

その可能性を………！

「綾乃さん！これ、首に掛けて下さい！もしかしたら………！」
痛みに耐えるので精一杯の綾乃はペンダントを受け取るどころではなかったため、レウインがペンダントを綾乃につけた。

レウインの手が、ペンダントから離れたその刹那。

「………っ!？」

その虹色の石が閃光を帯び、やがて収束した。

あまりの眩しさに思わず目を閉じたレウインが恐る恐る目を開けると、綾乃の身体がぐらりと傾き、ベッドに倒れこんだ。

ピシッ

音を立てたのは、綾乃の胸元で輝くペンダントの先端。

虹色の玉の一部にヒビが入っていた。

あともう二回使えば、球の部分は綺麗に碎けるだろう。

でも、取り敢えずは。

「良かった………。“癒し” あったみたいですね」

倒れた綾乃の顔色は、先程までとは明らかに違う。

苦しみ始めて青白くなった彼女の顔の、その頬に赤みがさす。

瞼が閉じられてはいるが、規則正しい寝息が聞こえる今、彼女はただ寝ているだけだろう。

「無力にも、僕には貴女を守る力はありません。その代わりに、この石が綾乃さんを守ります。だから………だから、安心して眠って下さい」

乱れた綾乃前髪を両脇に払い、布団を整える。

「頼りないかもしれませんが、僕ここにいますから」

安堵したレウインは、気が抜けてベッドの傍に膝をつき、突っ伏すような形で眠ってしまった。

《おい、レウイン、交代……って、んん？》

一時間ほどして、綾乃の看病を代わろうと室に入ってきた湊生は、そこに広がる光景に目を細めた。

《二人とも気持ち良さそうに寝てんな。しかも、呪いが解かれてる》
そして、綾乃の首に掛かったペンダントに気付く。

《これの……お蔭、か》

何だそのペンダント、と太陽城を立とうと準備していた時湊生は綾乃に聞いた。

綾乃は丁寧にペンダントについて話してくれた。

その時点で、湊生は気付いていた。

なあ、綾乃？お前——レウインのこと、好きなんだろう？

自分の知る限りでは、きっと綾乃はこれが初恋。

優しく見守ってやりたいところだが。

その恋が、成就する筈もないことを、湊生は知っている。

レウイン側ではない、そう、今まさに彼に恋する綾乃、その人自身の問題で。

この旅を、続けるのならば。

まだ朝にしては少し早い時間。

そのタイミングで綾乃は目覚めた。

「よく寝た……もう体も大丈夫みたい……あ」

軽く反対側に寝返りを打った綾乃は、隣でベッドに突っ伏した形で眠っているレウインに顔を少し赤らめた。

不意に、レウインの身体が僅かに揺れ、バンダナで隠れてしまっている目が開いた。

「ん……」

「おはよう、エステイ君」

「お……おはようございます」

寝ぼけた声で挨拶をしたレウインは、自身の体に掛けられているものを見て、僅かに驚いた素振りを見せた。

「あれ……タオルケットがどうして……もしかして、綾乃さんですか？」

「ううん、違う。私、今起きたとこだもん。多分……」

言って、綾乃はレウインの頭上を指差した。

そういえば、何だか重い気がする。

自分では見えないため、レウインは手を伸ばして触れてみた。
ぬいぐるみ？

「湊生さん……？」

「じゃないかな？」

「そうかもしれないですね」言って、レウインが笑う。

「エステイ君」

「はい？」

「看病してくれて、ありがとうね？」

「はい。綾乃さんは、もう大丈夫ですか？」

「大丈夫。元氣一杯だよ。だから、今日はお城に謁見しに行こう！」
元氣が有り余っているかのようにガッツポーズを決める綾乃に、
若干レウインは不安げな顔を向けた。

「病み上がりですよ？」

「うん！遅れを取り戻さなきゃ！」

飛び起きて、室内に取り付けられた洗面台で顔を洗う。

フェイスタオルで顔の水分を拭った後、またベッドの方に戻ってきた。

着替えますか？と、部屋を出ようと腰を浮かせようとするレウインに動かないように言い、その頭の上の物体のヒレを摘まむ。

が、摘まんだくらいで反応する訳もなく。

彼の偉大な睡眠力には閉口する。

「お兄ちゃん、起きて」

《あと五分》

「起きてってばー」

《あと十分》

「起きろー」

《あと十五分》

なかなか起きず、次第に増えていく時間に綾乃は大きく息を吸い込んだ。

「寝るな！！起きなさいっ！！！！」

湊生は即座に覚醒し、動いたレウインの頭から転がり落ちた。

「謁見の申し込み？」

書類に目を通し、印をつくティムは、めんどくさそうに反復した。

「はい」

「ヤツらか？」

「その通りでございます。あの娘も」

ワーム秘書の言葉にティムは目を鋭く光らせた。

「通せ」

「あの呪い……無事に解けたみたいですねティム様」

「でなければ困るんだよ。でなけりゃ、駒として使えないだろ」

また一枚印を押し終えて横の山に乗せる。

その手を不意に止め、ワーム秘書の方を見る。

「さあ、これから始まるぞ……アイツへの復讐が」

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part3（後書き）

毎回毎回書いていますが、活動報告を是非ご覧下さい。

次は第三話に入ります。

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Part 1（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……!？

（※タイトルの”獣”は”けもの”ではなく”ケダモノ”と読みます。）

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Part 1

「分かりましたか？つまりはそういうことなんです」

水星国守護神に謁見する前に、レウインはもう一度、今度は前よりも詳しく水星国の王権交代問題について綾乃と湊生に説明した。

裏世界では、表世界とは違ったシステムがある。

そもそも王家とは、守護神を輩出した家のことで、そこから国王が選ばれる。

守護神は三百年ほど生きるもので、その一族内に守護神がいる期間だけ国王を立たせることが出来るというのが決まりだ。

守護神が死せば、自ずと王家は交代となる。

新王家・リコレット家は、旧王家・コルトヴァール家に支配された王家。

元々公爵家であるコルトヴァール家の現当主は、両親の死（暗殺という説が最も有力）に際してまだ十代半ばにして王位につくことになった。

だが既にその家が輩出した守護神は老いていて、彼が王になって半年で亡くなってしまった。

王権を剥奪され、全てを失ったことに絶望した彼は、預言により次選ばれたリコレット家の爵位が子爵と低いのをいいことに裏で操作し、今では実質的な権力者という立場手にしている。

有無を言わせないようにするために、守護神以外のリコレット家とその血縁関係にある者達は皆殺しにされたというのは有名な話だ。
「なるほどね」

《てか、水星国は貴族制なんだな》

「あ、そうだね。エスティ君子爵だの公爵だの言ってたし」

「その通りです。裏世界は完全独立自治制を導入してまして、国によって統治制度は全く違うんですよ。王国じゃなくて帝国だったりするところもある、ということですよ」

《ほお》

「……ねえ、エスティ君」

「はい？何でしょう」

「協力、あっさりしてくれると思ってる？私は、無理だろうなーって思ってるんだけど」

「まさか。僕だってそうは思っていないですよ？」

当然と言わんばかりに答えたレウィンに、綾乃は若干拍子抜けしたが、納得もした。

頭脳戦に長けたレウィンがそう安易な考え方をする筈がない。

「水星国守護神は“ゲーム好き”というのが専らの噂ですから。何かあるだろうというのは想定済みです。あくまでも民草が語る噂故、信憑性に欠けるように思われるかもしれませんが……。逆に、貴族が知らぬようなことまでも知っていたりするのです。特にこの、水星国では」

倒置法が使われた意味深な言葉を放ち、レウィンは押し黙った。

「それじゃあ、君が太陽大命神と魂を同じくする者？」

ティム——本名、ティスラムⅡリコレットである青年は、まるで品定めするかのように、目の前でレウィンを真似て片膝をつく綾乃を凝視している。

その面持ちから、綾乃は自分は蔑まれているのではないかと疑ってしまう。

気圧されて、その何かしらの圧迫感から仰け反ってしまいそうに

なるほど。

「え、えっと、その……た、多分……私のこと……です」

口を開けば、紡ごうとする言葉は途切れ途切れで。

彼の第一印象は、“怖い”、それに尽きた。

綾乃の返事に、ティムは「ふーん」と表情を一切変えずに言った。

「報告は受けている。お前達、名は？」

「わ……私は」

吃ってしまう綾乃とは打って変わって、見られていないレウインにはティムからの圧力は一切無いようだった。

何かに怯えたような綾乃に、レウインは軽く擦るように背中に手を当てた。

「大丈夫ですよ。……ティム様、こちらは篠原綾乃さんです」

「ふむ……そういうお前は、見掛けたことがある気がするが」

「はい、一度ティム様が太陽国の王城にいらした際に。覚えていて下さるとは光栄です。私の名は、レウイン。レウインⅡエステイト申します」

名乗ったその名前に、ティムは見覚えがあった。

レウイン、レウインと名を繰り返して呟き、記憶の奥深くに眠ったそれを思い出そうとする。

と、急にポンと手を叩いた。

「レウイン……そうか、思い出したぞ。お前、確かパシエンテだったな」

「……はい」

少し不快を露わにしたレウインは、それでも肯定した。

「そう気にしないでいい。嫌悪して言ったつもりはないし。サフィール殿が、可愛がっているという話を耳にして。っと、本題についてだが……悪いが、レウインは席を外して貰えるか？向こうでワーム秘書が、紅茶とちょっとしたお菓子を用意している筈だからそれを」

「はい。分かりました。では綾乃さん、後程。．．．．失礼致します」

「うん」

「呪いが解けるくらいは魔力持ってるらしいな」

レウィンが部屋を出て、その扉が閉まった瞬間、ティムは訳の分からないことを言いながらにやりと笑った。

「．．．．．？」

「それにしても、表世界から来たヤツだって皆言うからどんな奴かと思っただけど．．．．．」

近付いてきて、すぐ前で立ち止まり、しゃがんでいる綾乃のくいつと顔を上げさせた。

表情が、口調が。

一瞬にして．．．．変わった。

先程まで綾乃だけが感じていた恐怖は、恐らく彼の本性だったのではないだろうか。

「こーんな間抜けな奴だったとは。ガッカリ」

「え．．．．」

「まあいいさ。魔力さえあって、俺の役に立てばそれでいいんだから」

「魔力．．．．そんなもの．．．．」

持っていないし、何の事？と聞こうとするも、ティムは遮って問い詰める。

「持ってるだろ？嘘ついて騙しても駄目だぞ」

傍らのバッグの中で人形のふりして静かにしている湊生は、イライラを抑えるので必死だった。

湊生は綾乃の呪いが解けた理由も、彼女が苦しんでいた先日の子の病気の原因が呪いで――、おそらくそれを行ったのが今妹の目の前に立つ男であるだろうことも知っている。

ずっと警戒していたが、自分は今魚の姿で。

もし何かあった時・・・どうも出来ない。

レウインがいるから安心と思っていたが、彼は先刻部屋を出て行ってしまった。

彼には、呪いを掛けたのがティム、その人であるかもしれないことは話していなかったのだ。

確信も持てていなかったし、レウインは何も力を持っていない一般入だ。

だが彼のお蔭で、綾乃は守り石のペンダントを肌身離さず身に着けてくれている。

もし・・・ティムの水属性魔法で攻撃されたとしても、あと二回、石は綾乃を守ってくれる筈だ。

三つあった内の一つは、癒し。

他のどの石が魔力を持つにしろ、他は全部攻撃系。

また呪いを食らった場合は・・・。

綾乃の体力は、まだあまり回復していない状態であるから、再度呪いを受ければきつと衰弱量は一回目と比ではない。

そうなれば、“癒し”の力を持つ金星国守護神の元へ行かなければならない。

そこまで綾乃の体力がもつか分からないし、加えて簡単に助けてもらえるのかも分からない。

「持っていない・・・知らない・・・魔力なんて・・・呪いなんて・・・」

「嘘をつくな!!」

ティムの手が、綾乃の首に触れる。

「俺はお前に呪いを施した!!それを解けるのは、魔力を行使してのみ。魔力を持たずして、解ける訳が・・・解ける訳が無かる

う!!」

「呪いって……だから何のこと!?!」

勿論、綾乃に思い当たるところなど無い。

呪いを解いたのは……彼女ではなく、彼女の首から下げられているペンダントの石なのだから。

「病に罹り、弱り。果てには、死に至るものだ! 弱く何の力も持たない駒など、もはや無価値。そこの石ころと何の大差も無い。だから、もし力を持たねば死するようにしていた!」

「じゃあ、あの病気は……!」

怒りが込み上げてくる。

一週間苦しんだあれが……全て、この人のせい……。『そうだ! だが、お前は回復し、ここまでやってきた! 力を持たぬ者には不可能なことだ!!』

「そう言われても……寝ているうちに治っていたんだから……私は何も」

ティムも、守り石のペンダントのことは知っている。

運が良ければ魔力の籠っているものが紛れ込んでいるかもしれないことも。

だが、ペンダントは湊生の指示で服の下に隠してあるため気付かず、そして更にその石が三つも魔力を秘めているというレアな石で——この旅に同行しているレウインが、それを見抜けることもティムは知る筈もなく。

そうして、ティムの脳内で行われている情報処理は、誤った方へ誤った方へなされていく。

「未覚醒なのか!?!……なら、仕方ない。あの呪いは魔力を引き出すものだから、覚せいを促す効果もある……。綾乃、俺は気が短いんだ。俺の計画通すには……さっさと覚醒してもらわないと困るんだよな。だから……。だから俺は、何度でもあの呪いを掛けてやる!! オマエが覚醒するまで……!」

「い……。いや……」

如何に苦しかったか……今朝までのことを思い出せば、恐怖が過る。

いやいやとゆっくりと顔を左右に振る。

「嫌？ ハッ、嫌だろうと何だろうと！ 覚醒し、俺の手駒として働かすまでだ！！」

「いや……！！！」

「働け！！優しく言ってやってるうちに“はい”と言え。でないと、強硬手段に出るぞ。……いいか、これは脅しじゃない。本気だ。使えないカスに生存権などない」

「う……くっ」

口から、悲鳴が漏れる。

「はいと言え！そして俺に従うと！！」

首が少しずつ絞められていく。

それにつれて、綾乃の視界はやがてぼやけていった。

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Part 2（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・ティムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……！？（※タイトルの”獣”は”けもの”ではなく”ケダモノ”と読みます。）

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Part 2

「はいと言え！そして俺に従うと！！」

首が少しずつ絞められていく。

それにつれて、綾乃の視界はやがてぼやけていった。

途端、綾乃から光が放たれ、弾けた。

「な……何だ！？一体、何が起こって……！！？」

「たかが水星国守護神の分際で……調子に乗り過ぎたな」
光が次第に収束していく。

あまりの眩しさに目を覆っていたティムは、目の前の少女から発せられる殺気に気付き、まだ光の消え切らない中目を開けた。

そこには、先程までの自分に怯える少女の姿はなく。

代わりに、少年がいた。

最初は、入れ替わったのかとティムは思った。

だが、そうではないと本能的に悟る。

少年の顔は見えない。

綾乃が裏世界に来て初めて会った時のレウインのようにフードを深く被った白衣の少年は、神官達のようなだが、それよりも高貴で神々しく。

それで、何とも言えないほどの圧力をその身に纏っている。

「貴様……誰だ……！！」

「誰だとはご挨拶だね。アンタの駒になり得る人材に対して」

「駒……！！」

と、現れた少年は廊下の方を見遣った。

何だろうとタイムもそちらを向く。

やがて、すごい勢いで走ってくる足音が聞こえてきた。

その足音はドアの前まで来ると止まり、ノックするや否やドアが開く。

「綾乃さん!! さっきの光は………えっ!?!」

入ってきたレウインは、硬直した。

お茶とお菓子を暢気にもいただいていた彼は、異変に気付いて即座に駆け付けてきたのである。

「どなた………です? 綾乃さんは………どこに………」

「レウイン。俺だ。湊生だよ」

「あ………湊生さん!?!」

更に驚いたレウインは、足元に転がってきたものに目を留めた。

それは、綾乃にあげた守り石のペンダントの先端に付いていた石本体。

チェーンは粉碎し、湊生の足元に散らばっている。

「魔法が………発動したんですね」

「ああ。」

「それで、何があったんです?」

実はな、と湊生はレウインが室を出て行っからのタイムの言動について洗い浚い話した。

湊生が言葉を紡ぐにつれ、そこまで知られていることに驚き、タイムは焦りから明らかに挙動不審になっていく。

それも当たり前、湊生はずっと綾乃の傍らのバッグの中にいて、全て聞いていたのだから。

「それは………最低ですね」と、湊生の話を聞き終えたレウインは、その目を鋭く光らせる。

僅かしか彼と話していないタイムだが、彼の変貌ぶりがいまにも顕著で、それでいながら敬語を崩さないのが尚怖く感じた。

「どういことだ!?! クソ生意気なそいつは誰だ!?! 言え!?!」

湊生はうつとういと言わんばかりにフードを脱ぎ、その顔を晒

す。

綾乃と瓜二つのその顔に、ティムは絶句した。

「生意気なのはお前の方だ、水星国守護神、水属性魔法の使い手・ティスラム||リコレット」

「まさか………アンタは」

「お、分かった？人を蔑むことしか出来ない、その残念な頭でも分かった？んじゃあ、まあ合格か」

「失礼な………霊体の分際で………！！」

何とでも、と湊生は相手にしない。

どうやら、湊生の方がティムよりも精神的に大人のようだ。

「お目に掛かれるとは思ってもいなかったよ、太陽国守護神！！！」

「いやー、いつでも大丈夫と思っていたんだけど、入られなくてさー」

「ぬいぐるみから出て、綾乃さんの体に入ることが出来なかったということですか？前に出来ると仰られてましたよね？」

レウインは水星国の城下町までの道のりで尋ねたこと思い出す。

確かに、湊生は出来ると言っていた。

「おー。俺もそう思ったんだが、実際はそうはいかなくて」

湊生が、いやいや申し訳ないと苦笑した。

「そこで、この石の力が発動したようですね」

レウインの手中の石には、昨夜入ったヒビよりも深いものが幾本も入っていた。

一つ目は、回復魔法。

二つ目は、光魔法。

使えるのは、あと一度のみ。

レウインは、自分の推理したことを湊生に確認するように訥々と語り出す。

綾乃と湊生は一度一体化していたため、湊生が綾乃の身体に入ること自体には何ら問題ない。

が、その前の綾乃の精神状態があまりにも悪かった。

再度掛けられる呪いに、首を絞められるという死の恐怖に。
石が主である綾乃の危機を察知して、残った二つ内の一方、光属性魔法が発動した。

その作用で、湊生は綾乃と一体化に成功したのだ。
だから、湊生は出遅れてしまったのである。

レウインの推理に、湊生は黙って頷き、肯定の意を示した。
それを聞いていたティムは動揺し、落胆する。

「な……何だよ……。綾乃には、魔力は……。無かったって言うのかよ……。ははっ、守り石のペンダントとは……。考えもなかったな」

「残念だったな」

突然俯いたままのティムが狂ったように笑い出す。

「はははは……。だが、太陽大命神殿、アンタも覚醒して間もなく、魔力のコントロールがイマイチなんだろう？」

「ああ、そうだな。それが？」

さも問題なしと言わんばかりの湊生に、ティムの笑いが消える。

「それがって……。俺と遣り合って、勝てると思ってんのか!？」

「ん? 思ってるけど」

「えっ!? 湊生さん!？」と、レウインも驚いた。

「まあ、それはともかく。綾乃をお前の駒にしたがった、その目的は何だ?」

「……。復讐を。」

「旧王家、コルトヴァール家にですか?」

「そうだよ。未だこの国はコルトヴァールの支配下だ。それを、乗っ取り返し、当主が跪き泣いて謝るような復讐を……。!」

「はいはい。で、そのどこの要素に魔法関わんの?」

相変わらず、湊生はティムの発言を流す。

いつもは綾乃とレウインに流されている立場なので、レウインとしては少し違和感がある。

「コルトヴァールのバックには、敵国がいる。敵国を倒し、公爵家を失脚させる。そのためには、より多くの“魔力持ち”が必要なんだ」

「なーんだ」と、湊生。

「そうですね・・・」

レウインも小さく溜め息をつく。

「何なんだ、その脱力感!？」

「だってよ、まさか目的一緒だなんて思わないし」

「だから、目的一緒でも弱い奴らだと足手纏いだし、勝算も無くなるだろ!! だから、俺は・・・!!」

悪人のふりしてどうにか力を出させようとしたんだ、と言おうとするも、湊生は聞こうとしない。

自分が聞いたくせに。

「まあ、もういいよ。協力してくれるならそれでいいから。本音を吐かせるためとは言え、いい加減演技に付き合っただけなのも疲れてきたしな・・・」

「演技だったのですか、御二方共!？」

「って、俺の演技は無意味か!! オイ、太陽大命神!!」

「うい、無意味。俺、演技だって知ってたし。綾乃やレウインは・・・気付いてなかったようだけどな」

湊生が演技だということに気付いたのは、綾乃と一体化してから。理由はないが、直感的に。

「それもどーなんだよ!？」

湊生は綾乃から離れ、魚に戻る。

綾乃の身体から抜け出た光る玉が魚のぬいぐるみの中に吸い込まれていく。

崩れ落ちる綾乃の身体を慌ててレウインが受け止め、壁に凭れ掛かるように座らせた。

ぬいぐるみの中に入ると、魚の目が瞬いた。

空中を浮かびながら“問題解決、よかったよかった”と繰り返す

湊生から少し離れたところで、火花を散らす人物が約一名。

確かに、仲間になってくれたのはよかったし、目的が同じだし、本当は悪い人じゃないらしいけど。

「よくはないですよ……」

レウインの肩が震えている。

これには、湊生もティムも頬を引き攣らせた。

「ティム様……綾乃さんの首絞めておいて……演技で誤魔化せるとでも思ってるんですか……」

「いや、それは悪かったけど!! 殺すつもりは……」

「そんなのは当たり前です!!」

レウインは一声怒鳴って、すぐに満面の笑みを見せた。

そしてティムに近付き、何かを耳打ちする。

少し離れているがために何を言っているのか分からない湊生は、ティムの顔をじーっと見ていた。

すると、顔色が青くなって、その後白くなった。

レウインは言い終えると笑みを浮かべたまま振り返って、近くに控えていたワーム秘書の元へ行き部屋を借りる。

綾乃を抱きかかえ、そのままレウインは出て行った。

「なあ、ティム」

まだブルブルと体を震わせているティムに近寄った。

「さっき、レウインに何言われたんだ?」

「……」

「なあ、何て?」

ティムが言った貴族・王族、守護神にすら身分関係無し of レウインのセリフは、湊生も凍らせた。

純粹無垢で、優しく情の厚いレウインが、まさかそのようなことを言うとは考えもせず。

湊生がブラックレウインの存在を後に主張することになった、そのセリフは。

“君が国を乗っ取りかえして……その後、ちゃんと統治出

来ると？僕にはそうは思えないんですけど。タイム様もそうは思いませんか？ほんっと笑っちゃいますね。まったく、おふざけも大概にして欲しいって言いますか・・・今度綾乃さんに危害を与えてみて下さい。体力・魔力はない僕ですけど、持てる知力を総動員させてこの世に姿を現せないほどの辱めを受けて頂きたいと思ってるのですが、いかがですか？” って言ったんだよ、アイツ！！身分のくせに・・・でも、俺、アイツには逆らわないようにする・・・」

「ああ、タイム・・・それがいいよ・・・」

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Part 3

(前書き)

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・ティムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて……!? (※タイトルの”獣”は”けもの”ではなく”ケダモノ”と読みます。)

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Part3

「なあ……正直傷付くんだけど」

「自業自得です。僕は知りません」と、レウインはそっぽを向いた。ティムの手配で、一行は金星国との国境まで馬車のような乗り物で（少し楽して）行けることになった。

だが、一度殺されそうになった綾乃は、実はティムの件の行動は全て演技であったことを聞かされた今も尚彼に対して怯えてしまっていた。

そのためにティムが左端に座り、中央にレウイン、そして右端に綾乃という状態。

因みに湊生は綾乃の膝の上だ。

綾乃は隣に座るレウインの袖を僅かに掴み、全身を震わせていた。それでいながら、ちらりちらりとティムの方を見て、安全確認をしている。

原因はティムにあり、間違いなく非も彼にある以上、レウインも彼を助けようとは思ってはいなかった。

「おま……仮にも俺は水星国守護神だぞ！？何様のつもりで……」

「何様だろうと、自業自得です。一切救いの手を差し伸べる気はありませんので」

「うっ……」

《おー言っやれ、言っやれ！！》

湊生は煽ってヒートアップさせようとしたが、ティムや湊生よりも精神的にレウインの方が大人であるため、それに乗りはしなかった。

「取り敢えず、名誉挽回のためにもしっかり働いて下さい。それで、綾乃さんが心を許すかは別の話ですけど」

「おう・・・分かった・・・」

ティムは、完全にレウインの支配下に入りつつあった。

「・・・・・・・・・・。」

ピシッ。

荷台に乗せられた綾乃の旅行鞆の中。

太陽国国王・サフィールより預かった丈夫な木箱に入れられた六つの宝玉の内一つに、ヒビが入った。

その夜。

やはりティムから少し距離を取って眠る綾乃は、大いに変な夢を見た。

第三者としてみるものではなく、記憶を共有するかのような、夢の中の人物になりきる系の夢。

『えーと。何て言うか・・・鈴木さん、本当にこの大学が第一志望・・・・・・・・？』

高校三年生の春。

新任ながら傍迷惑なことにも三年生の担任になった大林先生は、三年生になってすぐにあった第一回全国模試の結果を片手に、唸り

ながら尋ねた。

彼女の前には、先日自分が書いた志望校の表が置いてある。

『はい、そうですけど・・・ダメですか』

定期考査とは違い、実力考査と模試はこうして面談時に返却される。

だから、まだ私はその結果がどうなのかを知らない。

でも・・・今までのを思い返してみれば、相当悪い気がする。

『今の勉強時間は？』

不意に話を大きく変えられ、私は躊躇した。

『四時間・・・半、くらいです』

『まずまずね・・・』

『学年集会の時、二年の十月から受験勉強を始めるようにと聞いたので、ちゃんとしてはいたんですけど・・・』

『そう・・・。それでコレってことは・・・勉強方法が合っていないとか、かしらね？』

私は、週二の割合で英語と数学を習い、その塾で毎日自習をして帰っている。

それなのに、成績は向上するどころか順位はどんどん下がっていた。

『・・・はい。自分で見てみて』

渡された結果を見て、思ったことは“ああ、やっぱり”だった。

判定は、“E”。

合格の可能性は、皆無に近い。

黙っている私を前に、大林先生は大きく一つ、溜息をついた。

『志望校、変えましょうか』

怖れていたその言葉に、体が強張る。

『・・・嫌です。変えたくありません』

『どうして、この大学がいいの？』

『私には、三歳年上の姉と、下に五人の弟妹がいるんです。ただでさえ塾に行かせてもらえて、大学にも行かせてくれるって言うんで

すよ。だから……だから県内の国公立でないと……」
そうよね、と私の家庭事情を知る大林先生は頷く。

『気持ちには凄くよく分かるけど、問題は成績。勉強の仕方変えて頑張ってみて、次の模試の結果でもう一度考えてみましょう。一応、県外も調べてみて?』

先生の言葉の端々から、やめるべきだという言葉が窺える。

そして他県の、もっとレベルの低いところを、と。

でも私は諦められない。

次の模試までに……少しは上げなければ。

「……って夢見たんだけど」

翌朝夢の内容を話すと、湊生が笑い出した。

《へー。大学受験の夢? おっまえ、高校受験すらしてねーのに気がはえーな》

「ダイガクジュケン? ……えっと、それが何かはわからないんですけど、少なくとも綾乃さんは体験していないですよね」

綾乃が話す中、レウインは知らない単語だらけで終始頭上に疑問符を浮かせていた。

タイムも聞いてはいたが、そこまで真剣にはなかったため疑問に思う点を見事に流して話がザックリ状態だ。

「うん。夢にしてはリアリティがあったし、誰かの記憶……みたいな」

「夢はその人の中に眠る潜在的な願望や記憶が関係しているって言いますが……違うようですね。本当に、何なんでしょう?」

そしてその日も、綾乃は同じような夢を見ることになる。

『これはちょっと……ヒドインじゃない?』

お母さんに渡そうかどうしようかと戸惑っていると、手に持っていた成績表が消えた。

仰け反るようにして見れば、そこには姉の姿が。

彼女の手には、消えた成績表がある。

『あ!お姉ちゃん、返してよおっ』

私の成績を見て、お姉ちゃんは絶句しているようだった。

いつも茶化してくる彼女だが、さすがにその気にすらなれないよ
うで。

『アンタ、第一志望は——大だったよね?絶望的な……』

『ムー。だったらお姉ちゃんが教えてよ!!』

『無理。私は専門だよ?頭悪いし。そもそも、ウチの家系は頭良く
ないの。その代わり楽才はあるけどね。アンタフルート得意でしょ。
私バイオリン上手いし』

『今は楽才よりも学才が欲しいの——!!』

半泣きで縋り付く私に、姉はらしくもなく真剣な顔をした。

『塾もダメ、自学自習もダメか……仕方ない』

『え……?お姉ちゃん……?』

『友達にカテキョー頼んでみる。どう?』

『いいの!?その人、頭いい?』

『拝みたくなくなるくらいいいよ。もうあれは神だって』

自信満々の姉に、私は少し頼りないと思いながらも任せてみるこ
とにした。

だが……。

そうして一週間後、家にやってきたその家庭教師は。

『中学生……?』

開いた玄関のドアから差し込んでくる光が逆光になっていて、そ
の顔は見えない。

だがよく知った有名私立の中等部の制服を着ている。

背は、低くも無く、高くも無いと言った感じの男子生徒。

『初めまして。僕は、さ……い……と』

その時、異変は起こった。

お蔭で、少年の名前は途絶えた。

ズドン、と突然全ての物に過剰なまでの圧力が掛かる。

思わず私は片膝を床に付けた。

次いで、震度の強くない地震が起こり、それに同調するかのように自分自身を含めて視界に映る全てのものにノイズが走る。

まるで、その存在が揺らぐかのように。

地震のように地面が揺れたが、明らかに地震ではなかった。

ノイズに加え、全てのものがクネクネと変な動きをしていたのだ。

『え……何!?!』

“見ないで……見ないで!!”

声は、女性のもの。

再度掛けられた声を境に、視界は完全に闇に包まれた。

不安になってじっとしていられなかった私は、暗闇の中を一步、

また一步と歩き出した。

『ここは……どこ?』

“ここは……今、私がいる場所”

声は、律儀に答えてくれた。

私は思い切って頼み込む。

『じゃ、いるんでしょ!?! 姿を見せて!!!』

“私は……貴女の目の前に”

ぼんやりかたどり始めたその姿に、私はごくりと唾を飲み込んだ。

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part 1（前書き）

『——ねえ……今、アナタはどこにいるの？』レウイン

砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王（通称”奴隸王”）によって治められている。

その娘であるサラ（サラネリア・ノーリネス）の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えていた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。

二年後。久々にサラは彼と再会することになったが……！！？

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part 1

「お初にお目にかかります、姫様。私は・・・」
使用人の息子だという彼は、跪いたまま、微笑んで自らの名を告げる。

父王は、娘と近しい年齢で、信頼のおける者の子供を探した。娘の、相手役兼ボディガードに、と。

自分達では、いつか娘を守ることが出来なくなる日が来る。それが、分かっていたから。

姫は・・・、「魔力持ち」だ。

そうして選ばれたのが、彼。

当時、姫は僅か三歳だった。

物心がついて間もないため、姫が覚えている三歳の時の出来事はこの時のことだけだ。

以来、毎日が楽しいことではいっぱいだった。

城のお庭で走り回って。疲れて、昼寝をして。

いつもみんなで。

お父様と、

お母様と、

お兄様と、それから。

いつも、私の傍には彼が居た。

私は彼に絶対的な信頼を寄せていた。

お願い、行かないで。

・・・・・・レウィン・・・・・・。

「こっちに来てから勉強してるけど・・・・不思議ね、ぜんぜん知らないことなのに、簡単に覚えられるし、もともと知っていたみたいな感覚すらするし」

彼女・鈴木砂羅は目の前のベッドで眠り続ける女の子に話し掛け、苦笑した。

砂羅の金髪碧眼は、イギリス人である祖父から隔世遺伝したもの。彼女はクウォーターで、漢字は実を言うと当て字であるが、その英語圏のっぽい名前の響きは祖父が決めた。

当の彼女は、裏世界に来て以来維持ししている半霊体状態のため、

室を何度も出入りする宮女達も彼女の存在には気付いていないようだった。

一方、眠る女の子の名は、サラ。

本名はサラネリアⅡノーリネス。

ここ、守護神中最年少の砂漠の国である金星国の守護神である。

「これも知識を私と共有してるからなんだよね？　もう一人の私・・・」

問いかけるも、返事は無い。

「・・・・・ねえ、起きてよ・・・・・」

女の子はもう半年も目覚めていないのだという。

飲食無しで耐えられるのは保ってあと二月だ。

魔力のおかげでそれだけ生きられるのだが、そのまま眠り続けると死に至る。

だから、砂羅は彼女を起こそうと頑張っているのだ。

声を掛けてみたり、歌ってみたり、頬を叩いてみたり。

けれど・・・・・もう、万策が尽きた。

そっとサラの頬を撫でる。

「ここまであなたを傷つけたモノって、いったい・・・・・」

城内で偶然聞いた当時のことを、砂羅は思い出してみた。

半年前・・・・・

「姫様！　サラ姫様！　どこにいらっしやるのですか！」

ある日の夜、サラは突如行方を眩ました。

その事態に気付いた執事がすぐさま国王夫妻に報告し、城の者達が総出で搜索が始まることとなった。

毎日探し、発見されたのはその十日後のこと。

巨大な砂漠の中の金星城があるオアシスの外れ、砂嵐が頻発する

というので人があまり寄り付かないという場所で砂に埋められるようにしてそこに横たわっていたのである。

何故そこにいたのかは、誰も分からなかった。

守護神というのは脅威の治癒力（自己回復力）を持つために、別に怪我だの病気だのといったことは心配する必要は基本的に無い。

それより危ないのは、心の傷……。

一度殻に籠もってしまえば、自らが死に至るまで深い昏睡状態に陥ってしまうのである。

勿論必ず死ぬ訳ではなく、途中で何らかの衝撃や言葉に反応し、目を覚ますこともあると言われているが、実例は今のところサラを除いて存在しない。

砂羅は、表世界から召喚された他の者たち同様宝玉に封じ込まれた筈だった。

だが、何の因果があつてか、彼女の意識は裏世界の自分であるサラの元へと導かれ。

気が付けば、眠りにつき目覚める気配の無い女の子の傍らに立っていたのだ。

以来、女の子と鎖が繋がっているかのようにな一定距離——金星国国内の城付近だけしか動けずにいる。

半霊体状態ながら物には触れることが可能なため、暇な時は読書をして、独力で自分が今どういう状況にあるのか突き止めた。

城の者達の会話を盗み聞きすれば、眠るもう一人の自分が太陽国の使者に必要とされていて、その使者はもう太陽国を出発したとのことだった。

太陽国を出て、水星国に達し。

そうなれば、来るのは時間の問題。

それまでに起こさないと。

だが、結局何やっても目を覚まそうとはしなかった。

ピシッ

太陽国の使者一行が水星城を立ったという知らせが来たその日。割れるような音がした途端、見えない壁が一部欠けたような感覚に陥った。

サラとの鎖に、綻びが生じた。

だが反動で、砂羅が助けを求めるために呼びかけていた太陽国の使者であるという少女との一部記憶の共有が起こってしまった。

それは・・・・・・・・・・一番、彼女が後悔し、消したいと心から願った瞬間。

“見ないで・・・・・・・・・・見ないで!!”

砂羅は取り乱し、半狂乱で泣き叫ぶと記憶の共有は収束した。

荒い息を深呼吸で落ち着かせ、そこに残された少女——篠原綾乃を見て、ホッとする。

彼女なら・・・・・・・・・・“サラ”を——もう一人の私を助けてくれるかもしれない。

お願い。

目覚めさせて。

“サラ”の、命が尽きる前に。

『アナタは・・・・・・・・誰?』

綾乃は呆然と問うた。

姿が明確になっていきながらも透けていて人間味の無い女性に。年齢からして、十代後半もしくは二十代前半。

“私は・・・・・・・・砂羅。鈴木、砂羅”

『お、表世界の人・・・・・・・・！？』

“そう。私は今、貴女とこうして夢を通して話しているけど、体の無い状態で裏世界の私の元にいます。金星国守護神・サラの元に”

『金星国守護神・・・・・・・・』

“お願い。早く来て。助けて。”

意味が分からず、『助ける？』と反復する綾乃に詳しく説明出来るほど時間は残っていないらしく、再び砂羅の姿は霞んでいき、声もお互いに届かなくなっていく。

最後に、砂羅の口が動いた。

音にはならなかった。

でも綾乃は口パクで何とか読み取ろうとして。

絶句した。

解釈が合っていれば。間違っていなければ・・・・・・・・おそらくそれが意味するのはこれ。

“死んでしまう前に”

その解釈は、一切間違っただけじゃなかった。

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part 1（後書き）

おそらく今日中にサラのキャライメージ画を私個人のサイトにアップします。

そこで元々は小説を書いていたんですけど。

全て消したのでクリアですが、登場済みのキャラのみ投稿していきます。

投稿完了した次の小説の後書きでアドレスを載せます。是非ご覧下さい。

” 見ました ” などの報告や感想等頂けたら嬉しいです♪

太陽系の王様画廊1

注意…スキャンによりぼやけた物がありますので、モノによって拡大してご覧下さい。

綾乃とレウインの旅前と旅中の服装イメージ。

>i32616—3960<

金星国守護神…サラ（サラネリアⅡノーリネス）&鈴木砂羅
サイズ変更にて特にぼやけております。

二度程イラストをクリックし、表示されたイラストを拡大して下さい。（とても鮮明に見られます）

>i32617—3960<

太陽大命神の正装。

>i32618—3960<

←オマケの第三世代。

本編には出てこなかったため、ここで紹介。
右から、

ティエラⅡサブザールⅡヴァーイエルド（テラ）

フドウルⅡトルエノⅡヴァーイエルド（フウ）

シューネルⅡフロイラインⅡヴァーイエルド（シュネー）

フラメルⅡフィステイⅡヴァーイエルド（フラム）です。

>i32619—3960<

彼等は四つ子で、生まれた順はシュネー、フラム、テラ、フウ。

これで一つ小説書こうかなーとか思いつつ。

因みに、そうなれば主人公はフウです。

活動報告に書いたのですが（もし見られていないなら是非ご覧下さい）、第三世代のメインキャラは五人。

その四人は彼等で、もう一人はヒロインのフォーネです。

本当は彼女も同時にアップ予定だったのですが、諸事情により出来なくなりました。

ロングのツインテールの少女という設定。

（※フウはよく私の友人に女の子だと勘違いされるのですが、れっきとした男の子です）

コメント、感想、リクエスト等ありましたらよろしくお願いします
！！

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part 2

(前書き)

『————ねえ・・・今、アナタはどこにいるの?』レウイン”

————』 砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王(通称”奴隷王”)によって治められている。 その娘であるサラ(サラネリアールノーリネス)の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えていた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。 二年後。 久々にサラは彼と再会することになったが・・・!!?

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part 2

「また見たんですか？例の……変な夢」

朝ではあるが、まだ日が昇ってないくらいの時間帯。

夢が途絶え次第そのまま飛び起きた綾乃は、もう寝られそうになく、近場の大きめな岩に腰を下ろして呆けていた。

そこに後ろから心配そうな声が掛けられ、綾乃は驚いて立ち上がる。

背後にいたその人も、急に立ち上がった綾乃に驚いたようだった。

「エスティ君！？どうしたの！？あ……もしかして起こしちゃった？」

「いえ。その前から起きてました。それで、綾乃さんずっと魘されていましたから……また夢見ていたのではないかと思います」

「見たけど……夢……じゃないんだと思う。ね、エスティ君……もしかして金星国の守護神、名前……サラだったり……する？」

自信無さ気に聞けば、レウインはあっさりとそれを肯定した。

「金星国の守護神はサラネリアルノーリネス様で、彼女の愛称は……確かに、“サラ”であると聞いたことがあります」

《ただの夢じゃなさそうだな……》

自然に会話に入ってきた湊生に、またまた綾乃は驚く。

「わっ！？お兄ちゃん！？」

「俺もいる」と、水星国守護神のティムも木陰から姿を現して主張

した。

綾乃が再度起こしてしまったか問うと、二人は不機嫌そうに頷いた。

「どうやら綾乃が飛び起きた時二人はレム睡眠状態であつたらしく目が覚めてしまったのだという。」

もう一度寝ようとしていたらまず綾乃が、次に綾乃を追ってレウインがどこかへ行った為、気になってついてきたのだった。

つまり、話は一部始終聞いているということだ。

綾乃が先程まで座っていた岩に座り、腕組みをしてふんぞり返っているティムは、綾乃の方を突然指差した。

「湊生の言う通り、アンタの見たつていう夢がただの夢じゃないのは間違いないな」

「うん……」

「でも、待って下さい！これも伝え聞いたことですけれど、姫は昏睡状態にある筈です。そんな彼女が夢に現れたというのですか！？」

《昏睡状態？どうすんだよ、協力して貰えないじゃねえかー》

言いながら、湊生は取り敢えずそこの岩に腰を下ろした三人の周りやその真上、時々目の前を泳ぎまくる。

ティムは何故か空中を泳ぐぬいぐるみに興味津々なようで目で追っており、一方レウインは気にも留めていない。

綾乃に至っては一番酷く、湊生がノーテンキそうな顔をして目の前に来る度に、うつとうしそうにハエの如く手で払った。

「夢に出て来たのは、本人じゃなくって……表世界のサラ姫。二十数歳くらいのお姉さんで、名前は鈴木砂羅っていうんだって」

「夢を通じて、こちらに干渉してきたみたいですね」
拳を口元に当て、レウインは考察を立てる。

メンバーの中で一番知能指数が高いと思われる彼に難しいことは任そうという考えの元、湊生は話題転換した。

《そーいや、表世界の昔の人は、“夢に出てくるのは相手が自分を想ってくれている証拠”だって考えたんだってよ》

「そうなんですか？ 何だかロマンチックですね」

「いや、そうでもねーと思うけどな」

「どうしてですか？」

「不毛だけど、私もその人と同意見」

良く思うレウインに対し、ティムも綾乃も異議を唱える。

まだまだ打ち解けるまで時間が掛かりそうな様子に、思わずレウインは苦笑した。

「不毛って……しかも、“その人” 扱いかよ……」

《あのな、レウイン。夢は本当はそうじゃねーだろ？ 昨日お前が言ってた通り、夢ってのはその人の中に眠る潜在的な願望や記憶が関係していると言われてる。そうだよな？》

「はい。学術的にはそうであると……」

《つまりだ。もし、誰かのことを想って想ってやまない奴がいたとする》

そのたとえを引き継ぎ、ティムが説明。

「けど、相手の夢にはソイツはいくら想われていても現れなかった。そして相手は思う…… “あの人は、本当に私を愛しているのか” と」

「ああ、なるほど。疑われてしまうからなのですね。そうは考えませんでした！」

「にしてもお兄ちゃんどうして知ってるの？ それ、高校の古文の内容じゃないの？」

《友達がさ、前に平安時代に関する本読んでたことがあってさ。教えて貰ったんだよ》

「へえー」

感心する綾乃の肩を、隣に座っているレウインがとんとんと叩いた。

何、と振り返れば、言いにくそうにしながら

「あの……話……ズレていませんか？」 と言ってきた。

綾乃の頭上でバタフライから平泳ぎ、背泳ぎにクロールという、

昔水泳教室に通っていた時にした個人メドレーを一通り行った湊生は、飽きたらしくレウインの頭に落ちてきた。

近頃、因みにそこは湊生の指定席となりつつある。

湊生曰く、皆とは違ってバンダナをしているレウインの頭の上は寝心地がいいとか。

とか言いつつも、頭上だけでなく腕にへばり付き、独力で飛ぶことをサボっていることが多くなってきた。

綾乃だと真っ先に拒絶されるから、そうはしないレウインの元にいるらしいが、結局のところ剥がされるのが常だ。

《んあ？っていうか、さっきまで何の話してたっけ？》

「忘れるの早っ！！こんな奴に裏世界任して大丈夫なんだろうかな不安になってきた………」

「右に同じです……。ティム様、湊生さんに水星国乗っ取り返すために冥王星国を倒す計画には、他の方法を採用した方が得策かもしれませんね」

「分かってくれるか………？」

「この件に関しては……。そうですね。湊生さんは太陽大命神に向かないかもしれないと常日頃から感じていますし………」

ティムは政権を奪い返し、肉親を片っ端から殺された復讐を企んでいる。

まだこの問題は解決に至っておらず、一旦保留という形を取っている。

向こうのバックに冥王星国がいるため、やはり長期戦になるのだ。その鍵になるのが綾乃であり、湊生である。

《好き勝手言ってくれるなお前達。ちょっとは口を慎め》

「お兄ちゃん、二人とも間違いは言っていないと思うけど。私も何気に、お兄ちゃんが、っていうのに不安だったというか」

《あゝやゝのゝ！！！！》

「ほ、ホントのことだもんー！！」

「だから、本題の方に戻りましょうって」と、やはり話は逸れる。

「だな」

言い出したのは自分にも関わらず、第三者のように呆れ顔で兄妹喧嘩を傍観するティムも頷いた。

それからティムの意見で、そろそろ戻ろうということで寢床兼国境までの移動手段としている乗り物の方へ向かいながら会話は続く。「綾乃さん、夢から……他に何か分かったことってあります？」

「それが……その鈴木砂羅さんは、私に助けを求めてきたの。助けて。助けて」って。おそらくは、サラ姫を指しての事なんだろうけど、“死んでしまう前に早く来て”とも言ってたの……」

「死ぬ！？あのサラがか！？」
一気に全員が青褪めた。

慣れ慣れしい感じのその呼び捨てに、レウインが尋ねる。

「ティム様は隣国の守護神仲間として交流あったんですよね」

「ああ……あつたはあつたが……関わりは薄かったな。どうしてかについては、レウイン、お前の方がよく知ってるんじゃないか？」

「水問題ですね？」と、レウインは即答。

それに対してあっさりと「当たり前」と肯定の言葉が返ってくる。

《水問題って何なんだ？それがどう関係してくんだよ？》

「水星国って聞けば、誰もが“水源の国”を連想します。ですが今、その水星国で確実に水の総量が減少しているのです」

その問題は国民の不安を煽らない為に特に水星国内では極秘事項とされている。

だが既に国書によって各国の国王には伝えられている事実で、厚い信頼の元レウインはサフィールから聞いていた。

「水の減少……」

水星国を通ってきた中で、小さな島の集合体みたいな国であるからずっと水は視界に入っていた。

けれど、減少しているだなんて気付かなかった。

しかもそれは、レウィンとタイムの口振りからして何十年、何百年も前からなのかもしれない。

・この水星国は、そして隣国金星国では、一体何が起きているの・
・・・・!??

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part 2 (後書き)

またイラストを近々載せます！

活動報告もちょうちよく更新しますので、是非ご覧下さい！

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part 3

(前書き)

『————ねえ・・・今、アナタはどこにいるの?」レウイン」

————』 砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王(通称”奴隷王”)によって治められている。 その娘であるサラ(サラネリアールノーリネス)の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えていた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。 二年後。 久々にサラは彼と再会することになったが・・・!!?

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part3

「おそらくは……それも、冥王星国によるものなのでしょう」

レウインの言葉に、綾乃もタイムも足を止めて頷いた。

「違いねえ」

「私も……そう思う」

金星国は砂漠の中心にあるオアシスの国である。

砂漠の国なので、オアシスに水が僅かながらあるといえどその水量は需要量と比べれば雀の涙に過ぎない。

水を求め、金星国は隣国の水星国に援助を要請した。

それから長い間、水に困らずにいたのだが、そこで水星国に水問題が勃発した。

水問題故に水星国から水を輸入出来なくなった金星国は、他の国から輸入せざるを得なくなる。

だがしかし、輸出来るほど淡水が有り余っている国はそう無い。比較的有る方の地球国は今は敵国の領土となり、汚染もされているために手に入らない。

そこで挙げられたのは“海王星国”だった。

海王星国は淡水ではない。

けれど海と共存していく為に鹹水を淡水に変えるという蒸溜技術を発達させ、簡単に大量に水を手に入れられるようになったと耳にした。

「その後、対価の問題で金星国と海王星国は何度も戦争を繰り返すのです」

「で、それでどうなったの！？金星国は海王星国から水貰うの諦めた？」

気になって気になって仕方ないらしく、落ち着きのない綾乃を見てレウインは微笑んだ。

「いいえ。実は、両国の次期国王が通じ合っておりまして、彼らが王位についたその時から戦争していたことが嘘のように素晴らしい友好関係を築いていくのです。今は確か、海王星国から無償で水が送られてきているそうですよ」

「良かった。じゃあ、今は戦争してないし、水にも困っていないんだね」

綾乃はほっとして胸を撫で下ろす。

まだ戦争中だったりしたら、国内に入りたくはない。

しかも、そんな状態で国のトップである守護神が旅に同行してくれる筈がなかった。

「はい。冥王星国は、きっと水が減少すれば二国が共倒れしてくれると考えたのでしょう。海王星国とは風土的なことから始まり、国民性においても相性が悪く、昔から小さい諍いは度々起こっていたようでしたので、まさかその両国がこのようなになるとは予想もしていなかったと思いますよ」

「そうだよね」

冥王星国が水を減少させようとしたのは、そういう訳で。

綾乃はなるほどと凄く納得した。

「ねえ、エスティ君」

「はい？何でしょう？」

「海王星も太陽国サイドで、守護神がいるんでしょ？どんな国なの？」

「そうですね。冥王星国から一番近いので、一番危険性が高い国です。昔は敵国に所属していたんだそうですよ」

海王星国の守護神の名はレトウイルⅡシェイレ。

愛称は“レイト”。

彼にはいろいろと噂があるが、基本的に表舞台に出てこない人で、国民でも彼の守護神継承の儀以外では目にした人はいないという。

「何でもその姿は美しく、姫君を思わせるらしい。知的でスポーツ万能、魔法においても敵う者のいない超天才児らしい。俺も儀式に出席したが、得体のしれない奴って印象だったな」

《姫君を思わせるって……ティム、海王星国守護神って男なんだろう？どんな顔だよ》

「近くで見た訳じゃねーからわかんねーよ」と、ティムはそっぽを向いた。

《使えねーなあ》

「仕方ないだろ!!」

第三者の綾乃とレウインは呆れてしまっている。

いい加減止めようと考えたレウインが叫ぶ。

「もう！お二人と……も……も……」

レウインが突如、その動きを止めた。

彼の頭の上に乗ったままの湊生はレウインの変化に逸早く気付く。

バンダナ越しにレウインの頭をぼんぼんと叩いてみた。

《おい、レウイン？》

「何？」と、綾乃も気付いて振り返った。

《レウインが……》

動かなくなってしまったレウインの前に、駆け寄ってきた綾乃が目の前で手を振ってみたが、レウインは反応しない。

目を見れば、虚ろになっている。

「エステイ君!? エステイ君どうしたの!？」

《レウイン！オイ、レウイン!!》

何度も呼べば、僅かにレウインの身体が震え、口を開いた。

「声が……え……何……僕？」

《声？何て聞こえてるんだよ！？まんま話せ！！》

レウインは、脳裏を横切る映像の中で自分が言っている言葉を訥々と話し出した。

「…………お初にお目にかかります、姫様。私の名は、レウインⅡエスティと申します…………これからお傍で仕え、姫様をお守りし申し上げたく思います…………」

「何を言ってるの！？エスティ君どうしちゃったの！！」

《分かんねえ…………姫って誰だよ！？》

次にレウインが口にした言葉に、皆目を見開く。

「サラ…………姫様」

綾乃の後ろで何か考え事をしながら立っていたティムが、突然大声を上げ、レウインを指差した。

「あー！！おっまえ、サラの側近の…………！！どっかで見たことあると思ったら…………！」

《ティムこういうことだよ！！》

「初めて会った時から何か引っ掛かってたんだよな。俺、前にもレウインと会ったことがあるんだ。四年前くらいか？金星国国王に挨拶しに行ったことがあるんだが…………」

ティムが言うには、その挨拶の帰り、城の庭園を駆け回る男の子と女の子の二人を見掛けたという。

追い掛けっことをしているのだろう彼らは、庭園内の木々や花壇を楽しそうにグルグルと回っていた。

一人は金星国の姫君・サラネリア。

彼女は既に預言はされていたものの、当時はまだ守護神として覚醒していなかった。

ティムは、その時いつ覚醒するんだろうななどと考えていた。

もう一人、彼女を追い掛けて、その肩に触れ「追いましたよ、姫様！！次は姫様が鬼ですね」と言って逃げ出す男の子は旅に出る前のレウインと同様に深くフードを被っていた。

少し離れていた上に、そのフードでティムの印象に残ったのはフ

ードただそれだけだった。

だがよくレウインを見れば、今はバンダナをしているがフードから覗いていた顔の下半分はそっくりで。

レウインが“サラ姫様”と口にしたことで、タイムは確信を持った。

「今の……一体……」

平生に戻ったらしいレウインは額に手を当て、考え込んでいる。

綾乃はまだ状況が理解出来ておらず、レウインに詰め寄った。

「ねえ、何があったの、エスティ君？」

「急に……記憶のような物が……。でも、僕は金星国守護神であるサラ姫に仕えたことなんて……。ない」

「欠損病の影響とかじゃないの？」

レウインはパシエンテ——不治の病を抱える者だ。

彼の病は欠損病。

どのような病かは前に聞いたが、簡単に言えば記憶の一部が欠ける病だという。

故に、レウインが仕えていなかったと書いても欠けて記憶にないという可能性があるのだ。

だがレウインは頭を横に振った。

「違います……。僕は、今までに一度も金星国に行ったことがないだけでなく、そもそも国外に出るのがこの旅が初めてで。更に、その映像の年齢の時は両親を亡くした直後で、欠けた時ではありません」

「でも間違いないんだって！！あの時見たのはレウイン、お前に間違いない！！」

《でも、それが欠けた記憶でなくて、金星に来たことも無かったんなら他人の空似なんじゃねえのか？》

「他人の空似……。まあ、否定は出来ない」

所詮、見たのは顔半分に過ぎない。

声も変わっているだろうし。

タイムは何か引っ掛かりながらもそう納得した。

「じゃあ……あの映像は何だったんでしょう……？」
もう一度、レウインは映像内の言葉を口にした。

違和感が無かった。

それが逆に、違和感だった。

言ったこととの無いはずのセリフに、違和感を感じなくて。
寧ろ、記憶には無いが言ったことがある気がした。

“お初にお目にかかります、姫様。私の名は、レウインⅡエステイと申します。これからお傍で仕え、姫様をお守りし申し上げたく思いますので、どうぞよろしくお願い致します……”

他人の空似はあったとしても、記憶まで共有される筈がない。

そこで言っている名は、自分のもので。

でも……。

レウインの記憶に、綻びが生じ始めていた……。

太陽系の王様画廊2

またまたイメージ画です。

まずは綾乃とレウインです。

＞i 3 3 4 1 8 — 3 9 6 0 <

次に金星国守護神、サラ。

もう一枚は表世界のサラである鈴木砂羅のイラストです。

2人はそっくりですが、髪長さとその髪型、年齢が違います。
基本的には、魂を同じくする者なのでそっくりさんですね。

＞i 3 3 4 2 0 — 3 9 6 0 <

＞i 3 3 4 2 3 — 3 9 6 0 <

旅中の1カット。

＞i 3 3 4 2 1 — 3 9 6 0 <

＞i 3 3 4 1 7 — 3 9 6 0 <

またまたオマケの第三世代。

フウことフドウル||トルエノ||ヴァーイエルドとヒロインのフォー

ネ。

> i 3 3 4 1 9 — 3 9 6 0 <

まだまだ描いてはいるのですが、キャラが本編に出てきていないので載せられません（泣）

因みにティムはキャラのイメージすら決まっていんですが。

湊生の人間バージョンは描いていないだけです。いつか描きます。第六章終わればそのキャラ画を出せるので、物凄い量のイラストが載ると思っています下さい。

あと、第二世代のキャラ画もそれ以上にあります。

それも、物語後半から掲載予定。（私的には早く掲載したい！！）

最後に！！この物語が終わる頃、第0世代（第一世代達の親世代）から第三世代までのメインキャラ総合家系図を載せる予定！！（もう描いていますので、確定事項。）

本編終了後も、おそらく画廊シリーズは増えていくと思いますので、よろしく願います！

（っていうか、本編長いから当分終わらない・・・でも、設定や書き直し等により7，8年物となっているのでラストまで書きますよ！！頑張ります！）

第三章『砂の掟』・第二話『少年の憂い・再会の祝詞』Part 1

(前書き)

『————ねえ・・・今、アナタはどこにいるの?』レウイン”

————』 砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王(通称”奴隷王”)によって治められている。 その娘であるサラ(サラネリアールノーリネス)の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えていた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。 二年後。 久々にサラは彼と再会することになったが・・・!!?

第三章『砂の掟』・第二話『少年の憂い・再会の祝詞』Part 1

「うわ……何か、躊躇しちゃう」

金星国と水星国の国境まで来たところで、全員固まって国境線の向こう側を見ていた。

《普通に躊躇するだろ、これ》

「ですね……」

「こんなもんだろ、って言いたいところだが、不運だな。嫌に荒れてる」

太陽国と水星国の国境は、赤っぽい土が一面に広がったその大地が、きつちりその境界線を境にして草原になっていた。

その草原が、実は島だったことを知ったのは翌日、活動を開始してからのこと。

水星国は淡水の巨大な湖の上にいくつもの島があり、橋がたくさん掛かっているという感じで。

二国の境は空間が切れて、また異なった空間と接合されているみたいだというのが綾乃の率直な感想だった。

水の溢れる水星国と砂漠の金星国の境界もまた然り。

綾乃達の目の前の国境線の向こうには。

砂嵐が待っていた……。

そこで用意されたのは、砂漠対策のマントやゴーグル。他にも、水分や食料。

水星国を出る際には、大量に物を買込んだ。

砂嵐が吹き荒れてはいるが、どうやら運が良いことに城にはその日中に着けるくらいの距離にあるという。

「さーて、行きますか……準備はいい？」

「はい！いつでも大丈夫です」

「おー」

《なあ、綾乃さんよー》

「何？」

乗りの悪い約一名に、綾乃は冷たい目線を送った。

《俺足が無いから一步踏み出すってどうすればいいんでしょう？》

「なんか、それ前も言っただけだった？」

相変わらず頭に湊生を乗っけているレウインも、大きく頷いた。

その途端、頭から湊生が滑り落ちる。

「言っていましたね。前の国境の時にも。“踏み出す足を持ってない奴はどうすればいいんでしょう？”とやって仰っていました」

《よく覚えてんな、お前ら》

「じゃ、その時と一緒に」と、綾乃は清々しい笑顔を向けた。

《以下略みたいな言い方・・・傷つくな・・・》

「はい、じゃあいつせいのーでっ」

綾乃の掛け声で、皆一步踏み出した。

「よくこちらまでいらして下さいました、太陽国の使者の皆様」

城のあるオアシスに入っただけ、待ち構えていた国王夫妻の歓迎を受けることになった一行は、その日の寢床を王宮内に用意してもらったことになった。

予想外の展開に激しく驚いたと同時に、日が暮れて暗い中で宿探しをしなくてよかったことを綾乃は喜んだ。

ただ一番気にかかるのは、金星国の姫君にして守護神であるサラネリアーノリーネス——サラのこと。

国王夫妻直々にお出迎えとは、明らかに異常なことだ。

太陽国という裏世界を総合統治する国の使者であるとは言え、流

石に有り得ない。

家来に行かせるならまだしも、だ。

何と言ってもこれは秘密裏の旅。

大げさにすれば、感じ取られてしまうのに。

そう考えて思い至るのが彼女、サラ。

眠り続けるサラを目覚めさせて貰えるかもしれないという期待故か。

そこで少し綾乃は圧力を感じていた。

「お久しぶりでございます、国王様、王妃様」

真っ先に面識のあるティムが一步前に出て、頭を下げた。

王妃が嬉しそうに手を叩く。

「貴方は水星国の……ティム殿。久しぶりですね」

金星国王妃、シャネッタⅡノーリネス。

彼女は商家の一人娘だったという。

シャネッタは本当に美しく、元々王族だったのではないかと思えた。

「最後にお会いしたのはサラの王位継承の儀か」

一方、金星国国王の名はジェインⅡノーリネス。

不可触賤民出身で、賢王であるために現在は慕われているが、王位についたばかりの頃は“奴隸王”という蔑んだ名で呼ばれていた。裏世界は特殊であるので、一般市民から突発的に国王や守護神が輩出される。

だがしかし、ジェインはその身分故に相当苦しんだ。

それを支えたのが、幼馴染みである現海王星王だったというのはよく知られた話である。

「はい。ご無沙汰しております。それで、こちらが……」

ティムが後ろに立つ綾乃を手で示し、王妃の美しさに見惚れてしまっていた綾乃は焦って自己紹介する。

「はっ……初めましてっ！篠原綾乃です！！」

「こちらこそ初めまして。可愛い御嬢さんね。ねえ、ジェイン？」

「ああ……お!? シャネッタ!! 後ろの!!」

一行の一番後ろ、脳裏を過った謎の記憶を気にしているレウインの姿を目に留めたジェインが声を上げた。

指差されたその先を見て、シャネッタも驚く。

「え? ……アラ!? レウイン!? 貴方、レウインよね? 今までどこに……!!」

「……?」

シャネッタ、ジェインだけでなく綾乃やティム、人形のふりをして自身に抱かれている湊生の視線までも受け、レウインは呆気に取られた。

そのメンバーの視線が集まれば、護衛の兵士やその他ギャラリーも注目するのは自然の流れで。

中には国王夫妻同様にレウインに見覚えのある人々もいるので、

“あつ”と声を漏らす者もいる。

「確かに、僕……いえ、私はレウインですが……」

「え……レウイン……?」

「私は、今日初めてお会いしたのですが……どこかでお会いしましたか?」

言い辛そうに、でも平素同様真剣な面持ちで言えば、シャネッタは何を思ったか謝罪し、引き下がった。

「あ……ごめんなさいね。人違いだったみたい……気にしないで貰えますか」

「は……はい」

でもその様子からして、人違いなんて思っていないのは明らかだった。

レウインも何か後味が悪そうにしていたが、取り敢えずその話題はそれで置いておくようだ。

こっそりレウインの腕の中から抜け出し、斜め掛けしている綾乃のバッグの上に移った湊生が綾乃に小声で話し掛ける。

《綾乃……やっぱりレウインは……》

「うん……」

綾乃は様子を覗うようにレウインを見た。

「ジェイン、レウインの様子がおかしかったわ……」

城に到着後、綾乃達が手配した部屋へ使用人達に連れられて行ったのを見届けた国王夫妻は、城内の廊下をゆっくり歩きながら話し始めた。

「記憶が……無いのだろうか？」

自分のことまで知らないと知って、ジェインは少し寂しそうな表情を浮かべる。

「ええ……多分そうね……でも、間違いないわ。あの子は……あの子はレウインよ」

「ああ。私もそう思う。」

それは絶対だ、と二人は確信する。

だって、ずっと一緒に暮らしてきたのだから。

と、そこへいる筈の無い人物の声がして、二人は僅かに飛び上がりそうになった。

「あの、国王様、王妃様」

「ティム殿!! いかがなされたか？」

「盗み聞きして申し訳ありません。今お話されていたことで、少しお話したいこと、伺いたいことがあります」

「いや……それは構わないが」

ティムは、国王夫妻と話そうと、部屋の場所だけ簡単に聞き、戻ってきたのだった。

「レウインのこと……お二人共も、やはりそう思われるのですね」

「どういうことだ？ 話せ」と、ジェインは怪訝な顔をして問うた。

「それが・・・・・・・・・・という訳なのです」

「おそらくレウインは欠損病などではない・・・・・・・・作られた記憶を入れられてしまっているのだろう」

一部始終、ティムは先日あった出来事を話した。

時々深く頷きながら聞いていた二人は、その驚く状況に唖った。

「何のために・・・・・・・・!!」

「これは予想だが、入れたのは冥王星王で、初めから旅をすることを知っていて・・・・・・・・レウインを旅に同行させるように仕向けた、とか・・・・・・・・」

「何を言っているの！？有り得ないわ。知っていたとして、どうしてレウインなの？あの子は一般庶民よ。利用価値が無いわ」

言い切るシャネツタに、ティムは小さく発言する。

「ある・・・・・・・・・・と思いますけど」

「何だ！？言え！」

「サラです。今昏睡状態だと伺いました。そうなった原因の可能性はありませんか？」

「確かに・・・・・・・・サラが倒れていたのが発見されたのは、同時期だったわ」

可能性は極めて高い・・・・・・・・三人はそう結論付けた。

加えて、ティムには気になることがあった。

「ところで、レウインは・・・・・・・・どういう子なんですか？」

そう、ティムにとって同行者達の中で最も得体の知れない人物はレウインだった。

綾乃は表世界から召喚された、太陽大命神である湊生と同じ魂を共有する者。

湊生がどうして霊体で裏世界に現れたのは未だわからない点だが、どうして（少し微妙なデザインの）魚のぬいぐるみに入っているのかは旅路で本人から聞いた。

太陽国でパシエンテとして太陽王の支援を受けていたレウインは、先日の出来事が無ければそれで“こんな人物だ”と納得していただ

ろう。

でも、それ以来彼に対しては気になる点が次々に湧き上がってきたのだ。

昔サラと一緒にいたのが今一緒に旅をしているレウインならば、彼がどういう流れで王宮仕えをすることになったのか、何者なのか、が非常に気になってくる。

「貴方が先程言っていたように、レウインはサラの側近でした。今は御病気で亡くなられ、いらっしやいませんけど、かつてこの城で働いていた女官の息子です。勤め始める以前にその女官は夫を戦争で亡くし、ちょうどサラの遊び相手を探していましたのでレウインに城に上がって貰いました。その時彼は五歳。以来、半年前までずっと仕えてくれました……」

「時間軸が合わないですね……もっと前から、レウインは太陽国にいたという話でした」

そう、タイムの元へパシエンテと言われていたレウインを太陽王が気に入って息子のように気に掛けているという報告があったのは、もっと前のこと。

ならば、同一人物では……とも思うけれど。

違う人として考えても、また繋がらない。

「レウインはあのレウインだ、それは絶対だ」

「そうね……それに、サラが目覚めるには、あの子が鍵になっているかもしれないわね……」

「記憶は……どうなるのでしょうか」

ジェインは、頭を振った。

「わからない。だが、もし冥王星が絡んだことならば、そう簡単には戻らないだろうな。もしくは、戻り始めていても、まだ時間が掛かるといったところだろう」

「綻びが生じ、ダムが決壊するように記憶が定まれば一番いいのだけれど……」

「目覚めたとして、それはサラにとっては酷以外の何物でもありません」

せんね……。このことは、本人にも……。そして、綾乃にもまだ誰にも言わずにおきます」

言って、ティムは用意された部屋へ足を向けた。

第三章『砂の掟』・第二話『少年の憂い・再会の祝詞』Part 2（前書き）

『————ねえ・・・今、アナタはどこにいるの？』レウイン”

————』 砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王（通

称”奴隷王”）によって治められている。 その娘であるサラ（

サラネリアールノーリネス）の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えて

いた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。 半年後。

サラは彼と再会することになったが・・・！！？

第三章『砂の掟』・第二話『少年の憂い・再会の祝詞』Part 2

「立派な部屋ですねえ……」

室に入ったレウインは、思わずその部屋の素晴らしさにそう呟いた。

頻繁に太陽城に出入りしていた彼だが、やはり国が違えば身の回りや自身における全てと異なってくる為、金星城は太陽城と同じ“城”ではあるが全然似ていないので新鮮極まりない。

ティムの家である水星城もそれはそれで違ってはいたが。

太陽城と比較的似ていたような気もする。

《広いなー。客ってポジションは本当にオイシイ……ふふふ》
やけに尾びれをヒラヒラさせる湊生を摘み、顔の前に持ってきたレウインは、やや眉間に皺を寄せて睨み付ける。

「何企んでいるんですか。綾乃さんが言っていましたよ、“お兄ちゃんがふふふって笑う時はろくでもないこと考えてる”って」

《アイツはくいらなないことばかりレウインに吹き込みやがって》
「で、何考えていたんですかー？」

《後で綾乃を一回葬り去ってやる》

凶星なため言い返すことが出来ない湊生は、そこにいない人物を思い浮かべ、悪口を吐いた。

だがしかし、それは視界に入っていないだけで……。
気付いたレウインは顔を強張らせた。

「湊生さん、湊生さん」

《何だよ？》

後ろ、とレウインが言いながら指差し、湊生はゆっくり振り向く。
「ほお。それは是非ともやってみて頂こうじゃありませんか」

《げっ。綾乃！！》

腕組みをした綾乃が、そこに仁王立ちしていた。

当の綾乃は、何故かにこりと笑って、レウインの方に目を向ける。
「そういえばエステイ君、バッグの中に何でもいいけど、これくらい
の大きさの袋ある？」

「ああ、ありますよ。これはいかがですか？」

綾乃の意図がイマイチ掴めていないレウインは、ナチュラルに対応。
取り出したものに満足したらしい綾乃は、嬉しそうに受け取った。

「ちょうどいいサイズ！」

そのまま、綾乃は湊生を捕獲し、袋の中に投入した。

《おいちよっと！？何しやがんだよ！？》

「あ、綾乃さんっ！？」

「少しはそこで頭を冷やしなさい」

その後、入れられたことを忘れた綾乃によって、翌日の昼までそこから出して貰えないという事態に陥ることになる湊生は、出た時
酸素と水分不足により干乾びていたという。

“レウインがああのレウインであることには間違いない”

ティムは国王夫妻と共に出したその結論を、声に出さずに呟いた。
思い出すのは、二人の少年。

一人は嘗て、遠くから眺めた金星城の女官の息子。

もう一人は太陽城でパシエンテとして国王サフィールに大切にされていて、水星城で初めて目にし、ここまで旅を共にした博識の少年。

太陽大命神のオマケのつもりだった彼が、自分に恐ろしい説教を食らわしてきたことはまだ記憶に新しい。

その時は生意気だと思いつつ軽くビビッてしまったティムだが、近頃は意外とレウィンと仲良くなれる気がしてきていた。

今まで守護神だからということ、ティムは周囲から持て囃されて育った。

お得意の悪さですら、怒られることも無く。

なのに、誰にも叱られたことの無い自分が、一般庶民でしかもパシエンテに叱られたのだ。

それは酷く衝撃的なことだった。

腹が立ったというよりも——そう、ただただ驚いて呆気に取られた感じだ。

けど考えてみれば、そこらの自分を褒め称える貴族は裏で何を言っているか分からない。

打って変わって、言いたいことは何でも口に出す彼と一緒にいるのは、楽だと感じ始めて。

そう思うと、彼に対する評価が変わってきた。

「いいヤツ、だよなレウィンは」

そんな彼が持つ、謎。

金星城に仕えていたレウィンが行方不明になったのは半年前。

でもそれより前からパシエンテのレウィンは太陽国にいた。

その間——何が。

「半年前……どうして蒸発したんだ、レウィンは……」

「その話、詳しく聞かせて貰おうか」

「……!？」

少し先の廊下の角から現れたのは、金星国王位第一継承者——次期国王にして、金星国守護神・サラネリアの実兄、フェリシエン

ト||ノーリネス（略名はフェン）。

ウェーブのかかった金髪に、青い瞳。

気の強そうな、つりあがった目と口元。

彼等、フェンとティムは同じ年である。

やはり関わりはそう無いのだが、国の顔同士、いくらか話したことがある。

「フェン……もしかして、さっき——」

「ああ。聞いていた。だから隠す必要はない。お前の知っていることを、詳しく話せ」

「でもですね……」

「何？」

綾乃が開けた窓からふわっと風が入ってきて、裏世界に來たばかりの頃よりもほんの少し伸びた綾乃の髪を揺らした。

僅かな水で生き永らえている金星国の木々の、葉が擦れ合い、音を立てる。

「僕——ここ、よく知っている気がするんです……」

窓際の壁にもたれて立つ綾乃は、黙ったままレウインを見た。

先程袋詰めされた湊生は、今はベッドの上に転がされている。

「それは……この城にいたことがあるから、なんでしょっかね……?」

「エステイ君……」

レウインは俯いていたが、不意に顔を上げて苦笑した。

それが、綾乃には辛そうに見える。

「いい加減、僕も気付いてはいるんです。今の記憶の方が、不自然なこと」

「不自然って？」

「はつきりこう、とは言えません。けれど……綻びのようなものを、何かが一生懸命に埋めようとしている感じと言いますか……とにかく、筋が通っていないんです。……あは、あれ以来この話題ばかりですね。すみません」

言いながら、レウインは湊生の入った袋のあるベッドの上に腰かけた。

綾乃も、少し離れたところにある椅子に座る。

「エスティ君……。あのね。それは気にしなくてもいいし、私も気になるから凄く知りたい。……。でも、知るの……。怖くないの？」

「怖いです。凄く、怖いです。自分が自分でなくなってしまうから。僕が、太陽国で過ごした日々が、全て仮初めのものだったなんて思いたくはないです。どこからどこまでが本当の記憶で。どこからどこまでが、そうでないのか。もういつそ、わからないままでもいいんじゃないかって思えてきます」

でももし、と言い置いて、レウインは続けた。

「前の僕を知っている人に会って。“誰ですか”って……。それは、あまりにも酷ではないですか？……。この国の国王様にも、王妃様にも。申し訳なくて。記憶の無い状態で、確信も無く、今も仮定の話なのに、知っているフリは出来ませんから、ああ言う他無かったと思っはいますけれど……」

「……。うん。嘘言うと後で大変なことになるからね。仕方ないよ」

「実は、記憶の断片らしき映像、頻りに脳内で流れているんです。同じところが、何度も、何度も。その度、何かに急かされます。早く思い出せって」

入ってくる風が、気のせい少し強まった気がした。

第三章『砂の掟』・第二話『少年の憂い・再会の祝詞』Part3（前書き）

『————ねえ・・・今、アナタはどこにいるの？』レウイン”

————』 砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王（通称”奴隷王”）によって治められている。 その娘であるサラ（サラネリアールノーリネス）の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えていた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。 二年後。 久々にサラは彼と再会することになったが・・・！！？

第三章『砂の掟』・第二話『少年の憂い・再会の祝詞』Part3

金星城の、東塔の一室。

そこに眠る金の姫の指が、僅かに動きを見せた。

一方、シンメトリーを重視した金星城の普段人気のない反対側の塔——西塔に、ゆらりと影が螺旋階段を上って行っていた。

ぶつぶつと、その影は独り言を発する。

時々、苛立ちから興奮しているらしく語気が荒げられていた。

そうか……くそ、死んでなかったか

あの日、あの時、レウインは俺が殺した筈だ………それなのに……

どう考えても、このようなことをするのは冥王星王、あの人を覗いて有り得ない。

レウインが生きていると知って………平生を保つのがやつただ………どうする、手に掛けるか、一旦は様子を見ておくか。

だがまず、聞いておかねばならない。

言って取り出したのは、一枚の手鏡。

影が、“冥王星王、冥王星王”と名を呼べば、自身が映っていたその鏡は怪しく光り、そこに別の情景が映る。

一人の男がすぐ前に立っており、その後ろには何かの研究所のような装置が無数に設置され、画面 端には、凄く気になる青色の少し粘り気があってドロドロした液体の入った縦長のチューブがあった。

チューブは見える限りで三本。

床から天井までずっと繋がっているようだった。

チューブの中には、蹲った人の姿が見える。

だが、何分その場所が薄暗い上に、端っこに少し見える程度であるから、やっと人だと認識出来る程度だった。

どういうことだ、冥王星王!!

確かに、俺はレウインを殺した!!

なのに、何で奴が生きている!! 答えろ!

(ハハハ……。そいつには、まだ使い道があるんでな。そう易々と死んでもらっては困るのだ。)

(そもそも)

(これは、お前が独断で行ったことだぞ。ふざけるな、と言いたいのはこちらだ)

ぐっ、と歯噛みして影は押し黙った。

何度でも。

何度でも、俺は殺す

アイツが存在する限りは。

（まあ、待て。いいことを教えてやろう）

何だ、そのいいこととは？

（殺してしまえば、それで終わりだろう？それでは、お前としても楽しくなど筈だ。それよりも、嬲り、苦痛に泣き叫ぶ姿を見て楽しむ方がいいとは思わないか）

わかったから、言え。

何だ、そのいいこととは。

（言うが、行動を起こすのはまだ先にしろ）

いつならばいいんだよ

（そう——、二つ条件がある。一つ目は……、そして二つ目は……だ。理由については干渉を禁ずる。それくらいは待てるだろう？せっかちなお前でもな。なに、理由はお前に損を齎すことではないとだけ言っておこう）

分かった。待つ。

（ならば言う。それは――）

影の、息を飲む音が響いた。

「姫様の部屋は、こちらです」

翌朝。

国王夫妻の許可を得、案内を買って出た女官の後をついて行く綾乃、レウィン、ティム、そしてまたしてもぬいぐるみのふりをしてゐる湊生は、東塔の階段を上っていた。

城全体としては三階建てであるが、塔限定では六階にもなる。

階段の方も急な造りになっていて、段数も生半可なものではないからぬいぐるみとしていつも通り　レウィンの腕の中にいる湊生以外は息が上がり、膝が笑っていた。

当然男の人の方が体力がある為、疲れ度合いはいくらか少ないが、上るのに適していないとしか思えないその階段では流石に辛そうだった。

唯一ついい点があるとすれば、灼熱の太陽の照りつける中、その建物は異常なほどにひんやりとして心地いいことだ。

上るのに苦しんで汗をかいているので、結局のところ変わらない気がするが。

とにかく慣れているらしい女官の足取りは軽かった。

「おお・・・・・・やっと着いた・・・・・・」

「そうですね・・・・・・ちよつときつかったです」

「俺もだ・・・・・・」

全員完全にぐったりとしている。

その様子を苦笑しながら、女官がその部屋のドアを開いた。途端、綾乃は“何か”を感じた。

気配、と言えいいだろうか。

見えないが、部屋の端に置かれたピンクの天蓋付きベッドで眠っているであろうサラ以外には誰もいない。

いないが、いるのだ。

表世界のサラ、こと鈴木砂羅の姿が脳裏を過る。

ここに、今は見えないけれど・・・いるという。

（来たよ・・・目覚めさせてあげられるか分からないけれど・・・）

心の中で呟く。

「姫様。皆様がいらして下さいましたよ」

天蓋を捲り、中を覗けば。

金色の、ウェーブのかかった長い髪が可愛らしい姫が、横たわっていた。

綾乃は、驚いた。

湊生曰く、表世界と裏世界の容姿は似ているという。

二人の違いは、きっとその年齢による身長差と、髪の毛の長さではないだろうか。

鈴木砂羅は、セミロングよりももう少しだけ長い髪を、顔の左右に一房だけ残して頭の高い位置で一つに束ねている。

打って変わって、サラの髪は寝ているためか束ねられてはおらず、長さ的には腰くらいまでであるのではないだろうかというくらいだった。

「この人が・・・金星国の守護神の・・・サラ」

ひょっこりと女官に気付かれないように身を乗り出してサラを見ようとする湊生のため、レウインは見やすい位置に移動した。

「はい。そうでございます」

項垂れる女官は、サラが眠りについた後にサラの世話係に任じられたらしい。

今まで、様々な手段で起こそうとしたのだろう。

最後の希望が綾乃達であると目が訴えていた。

でも、起こせる絶対的確認などない。

可能性があるだけ。

綾乃は、その期待が少し負担に感じた。

それは、他の三人も同じで。

「姫様は、もう半年も目覚められておりません。王様からお伺いしましたが、貴女方は太陽国から使わされた太陽大神様の関係者御一行だとか。それでしたら魔力を持っていらっしゃるのでございましょう？お願い致します、姫様を……！！」

何度も何度も、頭を垂れる。

綾乃は女官の背中を支え、顔を上げさせた。

「私共も、サウ姫が目覚め、旅を共にして貰うことを目的としています。何があっても、この裏世界の命運の為、彼女自身の為……・方法を探します。何としても」

第三章『砂の掟』・第三話『禁じられた恋・歌姫の涙』Part 1（前書き）

『——ねえ……今、アナタはどこにいるの？』レウイン”

——』

砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王（通称”奴隸王”）によって治められている。

その娘であるサラ（サラネリアⅡノーリネス）の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えていた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。

二年後。久々にサラは彼と再会することになったが………！？

第三章『砂の掟』・第三話『禁じられた恋・歌姫の涙』Part 1

“やっぱり、来てくれたのね”

皆が寝静まった午後十一時。

どうすればサラが目覚めるかを模索していた綾乃は、声を聴いてベッドの傍に表世界のサラである鈴木砂羅が立っているのに気付いた。

潜っていた布団を剥いで、認識すると同時に飛び起きる。

「あー!! 鈴木……砂羅、さん」

“砂羅って呼んでくれない？ 守護神と魂を共有する、同じ表世界人でしょ、私達は”

「うん、そうだね、分かった。砂羅」

“じゃ、私は貴女を綾乃って呼ぶ。いい？”

こくり、と頷くと、砂羅は嬉しそうに微笑んだ。

「昼間。姫に会いに行った時……いたよね？」

砂羅は、驚いて目を見開き、しばし言葉を失った。

“————いたわ。でも、どうしてわかったの？”

「何となく。気配、かな」

“そう。取り敢えず、来てくれてありがとう”

「でも……」と、綾乃は少し言い辛そうに言い掛ける。

先を促そうと、砂羅は首を傾げた。

「どうすれば起きてくれるのか……分からないの。砂羅と会ってから、いろいろ考えて、思いついたのは昼間に試した。けど……起きなかった。それでも、ね。まだ可能性はあると思って

る。お兄ちゃんは太陽大命神だから、何か出来るかもしれないと思って……。明日、起きて朝御飯食べたらずぐに試すつもり……。だけど、それ以外に方法がない」

“……………”

その時砂羅も同じところにいたから、綾乃が一生懸命に試してくれていたのは見ていた。

それが、全て失敗に終わっていることも。

「私にも、何か力があればいいのになあ……………」

“綾乃……………”

「だってね、それだったら必要としてくれるでしょ？」

静まり返った室内に、何の物音か分からないが、カタンと小さな音が立った。

砂羅には、綾乃は辛いのを頑張って堪えようとしているが、堪えきれていないように見えた。

「よく、思うんだけど……………」

目元に、何かが溜まっていく。

「私って、今ここで本当に必要とされてるのかな……………」

それは溢れ、頬を一筋伝った。

綾乃は、ずっと不安だった。

自分は何の為に裏世界にやってきたんだろう、と。

目的は一応ハッキリしている。

守護神達と魂を共有する表世界の住人が敵国である冥王星国の手に落ちないようにすること。

守護神達を集め、冥王星国に対応出来るほどの戦力を太陽国側につけること。

太陽大命神である実兄・湊生が魔法を使う際……………自分がその媒体となつて敵と戦うこと。

媒体となること、即ち自分は兄の依代に過ぎないということだ……………

最初に関しては、綾乃以外の表世界人達も同様。

彼らは今、綾乃が持ち歩いているバッグの中の木箱の中の、さらに宝玉の中。

眠っている状態にあるらしい。

砂羅と会ってから確認してみたところ、一つの宝玉に亀裂が入っているのに気が付いた。

綾乃は、それが砂羅の入っている宝玉であると確信している。

それは一先ず置いておいて、その三つの役割の内、前二つは誰にだって出来ることだ。

三つ目の役割は、水星国に向かう道のりの中で判明した。

依代。

入れ物。

自分は、魔力の無い、足手纏い。

「…………でも、表世界に帰りたいと思っても、帰れない」

“方法が無いの？”

「全てが終わったらって、言われた。帰れない理由は…………それだけじゃないけど」

綾乃は不意に立ち上がって、窓のところまで歩いて行き、そっとカーテンを僅かに開いた。

それから差し込んできた月明かりを逆光にして振り向いた綾乃の頬は、赤く染まっていた。

「……………から」

“？”

「好きな人…………出来たから」

“なら、ここに意味があるじゃない？目的や役目なんて、オマケだと思えばいいと思う”

「ね、砂羅にはそういう人、いるの……………」

“……………いる”

でも今は、それが重荷になってるけれど。

そう、砂羅は言った。

「何か、あった？」

綾乃は、無意識に砂羅の手に触れる。
そうすると、前と同じ記憶の共有が起こった。

『砂羅さん、第二回校外模試の結果、返却されたそうですね。どうでした?』

前の記憶の共有で一番最後に出て来た有名私立の中等部に通う少年がそこに映し出されていた。

またアングルの、その顔を見ることは出来ない。

どうやら、あれから本当に家庭教師をすることになったようだ。

中学生が、高校生の勉強を見るって……どうなんだろう。

心配そうな少年の問いに、待ってましたと言わんばかりに笑みを浮かべ、砂羅は革製の通学鞆から一枚の紙を取り出して見せた。

全体をさっと見ただけで、少年の顔色が変わる。

『見て! 順位が学内で60位も上がったの!! たった三週間だったのに……』

『わあっ! おめでとうございます!!』

嬉しそうな少年の頭を、砂羅の姉がくしゃくしゃと撫でた。

『麗君、鼻高々じゃん』

『えへへ。そうですね』

ホントよくやった! と再度撫でられそうになり、少年は若干逃げた。

『先生もびっくりしてたの。判定、Cになってたし。今、C判定ならなんとかなるって』

『はい!! 僕が最後までスパルタで教えていきますよ!! 覚悟して下さいね?』

『わかりました、桜井先生』

模試で間違っていたところの確認から、その日の授業は始まった。

記憶が共有されていることに気付いているくせに、砂羅は、前のように見せまいとはしなかった。

一つの映像に気を取られていて気付かなかったが、いつの間にか綾乃の周りには、たくさんのシャボン玉が浮いている。

あちらこちらから、声が聞こえてきた。

『へえっ！？ C判定！？ あなた、前E判定じゃなかった！？』

見せられた成績表に、夕食を作っていた砂羅の母は手を止め、まじまじとその紙を眺めた。

『うん』

『桜井君のお蔭ねー。教えるの上手いの？』

明日は何か砂羅の好きなものを夕食にしようかな、などと超上機嫌で問い掛ける。

それに対し、砂羅はこれ以上に無いほど深く頷いた。

『うん上手。分かりやすいよ。ヘタに塾行くよりもよっぽどいい』

『ここを、ここに移項して括って……ホラ、何か見えてきませんか？』

砂羅の勉強机の横に椅子を持って来て、そこに座って真剣に指導する少年に、自然と砂羅も本気になる。

今までの計算式をザックリ見て、一点を指差した。

『あ……！ 因数分解して、前の式の、Xの三乗のところに代^{ラージュエックス}』

人？』

『はい、正解です。……いくらになりましたか？』

『24？』と、自身なさげに言えば、少年も拳を口元に当て、考え込んだ。

『……あれ？どこか計算ミスしているみたいですね……』

・あ、ここが』

『ホントだ。じゃ、そこを直して、計算し直して……これ
で合ってる？』

『合ってますよ』

『ふー。疲れちゃった』

砂羅は、完全集中による疲労から、伸びをして机に突っ伏した。

先日帰ってきた模試では、また二十位上がり。

判定も、ぎりぎりではあるがB判定が取れた。

とはいえ、少年との勉強でしているのは、主に基礎的なこと。

基礎をしっかりと重ねないと応用がぐらぐらしてきますよ、というのがどうやら勉強における少年の口癖らしく、基礎固めから始まった。

夏休みまでが最悪基礎に費やしてもいい時間だと学年集会で言われたが、夏休みの半ばくらいには基礎が完全になりそうだった。

課題が発展的なものばかりになってきていて、それにも四苦八苦する砂羅に、少年は懸命に教えた。

何度も繰り返し繰り返し、少し時間を置いてから覚えているかテストしてきたり。

それだけを毎日熟してきた。

『砂羅さん、お疲れ様です。少し休憩しましょうか。チョコタルト焼いてきたんですけど、食べます？』

『わー食べる！！食べたい！！』

『はい、どうぞ』

『……皆も、食べますか？』と、突如立ち上がってドアを開ければ、そこにはS砂羅の弟妹が五人勢揃いしていた。

因みに、姉は専門学校で帰りが遅くてそこにはいない。

『……皆？皆って……？あ！！』

『お姉ちゃんだけずるいーチヨコタルト、あたしも食べたい』

『僕も！！』

『私も！！』

チヨコタルトに集結する五人に、少年はにこにこしながら切り分けておいた分をそれぞれに与えた。

“私の家族はね……本当に、多くて……生活も結構大変だった。お姉ちゃんも私も、アルバイトして家にお金入れてたくらいだった”

綾乃の手が砂羅から離れ、その刹那シャボン玉もまた消え失せる。代わりに砂羅は訥々と自身の過去について話し始めた。

そのままガールズトークが開催され、二人は同じベッドに潜った。サラのことについては一先ず置いておこうということになった。

「その、桜井君って人が、砂羅の好きな人……？」

砂羅は、素直に黙って頷いた。

“聞いて。前は聞いて欲しくなかったけど……貴女なら。自分の中で抱え込んでおくのは辛くて限界だから……だから、聞いて？”

第三章『砂の掟』・第三話『禁じられた恋・歌姫の涙』Part 2（前書き）

『————ねえ・・・今、アナタはどこにいるの？』レウイン”

————』 砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王（通称”奴隷王”）によって治められている。 その娘であるサラ（サラネリアールノーリネス）の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えていた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。 二年後。 久々にサラは彼と再会することになったが・・・！！？

第三章『砂の掟』・第三話『禁じられた恋・歌姫の涙』Part 2

『お願い！ウチの妹の勉強見てあげて！！バイト代、高額にするからっ』

『いえ、高額になんてしないでいいです。ちょうど時間もありませんから』

『ありがと〜麗君っ』

『いえいえ。どういたしまして。いつ伺えばいいですか？』

『出来れば今日。今すぐ。』

『・・・・・・・・・・』

彼、桜井麗人は中高一貫校である私立皐嶺学園中等部に通っていた。

学年的には湊生と同じで、今は高等部の三年生。

中高共に生徒会長である麗人は、学内でも学外でもかなりモテていた。

そんな彼には多くが知らない家庭事情があった。

麗人の下には、少し年の違う弟と妹がいる。

その妹が生まれて四年、麗人が十歳の時両親が離婚。

実は、“桜井”というのは、子供たち全員を引き取った母親の旧姓である。

母はただのパートのため、砂羅の家とは違う意味で金欠だった。

麗人は母を気を使って自身は新聞配達や家事を進んでし、勉強もしっかりとして中学受験で特待生となりそれをキープし続けているため、学費免除、奨学金も貰っている。

そんな、状態だった。

砂羅の姉とは、意外にも病院で出会った。

打撲による検査入院をした彼と、間抜けにも階段から転げ落ちて骨折した砂羅の姉。

二人は、中庭で医者都合で検査の無い日の午後を暇潰しするという同じ目的の元、同じベンチに腰掛け、話して気が合い退院後も連絡を取り合っていた。

で、砂羅の姉は麗人が頭がいいと知っているから、直接会って頼み込んだという流れだった。

大学の受験勉強は、彼が付きっ切りで指導した。

“………っていう感じね………”

「先生と生徒の禁断の恋、って？」

“家庭教師なんだから、禁断なんかじゃないでしょ”

「あ、そっか。あんまりズケズケ聞くと失礼だとは思うけど、何の原因なの？」

“裏世界に来る数ヶ月前………”

流石に大学受験が終われば一段落して、家庭教師の必要はなくなる。

砂羅の進路は金星国守護神の裏世界のサラが“回復”であるだけあって、第一志望であった国立大の看護科に無事合格、大学三回生である今は日々実習に苦しんでいる。

麗人は家庭教師を辞め、他のアルバイトを探そうかと考えていた時、砂羅の母が麗人を引き留めた。

知人に話したところ、今年度受験生だという人達と、今年落ちて浪人するという人が是非とも勉強を教えて貰いたいと言ってきたの

で、麗人は砂羅から離れ、その人達の勉強を教えるように砂羅の母親に頼まれた。

あっさり麗人は承諾し、以来二人は顔を合わせる日がめっきり減ってしまった。

最後の会ったのは一年前。

人伝に聞いたところによると、人に教えるのが上手いということでもた違う家で家庭教師をしているという。

これも直接聞いた訳ではないが、彼は医大を目指しており、常にA判定をキープしているとか。

裏世界に召喚される一週間前、砂羅の母は彼の少年、麗人を見掛けた。

その隣には、見知らぬ少女。

服装から、同じ学校の子らしかった。

『彼女！？いいわねー』と野次馬精神からそう言った母。

『え、あの、えっと・・・っ。彼女は、同じ学校のクラスメイトで、今家庭教師をしているんです』

狼狽し、弁解した麗人だったが、その二人の様子は、明らかに恋人同士のもの。

特に、少女の方が彼に対して好意を示していた。

お似合い、だった。

茶目っ気たっぷり母は、帰宅後すぐに家族に報告し。

一目惚れと言えは何て言うか・・・容姿で好きになったイメージを持つかもしれないが、雰囲気から・・・自分に、誰よりも合っている気がして。

好きだと認識しつつ、関係が壊れたらとか、自分の方が何歳も年上だしとか思うと告白も出来ず。

結局、言わず終いでここまでできていた。

忘れられず、想いが募ってはいくけれど。

やはり、告白は・・・無理。

そんな時、聞かされた交際情報。

砂羅の頭は真っ白になった。
どうだったら良かったのだろう。
希望の無い、想いを抱えるくらいならば。

“ 出会わなければ良かった。そう思った ”

「 定かではないいでしょ！？ まだ本当に付き合ってるかなんてそれ
だけじゃ・・・！！ 」

“ 可能性は、皆無・・・よ。だって、お母さんが後でその相手
の子の親から聞いたから・・・ ”

だから。出会ったあの瞬間は、今でも消し去りたい。

「 わかるなあ・・・言いたいけど、言えないのは・・・
私も同じだから 」

綾乃は天井を見上げ、届かぬそこに手を届かそうとするかのよう
に両手を伸ばした。

“ でも、貴女は言わなきゃダメよ ”

「・・・」

“ 私みたいに、後悔しちゃ、元も子もないでしょ。・・・じ
ゃ、次は綾乃の番ね ”

え、と訳が分からず、綾乃は隣の砂羅を見た。

先程までの悔恨が深く刻み込まれた表情は一瞬にして失せ――
もしかしたら話題を変えて隠そうとしたのかもしれないが――今

は、興味津々にやにやしている。

話している間に、いつの間にか少し欠けた月が頂点に達し、今では既に傾いていた。

「私も……話すの？」

“ホラ、お姉さんが聞いてあげるから。旅仲間には、女の子いないでしょ。心置きなく話して”

「聞きたいだけなんでしょ、砂羅」

“あはは”

お姉さんぶっても、砂羅はそうは見えない。

身長は流石に綾乃よりも高いけれど、何だか子供っぽさがある。精神年齢は同じ年じゃないのかな、とか。

砂羅の母はお茶目だというが、少しは彼女にも受け継がれているようだ。

でも、言われてみればそう。

旅の仲間には女の子はいない。

目覚めればサラが仲間になるが、今はまだ。

別に、兄とレウィンとティムが嫌な訳ではないし、信頼していない訳でもないが、誰か女の子がいて欲しいと思っているのは事実。

考えてみればいい機会だ。

じゃあ、聞いてね、と言い置いて、綾乃は語り始めようとした。が、それを砂羅が不意に引き留めた。

“ねえ”

「何？」

“その相手、もしかして……レウィン君？”

綾乃の顔が、真っ赤に染まっていく。

凶星、というヤツだ。

“やっぱり。出会いは……こっちに來てから、しか有り得ないわよね”

「うん……。召喚される過程で記憶を一時的に失った私に親切にしてくれたの」

恥ずかしげに言う綾乃の様子は恋する乙女そのもので。

砂羅には、微笑ましくして仕方がなかった。

“どこが、好きなの？”

「それは、勿論優しいところ」と、綾乃は即答。

“レウイン君って、どうしてバンダナをあんなに深くしているか・
・・綾乃は知ってるの？あれ、非常に気になるじゃない”

「気になるけど・・・・・凄く気になるけど。触れちゃいけない
気がして」

だから自分から言ってくれるのを待つ。

因みに、前にバンダナで本当に前が見えているのかだけは聞いた
ことがあるが、実は綾乃達が思っているよりも遥かにバンダナは薄
手で、透けるからよく見えるのだという。

“そっか”

「うん。でもね・・・・・やっぱり告白は出来ないと思う」

“何故？”

「私も、砂羅も・・・・・いつかは、表世界に変えるんだもん
はっとした砂羅は、小さく頷いた。

綾乃が寝てしまってから、砂羅はそつとその部屋を出た。

興味本位で、その向かい側にあるレウインの部屋のドアを擦り抜
け、中に入る。

レウインはまだ起きていた。

窓辺の椅子に腰掛け、月見という時期ではないが月を眺めている。
起きていることにちょっと驚いたが、自分は綾乃ぐらいにしか見
えないということを思い出し、心を落ち着かせた。

“この子が、綾乃の好きな人ね”

見れば、ベッドの真ん中に魚のぬいぐるみが転がっていた。

鼻提灯が気になって仕方がないが……それは見てないことにした。

砂羅は、もうサラの部屋まで戻ろうとして踵を返した。

が、ふと振り向くと、レウインがバンダナの結び目に手を掛けているところを見てしまった。

“……！！”

ひらりと外されたバンダナが、宙を舞う。

まるで壮大な空を思わせる水色の髪が、止める物を失ってキラキラと月光を受けて煌めきながら流れ落ちた。

その露わになった顔を見て、砂羅は息を飲んだ。

第三章『砂の掟』・第三話『禁じられた恋・歌姫の涙』Part3

「おはよう、エステイ君!!」

室を出て食堂に向かおうとした時、その前にレウインを見つけ、名を呼び背中をとんと叩いた。

そのまま、彼の服を掴む。

「わあっ!？」

レウインは仰け反り、振り返った。

『……ま。姫様。また国王様に叱られてしまったのですか？仕方ないですね』

「……!？」

砂羅の時と同じ。

その体に触れた時、声が聞こえた。

ボケてはいるが、映像も少し。

だが離せば、声も途切れて。

「どうしました？」

心配そうに覗き込んでくるレウインに綾乃は顔を赤らめ、何でも無い、と手を振った。

それで、綾乃は次のことに思い至った。

もしかして……触れることで、記憶の共有が出来る……？

朝食後、あの辛い螺旋階段を駆け上がり、サラの部屋に綾乃はやってきた。

遅れて、荒い息のレウインとティム。

それと、一人楽するぬいぐるみ。

「綾乃さ、ん．．．．ハア、ど、どうしたんですかー？」

昨日の女官から借りた鍵を使って部屋に入り、すぐさまサラに近寄って行ってその手に触れた。

案の定、声が聞こえてきた。

だが、今回は映像は無い。

おそらく、本人の意識が無いからだろう。

今までとの違いはそれだけだ。

『お初にお目にかかります、姫様。私の名は、レウインⅡエステイと申します。これからお傍で仕え、姫様をお守りし申し上げたく思います』

『ねえ、レウイン』

『はい、何でしょう？』

『私と．．．．遊んで？』

『．．．．はい。遊びましょう』

声は、まさに一緒に旅をするレウインそのもの。

やっぱり、記憶を共有出来る．．．．？

綾乃は一旦手を離し、再度触れた。

「サラ姫。聞こえる？私は篠原綾乃」

《お、おい。何やってんだー？》

湊生は泳いで綾乃の肩に乗った。

他二人、ティムとレウインは黙って成り行きを見守っている。

『．．．．綾乃？貴方は、一体誰なの．．．．？』

サラに呼び掛けられたりもししたら通じるんじゃないかと思って試してみたが、本当に通じたらしく返事が返ってきた。

肩の上の湊生も、その瞬間びくつと震えた。

どうやら、湊生にもその声は聞こえているらしい。

打って変わってレウインとティムには聞こえてはいないようだ。

《脳に……直接、響いてくる》

「お兄ちゃんにも聞こえた？」

《ああ……》

「どういうことですか？」

「私、他の人に触ることで記憶を垣間見たり、話すことが出来るみたい」

「……！！じゃあ……！！」と、レウインが期待に胸を膨らます。

「うん、さっきサラ姫と話せたよ。また何か言ってみるね？」

言って、軽く息を吸い込んで気合を入れた。

ヘタして、更に殻に籠らせては元も子もない。

言葉を、慎重に選んで、言わなければ。

「私は、太陽大命神と魂を共有する表世界人」

『表世界の人……？』

ならなぜここにいるの、と言いたげな口調。

サラの年齢は十二歳。

声から、年相応な感じがした。

「そうよ。貴女を迎えに来たの。一緒に、来て欲しいの」

『嫌』

「どうして!？」

サラが黙り込む。

「どうして?一緒に来てくれないの？」

綾乃の様子を訝しげに思って、レウインは綾乃に近寄り、ジェスチャーを繰り返す。

視界の端で、自分も聞きたいと訴えるレウインを見て、彼の手を少し躊躇しながら掴んだ。

そうすれば、レウインにも聞こえる筈。

もし、本当に二人が幼馴染みならば、絶対にレウインの言葉の方

が効果がある。

とか言うけど……私を介してでも、他の人の声って伝わるのかな？

などと綾乃は考えていた。

『嫌………。私は、私は……。行きたくない。目覚めたくない。このまま……死にたい』

「サラ姫……。」

『だから……お願い、放っておいて。私は、あの人の元へ行くの。でもきつと、行けないわ。私は罪人。彼と同じところには行けないと思う。それでも……！だから、死なせて。お願い』
と、綾乃が何て言えばいいのか言葉を探している間に、凜とした声が耳朶を打った。

少し、怒りが籠っているような、レウインの声。

「死んでは、駄目です。そんな簡単に言わないで下さい」

『……っ!？』

サラが息を飲む音。

「レウイン……。」

綾乃の口から洩れた言葉にも、サラは過剰反応する。

『今……何て……貴方は……!？』

「僕は、レウインⅡエステイです、姫様」

寝台に眠る、その身体が震え。

あまりにも突然な変化に、一同緊張して唾を飲み込んだ。
瞼が、ゆっくりと開いていって、綺麗な青い瞳が現れる。

「サラ姫……起きた……。」

綾乃が呆然と呟く。

サラはすぐに上半身を起こし、周囲を見回した。

まず綾乃を見、肩にいるぬいぐるみを見て。

その後ろに立つティムを。

最後に目に留めたレウインに、瞳孔が大きく開いた。

「姫……様……?」

「――――行く」

少し気まずそうに、サラは小さく呟くように言った。

よっしゃ、と綾乃の肩の上から頭に上って湊生は尾ビレを振る。
旅の仲間がこうして増えることとなり、嬉しい筈なのに。

レウインがいるから行くのだろうと思うと・・・。

綾乃は彼女と仲良くなりたいたいと思いながらも、何か蟠りを感じ、
複雑な思いを抱いていた。

太陽系の王様画廊3（前書き）

縮小につきボケています。

絵を二回クリックし、鮮明な状態のものをご覧下さい。

太陽系の王様画廊3

前書き、忘れず見て頂けましたかー？
ちゃんと見て下さいよー♪

それはさておき。

今日は10月31日。

つまりハロウィンということで、今回はハロウィン特集です！！

本邦初公開、第二世代メインキャラ三人組も描いています。

（キャラが本編に出るまで描かないとか言いつつ。でも、本編に関わるカットは出しません。）

本名はまだ言いませんが、略名は絵のところで発表します。

まずは、第一世代メインキャラ達。

>i33912—3960<

次に第二世代。

左の男の子がフェト、真ん中がアイシャ、右の女の子がシャルテ。
彼等がどんな関係にあるかはまだまだ秘密です。

>i33914—3960<

第三世代。単体のシュネーです。

> i 3 3 3 9 1 5 — 3 9 6 0 <

引き続き第三世代、フウとフォーネ。

> i 3 3 3 9 1 6 — 3 9 6 0 <

ここからミニマムシリーズです。

まずは第一世代、本編で見え隠れしている幼少時の金星国の姫君にして守護神・サラと、彼女の従者であるレウィン。

2人の件についてはまだ謎だらけとなっております。

設定は深く、しっかりしているのに書くのが下手ですみません。

是非、見捨てず最後までお付き合い下さい（ペコリ。）

何か終わりっぽい言い方ですが、まだ下に一枚あります。

> i 3 3 3 9 1 7 — 3 9 6 0 <

次に第三世代の四つ子の幼少時です。

> i 3 3 3 9 1 8 — 3 9 6 0 <

今回はこれだけ。

また近々投稿しますのでよろしくお願いします!!

第四章『氷の掟』・第一話『新緑の岬・崩れし均衡』Part 1

夕暮れのような橙色の光が差し込む太陽城の大広間。

無人のその部屋に、同じテンポで時刻む古い大時計の秒針の音が響き渡る。

それが不意に、動きを止めた。

何の因果があつてか——その刹那、何かの歯車が音無き音を立て、崩れ落ちた——。

「本当に……大丈夫なんですか？」

氷の浮かぶ冷えた水に布を浸け、限界まで絞ってから湊生の額に乗せた。

湊生の中身は生身ではないが——霊体で、それがぬいぐるみにずっと入っていたのだ、やはり負担が掛かっていたのだろう。

金星城のレウイン用の部屋で、湊生はセミダブルのベッドを占領する湊生の体温は異常に熱い。

《大丈夫じゃねえ……喉痛エ……鼻水も鬱陶しいし……
・》

「風邪……かなあ？」

「症状はそんな感じですねー」

口元に拳を当て、二人は辛そうにしている湊生を見た。
大量に汗が流れ、息も荒い。

「熱が高いのが……ちょっと。湊生さん、少なくとも今日は
ゆっくり休んで下さいね」

《おう。そうさせてもらう。悪いな》

「いえ」

カタリ、と小さな音が耳に届き、綾乃はドアの方を見た。

僅かに開いたドアの隙間から、覗く青い綺麗な瞳。

誰かは……すぐに、分かった。

まだ湊生と楽しげに話すレウインを残し、そろりと綾乃は室を出た。

開いたドアに驚いたらしく、サラは一步後ろに下がる。

「サラ姫？」

「え……と、その……」

「……………」

「な、なな……何でもないの！！ごめんなさい！！」

サラは、顔を赤くして背を向け、走り去っていった。

「何だったの……………」

「綾乃さん？」

呆然とサラの去った方を見て立ち尽くす綾乃に気付いたレウイン
が、室から出てきた。

サラが目覚めて、既に三日経つ。

彼女が同行の意を示して間もなく、ティムが国王夫妻を呼びに行
った。

戻ってきたティムの後ろには、国王夫妻だけでなく金星城の使用

人全員だと思われるほどの人数がくつついてきて、室内が人に溢れ返って――、綾乃達は早々と室を出ることになったのだ。

出る時一度立ち止まり、振り返ってその目に映ったのは、久しぶりの娘の元気な姿に号泣して抱き締めるシャネッタ王妃と、心配をかけたことを申し訳なく思っているのかされるがままになっているサラだった。

取り敢えず、それ以来お祭り騒ぎで。

やっと落ち着いたと思った頃、湊生が体調を崩した。

あと、サラの同行の件だが。

事前に報告がいつていた為、サラを起こしたお礼だと言わんばかりに思いの外あっさりとサラの同行を許可してくれた。

サラの両親は、起きたと知るなり旅の準備を女官に命じてくれていたようで。

綾乃は、ずっと複雑な思いを抱いている。

サラと一緒に旅をすることに。

あと二月の命と言われていた金星国守護神・サラ。

長きに亘るその眠りが絶たれ、彼女はその最悪の事態を逃れた。

危機を救ったのは……レウインだった。

昔からサラに仕えていたのは、おそらくレウインその人で。

またその眠りの原因になったのも――おそらく彼。

記憶は無いというが、彼らの関係は主従関係だけだったのか。

それとももっと親密な――！

綾乃はそこまで考えて、恐怖に頭を抱えた。

「それは、嫌……」

と、コンコンと戸を叩く音がして。

綾乃は「はい」とだけ答えた。

部屋の主の許可が出たにも関わらず、戸は恐る恐る、戸惑いがちに開かれた。

そこから、レウインの顔が覗く。

「綾乃さん？ 今いいですか？」

「うん。どうぞ。その椅子に座って」

言われた通り、綾乃の近くにある椅子にレウインは腰を下ろす。

「湊生さん、少し落ち着いたみたいです。早く治ればいいですねー」

「そう、ね……」

綾乃の様子を訝しげに思っ、レウインは覗き込むように綾乃の顔を見た。

「最近……、綾乃さん様子がおかしいですよね」

「そ……そうかな」

「はい。何かあったんですか？」

どこまでも真剣なレウインに、綾乃は目を背けた。

「な、なな何でもない、よ」

「吃ってますけど……まあ、言いたくないのでしたら、それはそれでいいです」

レウインの性格からして、無理矢理言わせることは無いだろうというのは分かってはいたが、綾乃には何だか突き放された感じがした。

こういう時、放っておいてくれと思いつつ、気に掛けて欲しいと思うのは我が儘だろう。

そうは思うけど。

気になって、俯いた顔を僅かに上げてレウインの顔を見れば、深いバンダナから覗く口元は笑みを乗せていた。

「いつか、言えるようになったら。言って下さい。相談にだって乗りますから」

「……ありがとう」

「ね、エスティ君」

「何ですか？」

「これで、二人目だね」

笑って言う、レウインは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに微笑んだ。

「正しく言えば、湊生さんを含め三人ですけどね。あとは二人、木

星国守護神と海王星国守護神ですが……」

「何？」

「海王星国には出来れば行きたくないですね」

「どうして？」

「土星国からは、冥王星国の直轄地だからだ」と、許可なく室の中に入ってきたティムは、綾乃とレウインに“話し声が聞こえてきた”と言った。

「あ、ティム様」

「次に行く地球国は、はっきり言って放置状態にある。だから、太陽国サイドの民の一種の旅行スポットとなっているくらい安全なんだ。打って変わって、火星国は軍事基地があってな。危険なんだよ」火星国がそのようであるのは、第一防衛ラインとしての役割があるからなのだという。

因みに、土星国は第二防衛ライン、天王星国は第三防衛ライン。故に、たとえ火星国を抜けることが出来たとしても、海王星国に行くのは相当難しいのである。

何故地球国が放置されているのかというと、これはあくまで推測の域だが、やはり地形的に合わないのが原因なのではないだろうか。地球国は、海が広く山も多く、凸凹している。

隠れやすくはあるが見渡し難く、戦争には適していないのだ。

「なら、本人に木星国まで出て来てくれるように言えないかなあ」

「無理でしょう。海王星城の使用人すら、王子の姿を見たのは海王星国守護神の継承の儀だけですから。何でも、死亡説とか替え玉説もあって、そもそも実在もしないのではないかとも言われているんです」

「うむ。俺もそう聞くな」

レトウイルⅡシェイレ、海王星国第一王子にして守護神。

仲間にするのは……どうやら難しいようだ。

「じゃあ、木星国のは？海王星のことは金星国との繋がりの話で聞いたけど」

「はい、ご説明します」

第四章『氷の掟』・第一話『新緑の岬・崩れし均衡』Part 2

木星国————。

その名の通り、木々の生い茂るとても豊かな国。

特にそれ以外に土地的な特徴は無いのだが、違う点において他国とは大きく違う点がある。

それは一先ず置いておいて、木星国の王家はトルドール家。

現守護神はステイリアールトルドール、略名はステア。

この国では、数十年前に大災害が起こったことがある。

救助と復興はある一家によって成された。

それが、トルドール家。

比較的金持ちの部類に入るトルドール家の活躍により、大災害で出る筈だった被害が格段に減った為、その栄誉を称え——“永世王家の証”を太陽国側評議会にて決定され、魔力持ちとして生まれたステアはその家に引き取られたのであった。

「という感じですネ」

「何かちよつと複雑？」

「まあ……はい。でも、家族関係は良好だそうです。おそらく、木星国守護神はあっさりと仲間に来るんじゃないですか、アイテム様？」

「あー大丈夫。ステアには俺からちよつと声掛けたらそれでオシマイ。アイツと俺は守護神同士年齢が近いから腐れ縁っていうのがあってなー。ま、王子仲間にここの国のフェンってヤツが同じ年にいるけど」

やっぱ守護神同士の絆の方が嫌程深いんだよな、とティムは嫌そうに言う。

その表情が何とも言えないもので、綾乃もレウィンも苦笑した。不意にレウィンがティムには見えないように綾乃に向けて手招きしてきて、そっと何かを耳打ちした。

“尻に敷かれているらしくて、殆ど僕状態なんですって”

綾乃はティムの方を見て、ぷ、と噴き出した。

「な、何だよ!？」

「へーえ。ステアさんに弱いんだあ。ちょちよつと声を掛けるんじゃないかって、土下座しまくって頼み込むのねー」

「……!!!!おい、レウィン!!しゃべったな!!」

「何のことでしょう?」

と、レウィンはそっぽを向いて誤魔化した。

綾乃は綾乃でにやにやしながらティムを見て。

水星国では本気で殺意を持っていた二人だったが、だんだんとティムを受け入れてきた………というかどうか?

「あははははははっヒー助けて!お腹がっお腹が痛いあはははははは」

「笑うなー!!」

「ツボったんですね。実は笑い上戸!？」

「お前も冷静に分析するなよ!!」

「あはははは」

「だからそれ以上笑うなー!!」

笑い続ける綾乃の頭を軽く殴り、両肩を掴んで前後にガタガタ揺らすも、笑いは止まることなく。

「と、止められなっあはははは」

堪えようとすればするほど、笑いは増して。

同時に腹痛も――増した。

笑い死にするっていうの、わかるかもしれない。

「はあ、やっとな落ち着いた………で、そういえば木星国の大災害って?」

「流星に詳しいことは知らないんですけど……地震とか洪水みたいなものじゃありません。確か、木々が枯れ、その大地が原因不明の荒廃を見せた……とか」

「冥王星国の動きが際立ってくるまで気付かなかったが……やっぱそれも、冥王星の陰謀なんだろうな」

「はい。僕も、そう思います」

まず、太陽国は王位を継げる後継ぎがない。

そもそも、ヴァーイエルド家は本来王家の任を果たしたためにその位を下りなければならない。

それは、守護神を輩出した家が王家となるからである。

もう守護神のいないヴァーイエルド家が王家で居続けるのは本来おかしいのだが、そこには例外がある。

現太陽国守護神であるのは裏世界の太陽国の住人の誰かではなく、表世界の既に死した少年であるということだ。

だからヴァーイエルド家が引き継ぐこととなったが、サフィール以外のヴァーイエルド家の人間は流行病で死んだ。

子供が生まれない、という問題もあったため、二、三人の死でそのような事態にまでなってしまったという。

次に、水星国。

水星国は水の減少が始まっており、旧王家が冥王星国の力を借りて実質的な権力を得ている。

今はまだティムの存在で全てが旧王家の手中にある訳では無いが、ティムが失脚した時点でおそらく冥王星国は旧王家までも切り捨て、水星国を我が物にするだろう。

おまけに、ティムの一家は旧王家に皆殺しにされているのでこちらも跡取りはいない。

そして金星国。

無事に解決はしたものの、守護神であるサラが眠り続けるという事態に陥った。

原因であるレウインに何らかの小細工をしたという説が高い。

で、木星国のその荒廃も、冥王星国の仕業かと。

「こうして考えてみると、至る所に潜んでるっていうか、手を伸ばしてるっていうか……安心してられないね……」

「まだ他にも企んでいるんだろうよ」

綾乃もレウインも、眉を顰めて深く頷いた。

「ねえ」

と、綾乃は俯いてティムに向けて言った。

「あん？何だよ」

「水星国で……貴方には、殺されるかもしれないっていう恐怖を味合わせられて、本当に嫌いだった……。でも今、こんな状態だから……。貴方を、頼りにしたい。和解……したい」

え、と急に切り出したその話の内容に、レウインもティムも驚いた。

ティムの表情は真剣なものへと変わり、レウインは少し不安げな顔で二人を交互に見遣る。

「俺が悪いのはわかってっから、お前次第だ」

「一応、貴方が……。国のことを思ってた行動だってことも分かってる。だから……。その、よろしくお願いします」

綾乃は立ち上がって、ティムの前まで歩いて行くと、そっと右手を差し出した。

拍子抜けな展開に、ティムは苦笑いを浮かべ、握手を交わす。

「お……。おう、こちらこそ」

「あの、ティムって呼び捨てにしている？」

「別にいいけど」

何だか照れくさそうな二人の後ろで、レウインはにっこりと微笑んでいた。

第四章『氷の掟』・第一話『新緑の岬・崩れし均衡』Part 3

「湊さんの熱、下がったみたいですね」

一日ぐっすり寝て、目を覚ました湊生の額に手を当てて体温を測る。

「気分はどうですか？」

《おう、良好良好。スッキリしてるよ》

「ならもう一安心です。ですが、ぶり返すこともあるので油断大敵ですよ」

《おー、分かってる分かってる。まだゆっくりさせてもらうから》

「はい。じゃ、綾乃さんとティム様にこの事伝えてきますね」

順番に看護していた訳だから、レウインの前に看ていた綾乃はレウイン以上に疲労していて、まだ眠っているかもしれない。

だが起きている可能性だってあるので、レウインは綾乃やティムに報告しに行こうとベッド脇の椅子から立ち上がろうと腰を浮かせた。

——と、急に立ち眩みがして、そのまま床に膝についてベッドに突っ伏す形になる。

ベッドに辛うじて支えられていた上半身が、力を失って頽れた。

《レウイン！！おい、レウイン！！》

ベッドから抜け出し、湊生はレウインに近付いた。

《くそっ……！こんな体じゃなけりゃ、支えられるのに……
・！》

湊生はレウインを置いて、助けを求めに綾乃とティムのそれぞれ

の部屋へ向かった――。

その日から――、代わる代わる、二人は体調を崩すようになる。

太陽系の王様画廊4&キャラプロフィール (前書き)

前書き 今回もボケているので二回イラストをクリックし、鮮明なものをご覧ください！

太陽系の王様画廊4&キャラプロフィール

>i34217—3960<

太陽国キャラをアニメル化。

因みに、番外編アニマル・パニックのイメージイラストでもあります。

番外編はまだ本編がそのシーンのある時間に達していない為、投稿はまだ先になります。

>i34219—3960<

>i34225—3960<

>i34220—3960<

>i34224—3960<

>i34223—3960<

>i34222—3960<

今回は、キャラ紹介（本編で述べられているところまで）

☆篠原綾乃（主人公）

中二の十四歳。血液型はA型、誕生日は10月24日。

家族構成は両親（母の名は明日香）と亡くなった兄、子犬のメイ。
兄・湊生とは三歳違い。

太陽大命神である湊生と魂を共有している。

ボケる兄に対して冷たくツツコミをかますこともあるが、兄妹関係は非常に良好。

現在レウインに好意を抱いており、サラをライバル視している。

裏世界に召喚された後、養父・太陽国国王サフィールより依頼を受け、守護神集めを始める。

一時期兄に乗り移られていたことがあり、その後も幾度となく交代としての存在価値に悩まされている。

また、触れることで相手の記憶を共有することが出来る（コントロールが出来ない為、凄く調子の良い時しか出来ない）。因みに会話も出来、共有中に綾乃の身体に触れれば他者も記憶を読み取れる。魚のぬいぐるみを兄の器にしようとするなど、センスは無いようである。

呼ばれ方…綾乃、綾乃さん、アヤ（幼少時、湊生から）

外見…黒髪、黒目。

イメージカラー…橙色

☆篠原湊生（アストレインⅡヴァーイエルド）

死んだ時十四歳、本来なら現在十七歳。血液型A型（篠原家は全員A型）、誕生日は6月17日。

綾乃の実兄で、魂を共有する者。

故人で、現在は霊体。

綾乃のセンスの無い魚のぬいぐるみの中に入っており、最近はなかなか気に入っているようである。（裏世界の魚は空を飛べる為、湊生も飛べる）

死後、綾乃が裏世界に来るまでの三年間を太陽城の地下室のチューブ内で眠りについていた。

綾乃に乗り移ることで、魔法が使える。

属性は光。

呼ばれ方…湊生、湊生さん、お兄ちゃん、アレン、太陽大命神殿
外見…黒髪、黒目

☆レウイン（レウインⅡエステイ）

十四歳。血液型O型（意外にも）、誕生日は2月10日。

家族構成は亡くなった両親だけ。

冥王星王によって記憶操作を受けた。

未亡人であった母が金星城で働くことになり、その際に二歳になったばかりのサラの相手役兼ボディガード的存在として仕えることに。

半年前行方不明になり、太陽国国王サフィールのもとでパシエンテ（不治の病に罹っている者のこと。レウインは欠損病だと言われていたが、実は違うことが分かった）として援助を受けていた。

彼の特徴である、深く被った旅に出る前のフードと旅中のバンダナの下顔は、表世界のサラである鈴木砂羅が目撃したが、どうだったのかは定かでない。

優しく、知識が豊富であり、皆の助けとなることもしばしば。

綾乃が裏世界に来たばかりの頃は、女宮クイルと共に勉強を教えていた。

また守り石のペンダントで、どれが魔力を持った石なのか見破る力がある。

呼ばれ方…エステイ君、レウイン、レン

外見…水色の髪。

イメージカラー…深緑

☆ティム（ティスラムⅡリコレット）

二十歳。血液型B型、誕生日は5月1日。

家族はいない（皆殺しにされた為）

水星国守護神。

旧王家・コルトヴァール家の支配を未だ受けている。

そのコルトヴァール家の背後には冥王星国があり、水星国内では水の減少が進んでいる。

綾乃を演技ではあるが一度殺そうとし、綾乃達とは微妙な関係であつたが、最近和解した。

属性は水。

外見…茶髪、茶目

呼ばれ方…ティム様、ティム

☆サラ（サラネリアⅡノーリネス）

十二歳。血液型A型、ジェインシャネッタエリシエント誕生日は12月28日。

家族構成は父、母、兄。

金星国守護神。

半年間眠り続けていた。

原因はレウインが行方不明になったことが関係あるらしいが、詳しいことは不明。

属性は癒し。

外見…金髪碧眼

呼ばれ方…サラ、サラ姫、姫様

イメージカラー…赤

★鈴木砂羅

二十一歳。血液型A型、誕生日は12月28日。

家族構成は両親、姉、弟妹五人。
表世界のサラ。

何らかの原因で、身体は綾乃の手元にある宝玉の中に、心をサラの元へ飛ばしていた。
綾乃に二か月の命となったサラを助けるように言ったのも彼女である。

失恋したが想い人がおり、その名は桜井麗人。

砂羅の大学受験時の家庭教師で、当時は中学生だった。今は十七歳である。

☆ステア（スティリアⅡトルドル）
不明。

木星国守護神。

トルドル家に引き取られた。
ティムを尻に敷いてるという。
属性は木。

☆レイト（レトウイルⅡシェイレ）
不明。

海王星城内の使用人すら会ったことが無いという。
替え玉説、死亡説も挙がっている。

ティム曰く、「何でもその姿は美しく、姫君を思わせるらしい。
知的でスポーツ万能、魔法においても敵う者のいない超天才児らしい。俺も儀式に出席したが、得体のしれない奴って印象だったな」
とのことらしい。

まだまだ明かせていない謎がたくさん有り過ぎる……早く本編を進めなければ！！

っていうか、個人サイトでクイルとソロンの本名を書いたのに、サ
イトの記事総消ししてしまったせいで忘れちゃった！！！！

何だったっけ・・・・・・あー消した私がバカだった！！

クイルさん！！ソロン神官！！教えて下さーい！！

あー気になる気になるー！！

第四章『氷の掟』・第二話『病魔の足音・刻み込む証』Part 1

「お兄ちゃんがうつしたんでしよう!!」

《違うって!! 症状全然違うじゃん!!》

詰め寄ってくる綾乃に圧倒されながらも、湊生は必死に弁解した。あの後レウインはティムによってベッドに寝かされ、看護を受けた。

けれど残念なことに、日程計画から流石に金星城を出発せねばならず、サラを引き攣れて翌日の内に旅に出ることになり。

レウインは今、ティムの背に負われている。

だが熱も無く、咳もなく。

異常は、一切見られない。

唯、意識が混濁しているのだ。

「コイツ結構軽いな。ご飯食べてんのかー?」

《ティム、お前レウインが普通量食べてんのか見てるだろ。少なくともーよ、ま、多くも無いけど》

ああ、そういうば、とティムも納得した。

旅中ずっと食欲旺盛なティムを除き、他のメンバーは同量の食べ物配られていたが、確かにレウインは残さず食べていた。

加えて、城に滞在している時と同じで。

食べても体型を維持してしまう体質なのかもしれない。

「あーあ、私なんて少し太った気がするよ……体重計が無いから分かんないけど、肉が付いた感が否めない」

《そういえば、顔が丸くなった?》

綾乃の顔の顔を浮遊して、にやにやしながら言う湊生を睨み付け、
乗りツツコミをかます。

「あーそう、やっぱりねって……何か人に言われると腹が立つわ」

《事実を述べているまでですな》

「本当のことでも言ってもいいことと悪いことがある」と、ティム。
《お、そりゃそうか》

「アンタ達……喧嘩売ってるの?……まったく、本当に
ロクな奴いないでしょ、ねーサラ姫」
「……………」

隣を黙々と歩くサラを見遣ると、その視線は見えないレウインに
向けられている。

どうして見えないかという、今一行が歩いているのが砂漠である
ことが答えだ。

砂漠対策用のマントを、ティムがレウインを背負った上から着て
いる状態になっていた。

やっぱりレウインが気になるんだ……………。

綾乃はさっきまでのテンションとは打って変わって、しょんぼりと
俯いてしまった。

ティムと湊生はというと、今も尚樂しそうに話している。

蚊帳の外にいるような気がして……………。

サラが突然振り向き、綾乃の肩をトントンと叩いた。

「綾乃さん」

「え?何?っていうか、さん付けしなくていいよ……旅の仲間
なんだし」

「じゃあ、私のことも呼び捨てして?」

「うん……………わかった……………。で、サラちゃん、何か用
?」

ちょっと言い難そうに口をもごもごさせ、意を決したように顔を上げる。

「…………綾乃も、レウインのことが好きなんでしょう？」
「……………!!」

綾乃は不意打ち的発言に絶句し、足を止めた。

サラのセリフを耳にした湊生とティムの二人も、話すのを止めて聞いているふりをしながら耳を澄ましている。

それが視界に入って気になって仕方がないが、取り敢えずレウインが目覚ましていないか綾乃は確認した——大丈夫、起きてはいないようだ。

「……………うん」

「負けませんから、私」

照れからの戸惑いがちな返事に、サラはそう言い張った。

「レウインの記憶はいつか戻る筈だって、私……………信じてるもの。だから、貴女には負けない。負けられないわ」

「……………ん。私も。私も負けない」

お互いにキツイ言いようっぽいが、お互い頑張ろう的なテンションで、そんな辛い雰囲気ではないようだ。

《良きライバルって感じなのかな、その二人は》

「そうっぽいな。」

《俺達もそういうのを求めるとか?》

「どうやんだよ、アホだな」

意図的にライバル関係を作ろうとする湊生をティムは一蹴する。

とか言いつつ、最近綾乃の様子がおかしいことは二人とも知っていたし、それがサラの登場にあることも分かってはいた。

心境、本当は相当複雑を極めている筈だ。

おそらく、色恋事に彼らは比較的敏感な方で、鈍感な奴といえばレウインが挙げられてしまうのだろう。

対鈍感な奴にどうすんのかな、などと思いつつ湊生は意気込む二人を遠巻きに見た。

直球じゃないとスルーされっぞ。

そう心の中で呟いた。

《ともかく……地球国は素通り決定だな。ま、火星国も非目的的地だし同じ感じになるだろうけど》

「ま、そんなもんだろ」

ふと湊生が綾乃を見ると、綾乃は肩を落とししよんぼりとしていた。

どうした、と問えば、他のメンバーの視線も綾乃に集まり。

そんな彼女は一つ大きな溜め息をついた。

「あーあ、金星国の市に行ってみたかったな……綺麗な刺繍が施された服とか小物とかあるって出る前に聞いたんだよ……」

《え？綾乃行ってねーの？俺ら行ったぞ。な、タイム》

「おう。レウインも一緒にな」

「いつ！？バタバタしてて行く暇無かったじゃない！！」

《あれは、そう……金星国のオアシスに到着した翌日のことだった……》

「私も行きたかったなあ……」

物語風に語り出す湊生を無視して、綾乃はまた溜め息をつく。

と、綾乃のマントが軽く引っ張られ、その方を振り返った。

「大丈夫です、だって海王星国まで行ったらUターンしてくるんでしょ？その時に一緒にショッピングしましょうよ！！私がオススメなお店教えてあげるわ」

「え、本当！？じゃあ、是非、その時に！！」

綾乃は異常なほどに食いついた。

……そこまで、行きたいのか。

今は一刻も早く金星国で時間を食った分の巻き返しを図らねばならない。

だから、金星国を発つ時に寄ることは出来ないけど、また帰ってきた時に。

綾乃とサラは、恋敵同士ながら、やはり女の子同士仲良さげだ。趣味も合うらしく、水星国でいつの間にか買っていたらしいペンダントを見せ、楽しそうに話している。

話は発展し、次にショッピング出来るであろう地、木星国の特産品や人気なアクセサリ等の小物についてで盛り上がった。

恋愛面ではライバルとは言え、今まで旅のメンバーは男だらけだった。

綾乃を除き、その中に初めて加わった少女。

気が合うのなら、何よりも嬉しい筈だ。

しかも、この旅には少なくともあと二人は合流することになる。

一人は少女、一人は少年。

やはり男性率の高さは否めないが、それでも三人になるのは嬉しいのではないだろうか。

「ホラ、そんなちんたら歩いてたら日が暮れるぞ。今日中に国境付近越えないと砂漠の中で野宿になるぞ！！わかったか」

《それ、ヤバくね？テント持って来てないよな？》

「ないよ。」

「だから急げー！！」

ズボズボと砂に足が埋まりながら、全員足を速めた。

第四章『氷の掟』・第二話『病魔の足音・刻み込む証』Part 2

綾乃達が裏世界に来て早三ヶ月。

太陽国、水星国、金星国ときて、とうとう木星国に到達した。

やはり……何というか、相変わらず国境線における変化は激しかった。

片方、金星国側は来る時よりは少し緩やかだが砂嵐が吹き荒れていて、もう片方は緑の大地だった。

曰く、地球国は“総合地形”なのだという。

火星国のマグマをその地下に置き、地表では木星国のような緑、海王星国のような海、金星国のような砂漠、水星国のような川や湖。ある意味、一番住みやすい環境である。

綾乃兄妹からしてみれば、母星そっくりのそこには一番安らぎを感じる。

だが同時に、同じようで違う為に逆に酷で、故郷を思い出させてしまう地でもある。

初めて入国した“敵国の地”。

それにしては、豊かであった。

「ここが本当に敵陣なのか非常に疑えてくるけど。残念なことに、観光スポット化してるのは事実か……」

遠くに、ちらほらとコテージっぽいものが見える。

人の姿も……いづらか。

「ま、問題ないんじゃないじゃね？」

「っていうか、タイム貴方何食べてんの？」

手に持っているのは、ピンク色の果物。

話しながら、それにかぶりついて美味しそうに食べているのである。

「アレ」

示されたその先には大きな気が何本も立っていて、実がたわわに実っている。

それを先程もぎ取ってきたらしい。

サラも湊生も、そして綾乃までその木の下まで駆けて行って、それぞれむしり取って戻ってきた。

その手持ちの数には、個性が出ている。

サラと綾乃は一個ずつ。

だが綾乃は、別にいくつか腕に抱えていた。

それは彼女の横を嬉しそうに飛ぶ湊生の分。

直径10センチの果実を、湊生は合計7個ゲット。

意地汚いというか、何というか。

戻ってみれば、今度はティムはバナナに似た黄色い果物を口に運んでいる。

どこかと問えば、真上の木を指差して。

綾乃達も貪欲にその実も取った。

地球国内の果実は全てタダ。

果物狩りみたいな感じだ。

海には魚もいるし、動物もいる。

食べ物の宝庫である。

どうしてもこの国を素通りしていくのが惜しくなってしまう一行だった。

綾乃達とはかくお金を払ってコテージを一つ借り、一室にずっとティムの背中に負ぶわれていたレウインを寝かせた。

顔色もよく、別に病的症状がある訳では無い。

でも、サラの眠りとは違った意識不明状態にあった。

守護神ならば魔力を消費することで生き永らえることが出来るが、

レウインは一般的な人間なため、脱水症状を抑える為にコテージ内のミキサーで果物を半液体状態にして飲ませた。

レウインは一先ず置いておいて、一行は食糧調達に回る。

ティムは肉担当。

湊生・綾乃・サラは、魚と果物担当に決定。

いや、そこで気になる点があるんだが。

「狩りって一人じゃ出来ないでしょ」

「いんや？って、お前ら知らなかったっけ。確かに俺は水属性の守護神だが、守護神には別に特殊能力があるんだよな」

「え！？何それ！？」

綾乃は初めて聞く情報に過剰反応。

一方、サラは守護神なので勿論知っていて、コクコクと頷く。

「俺は“工作”、サラは“守護”だ」

ティムが説明するところによると、“工作”はその名の通り魔力の籠った所謂魔道具を作る力、“守護”は簡単に言ってバリアだ。因みに湊生――、太陽大神アレン（アストレインⅡヴァーイエルド）は光属性魔法の使い手にして特殊能力は制御、時間を司る者である。

時間は、冥王星国守護神の空間と対比しているらしい。

「あー！！思い出した！！そういえば、特殊能力あるってクイルさん言ってた！！」

綾乃は思い出してすっきりしたと言った感じの表情。

「クイルってあの《大女》って有名な人か！？」

《え？そんな異名持ってるの？》

「ああ・・・体罰くるんだよ・・・俺の家庭教師してくれてたことがあるんだが・・・殴られるならまだいいと思うんだ。アイツ、巨体を利用して俺を潰すんだよ。死亡フラグ立っつての！」
ティムはその恐ろしさについて語り足りないと言わんばかりの形相をしながら、何か道具を作り始めた。

綾乃達魚・果物班は並んで出発し、釣り道具を持って歩き出した。

第四章『氷の掟』・第二話『病魔の足音・刻み込む証』Part 2（後書き）

活動報告更新しました。

?情報も含まれています是非ご覧下さい！

第四章『氷の掟』・第二話『病魔の足音・刻み込む証』Part3

「あ、釣れた」

「また!？」

綾乃はまた当たりがきたサラの手元を見た。

サラの釣竿にばかり魚が寄っているのではないのかと思うほど連続で釣れ、あっさり人数分確保出来た。

綾乃達はその後、果物を籠一杯に入れ、コテージに戻った。

そこには一足早く帰ってきたらしいティムが台所に立ち、肉片と格闘していた。

巨大なイノシシみたいな動物を捕まえてきたらしい。

「わっ!？何それ!!デカイ!？」

「ほほほ。どんなもんだい。デカイだろー俺の手に掛かったらこんなもの朝飯前さ」

「美味しいの、それ？」

「美味しい。期待して待ってろ」

誇らしげなティムを見て、これが王子か疑えてくる。

王子にしては自立し過ぎているだろう。

そうは思うが、それが自身にとって救いになることであるため敢えてコメントしないでおくことにした。

そうして出来上がったのは、一人当たりの取り分が相当大きいステーキ。

ご丁寧に、オレンジ色のソースが掛かっていた。

魚はソテーにし、テーブルの中央には切られた果物が置かれている。

「美味しそう……」

「はい……美味そうです」

綾乃もサラも感嘆し、手を付けたくても勿体無くて付けられないでいた。

「ほら早く食べろ」

「はい」

《ようし、食べるぞー》

ぺろりと食べてしまった4人は、お腹が膨れすぎて伸びてしまった。

「これだから痩せられないのよね……」

《あははは》

「う……あ、僕……寝てた……」

誰もいない一室で。

上半身だけ起き上がらせたレウィンは、額に手を当て考えるような格好で現状把握をしていた。

「何してたか記憶にないんだけど……僕は、何して……いた
た」

頭痛がして頭を抱え、もう一度寝転がった。

もう一眠りしたら、頭痛は治まっているに違いない。

そう考えて、再び眠りについた。

第四章『氷の掟』・第二話『病魔の足音・刻み込む証』Part3（後書き）

活動報告更新しました。

?情報も含まれています是非ご覧下さい！

第四章『氷の掟』・第三話『火を吹く銃口・真紅の薔薇』Part 1（前書き）

謎だった半年前。

サラとレウインに何があったのか。

どうしてサラは眠って死を望んでいたのか。

それが明らかになっていきます！

活動報告にはもっと裏情報があります！是非ご覧下さい。

第四章『氷の掟』・第三話『火を吹く銃口・真紅の薔薇』Part 1

とくん。

・・・とくん。

心音が、嫌に大きく耳を打つ。

お兄様とレウインの間には、私が知る限り、良好な関係が築かれていた時など存在していなかったように思う。

思い出しても涙が伝う・・・。

だって、だって・・・まさか、お兄様が、あ・・・あんなことをなさるなんて考えもしなかったんだもの・・・。

半年前・・・

「あれ？いつもはそろそろ朝食の支度が整ったって誰かが部屋にやってくる筈なのに・・・何かあったの・・・？」
お腹を空かせて室を出て。

辺りを見渡しても人気は一切無く。

両親の部屋に行けば、彼らはまだ深い眠りについていた。

使用人達も、誰一人起きて活動している者はいない、そう思った時、サラの兄であるフェンだけは何も無かったかのように自室から出て来た。

事態に混乱し、どうしていいか分からないサラは、あまりの不安感に苛まれ、殆ど衝動的に兄に抱き着く。

大丈夫、大丈夫と背を撫でてやるフェンの口元が怪しい笑みを浮かべた。

ふうっと、サラは自分の身体が自分の身体ではなくなっていくかのような感覚を覚える。

一応意識はある――それも、遠退いた気はするけれど。それよりも、思い通りに体が動かない方が問題だった。

遠退いた意識の中、そのくらしいのことは考えることは出来なかった。

不随意的に、足が一步前に出る。

微かに視界にぼやけて見えるのは、サラの身からいつの間にか離れ、手を差し伸べてくる兄。

それに体は勝手に応え、手に手を重ねた。

「お、お兄様………!？」

辛うじて口を動かし、言葉を紡ぐ。

白き金星城のその全てが、冷酷に映る……。

「サラ。共に行こう………お前にも、仕事がある」
何をしようとしているの……?

今、こんな状態の時に……。

フェンの後を体が勝手に動いてついて行って、着いた場所はオア

シスの果て。

オアシスと砂漠の境界であるのにも関わらず砂嵐が吹いてくることの無い、人通りのまずない場所。

ここで、一体……？

ふと、遠くに人が見えてきた。

その人は、どんどんとこちらに近付いてくる。

自分と兄以外にも起きている人がいるという喜びは、その人が誰であるかということが分かった途端に消えた。

“レウイン”

そういえば、レウインは起きているのか確認していなかったことを思い出す。

フェンの前に虚ろな瞳のサラは立ち、レウインはその3メートル手前のところまで来て立ち止まった。

「ひ、姫様！！如何にしてここに……！！」

サラの姿を目に映し、明らかに驚いた表情を見せたレウインは、次の瞬間苦虫を噛み潰したような顔をする。

答えようとしたサラの意識は、尚遠ざかっていく。

もう何も分からなくなった。

何かを叫ぶ彼——レウインの声は、実際の距離よりも遠くに聞こえた。

すぐ後ろに立っている兄の声さえ、風が木の葉を揺らす音に過ぎない。

「……………の手によって死ね、レウイン！！」

彼が頽れ、鮮血が飛び散る様を目にして、サラは初めて自らが何

をしたのかを悟る。

震える手からこぼれたのは、1丁の銃。

その銃口からは細い煙が立ち上る。

「い．．．．．嫌．．．．．いやあああああっ」

一気に意識が戻ってきて——そのあまりの事実にはサラは意識を手放した。

第四章『氷の掟』・第三話『火を吹く銃口・真紅の薔薇』Part 2

時は一時的に現在に戻る。

夕食後、寝るまでの時間は各自自由に過ごすことになった。

綾乃とサラは女子部屋に戻り、それぞれのベッドに寝転んでいるとドアがノックされ、湊生が顔を覗かせる。

「何、お兄ちゃんどうかしたの？」

《暇になった》

「ティムはどうしたのよ？」

《寝てる》

キッチンを出てまだ二十分も経ってないのに、もう！？

綾乃はティムのその偉大な睡眠力に小さく溜め息を漏らす。

湊生が宙を泳いで綾乃の隣に寝転ぶのを横目で見ながら、サラは自分のバッグを漁って一冊の本を取り出した。

「サラちゃん？その本は？」

明らかに荷物の重量に大きな影響を与えていそうなその本を指差して、上半身を起こした綾乃が問う。

湊生も興味津々に本を見る。

「昔……昔にね、レウインが読んでいた本なの。読んでみる？」

「え？いいの？」

「うん。はい、どうぞ」

サラは綾乃が非常に楽しそうに読むのを見て、かつてのレウインを重ねた。

そう、あれはレウインが行方不明になる少し前のこと……。

「それ、何の本を読んでいるの？」

サラの遊び相手であり、護衛もするレウインは、毎晩サラが眠るまで傍に付き添っていた。

その日も、金星城の書庫から借りてきた本の中から一冊持参してレウインは主の部屋を訪れた。

ベッドの傍らにある椅子でレウインの読んでいる本は、3センチもある分厚いもの。

サラには到底読む気にすらならない。

けれど、物語は好きであるからよくレウインから本の内容について聞いていた。

「あ、これですか？ “宝石物語”です。ご存じありませんか？」

レウインは3分の2くらいのところに葉を挟み、本を閉じた。

集中していたようなので中断させて申し訳ないと思ったが、今更で……何というか、後の祭り状態だった。

「ないわ。ね、いつものように読んだところまでお話して？」

「はい、喜んで。これはですね、古代のとある帝国の、一人の巫女の悲しい物語なんです」

「面白そう。それで？」

目を輝かせて飛び起きるサラに、レウインは苦笑した。

これは当分寝そうにない。

だがレウインにとっても自身が読んだ本について語るのは楽しいひと時である。

「昔々、アステマ帝国という国に強い力の巫女がおりました……

……」

レウインは訥々とその本の物語を語り出した。

内容はこうだ。

エルサント大陸にアステマ帝国は二年前まで栄えていた。

巫女の力を利用して他の国の技術力を遥かに凌駕し、とても恐れられていたものの、次期巫女候補である“サファイアの宝石を体の中に持つ少女”は力の制御が出来ずにいた。

制御には精神の安定が求められても、生まれてすぐに親から引き離され、更にはずっと幽閉されている子にはどうしようもないことであつたのだ。

「主人公の少年は、そんな少女のお目付け役兼話し相手となることになつたのです」

「私にとってのレウインみたいね」

「そうですか？ ですが姫様は、その少女みたいに孤独ではないじゃないですか」

いや別に、その点が似ている訳ではないの。

そう思ったが、そうねと言って流した。

物語は続くが。

少年が少女に仕え始めて間もないある日、巫女の力が暴走して、少年の記憶を全て吹き飛ばしてしまう。

その後少年は療養のために帝国を去り、少女は笑うことをしなくなった。

当時、帝国には大きな陰謀があり、逸早く察知した少女はストレスに苦しむ自らの力を酷使してまで阻止しようとしたが失敗。

誤操作を引き起こし、帝国の全てを粒子レベルまで分解してしまったのである。

「少女は！？少女はどうなつたの！？死んじゃつたの？」

「大丈夫ですよ、姫様。少女はですね、直前に小さな鍵の宝石に取り込まれてしまつていて、難を逃れるんです。逆にこれが、後々問題にはなってくるのですが」

「良かったあ……」

安堵し、嬉しそうに笑うサラに、結末を知るレウィンも微笑んだ。
「では続きを読みますね？」

事件後に訪れた少年によって発見され、少女は人間の姿に戻ったのもつかの間、逃げ回った末に力を悪用され、自分の罪を悔いながら『一度でも取り込まれた者のサダメ』として再び鍵の宝石に戻ってしまう。

「そして二人は……」

言い掛けて、サラを見てその先を言うのを止めた。

気付けば、サラは既に眠ってしまったのである。

「この先は、また今度お話しますね。おやすみなさい、姫様」
下がった掛布を首元まで掛け直した。

その時のレウィンの表情は、決して優しいものではなく、確かに慈愛には満ちてはいるがどこか申し訳なさそうな。

「この続きを……いつお話出来るのでしょうか。もしかしたら、もう……」

ベッド脇の明かりを消し、本を抱えてレウィンはそっと室を出て行った。

続き、読んでくれるって言ってくれたのは。

あれは……夢だったのか。

結局、続きは自分で読んだ。

間違いなく隣室で眠ったままの少年は、あのレウィンだが……
・ 記憶が無くて。

記憶を失っている間ならばいいが、もし目覚めて記憶を取り戻し、私が銃に向けたことを思い出してしまったなら……彼はきつと、自分の前から去ってしまうのだろう。

確かに自分は姫で、彼は使用人の息子で私の側近だった。

けれど、実際は実兄のフェンよりも本当の兄妹みたいな関係で。そんな身近な人が離れていく……。それが、怖い。

お願い、離れて行かないで。

私のことをどう思っているでもいい。

。。
どう思ってもいいから、だからお願い、傍にいて……………

第四章『氷の掟』・第三話『火を吹く銃口・真紅の薔薇』Part 3

《結構歩いたな・・・お前ら、足大丈夫か？》

コテージを出て、もう四日程経った。

地球国は横断するだけであったが、予想以上に時間が掛かってしまったのにはその他国とは一風変わった地形が原因で。

まあ仕方ないと言えば仕方ないのだが、こう野宿が続くのも如何なものかと思う。

女性陣が野宿にブーイングするのも分かるし、次の国の火星国なんてオール野宿の予定だ。

疲れが取れるかという点においても非常に気になるものがあるが、何といっても氣遣わしげなのはティムである。

どうやら四日前少し動いた気配があったレウインは、以来一度も目覚めていない。

徒歩での旅であるから、誰かが背負うことにはなるが、まず女性陣には無理があろう。

男性陣は当のレウインを除き、湊生とティムの二人がいるが、湊生は魚のぬいぐるみに入っている為にその役割は自然とティムに回ることになる。

———の割に、飄々としているから全然平気かと当初皆思っていた。

それが今日の朝になって、途中から痩せ我慢していたことを口にしたのだ。

流石にこれには皆呆れ返って、けれど時々心配そうに声を掛ける

ようになった。

「お兄ちゃんは一切歩いてないように見えるのは私だけ？」

《“飛ぶ”と書いて“歩く”と読めます》

「結局“飛ぶ”って書くんでしょ。要するに飛んでるんじゃない」

《そうとも言う・・・かな？》

飛ぶのには体力がどれ程消費されるのかやや気にもなるが、例えば魚のぬいぐるみに人の魂が入ったものとはいえ、鳥が空を飛んだり魚が水の中を泳いでいるのと同じ感じで飛べるのだそうだ。

最初は見慣れなかった魚の飛行も、こう当たり前に悠々と顔の前を泳がれたら次第に慣れていく。

綾乃はもう完全にそれに対して違和感を持っていない。

逆に表世界に帰ってから、「あー、表世界の魚って飛ばないんだっけ」と言うくらいになるかもしれない。

本当に慣れとは時に恐ろしい。

「やっぱり意識の無い人間は重いな」

「赤ちゃんの例でよくあるよね。眠ったら重く感じたってヤツ」

《だな》

と、不意に綾乃の服が引っ張られた。

「レウィン・・・・・・まだ、起きないのかな」

不安げなサラの顔。

でも実際のところ、彼女自身起きて欲しいけど起きて欲しくないという“ヤマアラシのジレンマ”状態にある。

綾乃はそうとも知らず、ただその不安を拭い去ろうと考えた。

そうすることで、自分の不安をも消し去ろうとして。

「大丈夫、お兄ちゃんが言ってたでしょ、一回起きたみたいだって」
《そうそう》

「なら自分で歩いてくれたらいいのによお」と、ティムが悪態をついた。

その様子にはサラは苦笑しつつも、それでもその瞳は憂いを抱えたままだ。

「でもレウインはただの人間なの。私みたいではないわ」

「つまり、サラ、お前みたく健康状態に一切異常をきたすことなしに眠り続けることは出来ないってこったろ？」

《だから液体状の果物食わせてんだろ。問題ねえじゃん》

ハア、と綾乃は溜め息をついた。

問題大有りだ。

人間、そんな単純な造りはしていない。

「栄養も十分に取れないし、筋力も低下するでしょ。どこが問題無しなのよ」

《・・・おう、スマン。》

「サラちゃん、取り敢えずまだ待ってみましょう。一度起きたんだからまた起きるかもしれないわ」

「うん」

サラが一時的な笑みを浮かべた。

止められていた歩みが再開され、一行は今日中に着くと思われる火星国に想いを馳せた。

第五章『火の掟』・第一話『宝玉の意味・湧き満ちる溶岩』Part 1（前書き

因みに、タイトルの”溶岩”のところは”マグマ”と読みます。

第五章『火の掟』・第一話『宝玉の意味・湧き満ちる溶岩』Part 1

《見てみるよー、綾乃》

「うん、これには毎度毎度驚いちゃうよね」

《入国時はいつもこうだけだな》

綾乃は確かに、と頷いた。

今日、一行は火星国領土内に入った。

今回も国境線のこちら側と向こう側でまた大きく違っていたのであるが、地球国側は緑溢れる大地と壮大な海、火星国側は大地が所々に裂けて、マグマが噴き出し、火山もたくさんあった。

「何か、体内の水が蒸発していくみたい」

サラが喉を押さえ、少し辛そうな顔をした。

「私も……って、わぁ!？」

《おい!!》

突如溶岩が吹き出し、触れそうになった綾乃を湊生が突き飛ばす。噴き出した溶岩は、そのままドロドロと大地の凹部に溜まっている。

「大丈夫か!？」

「うん、大丈夫だよタイム」

「それならいいけど」

《触れるギリギリだったのに、熱く感じなかったのは変だな》

言われてみれば、溶岩の温度は半端ではない。

だから一定以上近付けばその蒸気でも火傷をしてしまう筈なのに、綾乃も、綾乃を助けようとした湊生も熱いとは一切感じなかった。

「表世界では熱く感じるのかもしれないけど、こっちでは触れなけ

れば大丈夫なんだ」

「触れたら……どうなるの？」

恐る恐る綾乃が尋ねると、ティムは何も無かったかのように平然と答える。

「一瞬にして全身が溶ける、それだけだ」

《それだけってなあ、ティム……!!》

いや寧ろそれが一番重大な問題なんだろうと言わんばかりの呆れた表情。

「火星国に民が住んでいた頃には、幼児が興味本位で触れ、死んでしまう事件が多発したとか」

いやそもそもここで暮らすのが間違っているんじゃないかとまた湊生は内心突っ込んだ。

どう考えても火星国は生活するのに適していない。

水も無く、食料も無い。

ただ無駄に火山が目につく。

「私、溶岩なんて初めて見た……」

《右に同じ》

「あら、そうなんですか？」と、サラは不思議そう。

「私達が住んでいたのは、地球国みたいところで、ところどころにある火山が噴火しない限りは……地中奥深くにある溶岩なんてお目に掛かることは無いのよね」

「豊かな国なのね……表世界かあ、どんなところなの？」

「興味ある？サラちゃん」

サラは深く、些か大げさに頷いて見せた。

流石に火星国は足場に不安要素がある為歩く時はそれどころではないのだが、落ち着ける場所とか寝る前とかに話すと綾乃はサラと約束した。

非常に嬉しそうなサラに、話すなら何を話そうかと考えてしまう。表世界という自分の故郷に好感を持たれることは、我が身のことのように嬉しいものだ。

表世界の物語とか、学校でのこととか……話したいことは沢山ある。

それ程、表世界と裏世界の違いは顕著だ。

裏世界のように国境で空間同士が縫い合わされたみたいな季節や土地の急激な変化は無く、経度や緯度、その他大地の状態が異なることにより気候とかがだんだんと変わってくるのが表世界だ。

「綾乃は表世界から来たのでしょ？ 繋がっているのは繋がっているみたいけど……。私、いつか表世界に行ってみたいな」

「うん。そうしたら、一緒に遊園地で遊んだり、ショッピングしたりしたいね」

「遊園地……？」

おおっと、と綾乃は苦笑した。

また表世界用語を出してしまったみたいだ。

そういえば、裏世界に来てすぐ、レウィンやサフィール王とのお茶会で出されたお菓子の向かって、マドレーヌだとかクッキーだとか、マカロンだとか言って、彼らに疑問符を頭上に浮かべさせていたことを思い出した。

「んー、何て言うか、遊べるところ。とっても楽しいんだよ」

お菓子と違って、これは非常に説明が難しい。

遊園地の説明をしようにも、概念が欠片しかない。

だから、例えることが出来ないのだ。

「綾乃がそう言うんだったら、それは凄く楽しいのね」

「うん、楽しいよ」

「じゃあ、もし、万が一行けるなんてことがあったら連れて行ってね」

約束、と二人は小指を絡ませ合った。

第五章『火の掟』・第一話『宝玉の意味・湧き満ちる溶岩』Part 2

「・・・・・・・・っ」

突然ティムの背中に負ぶわれているレウインが身動きをした。

その身を支えるティムが逸早く気づき、「レウイン!？」と声を上げる。

聞こえた名前に、仲良く会話中だった綾乃とサラも、そして優雅に泳ぐ湊生もパツと振り向いた。

「レウイン!!」

「エスティ君!？」

《レウイン・・・・・・・・!!》

何度も名を呼ばれて完全に覚醒したレウインは、自分がティムにおんぶされていることを知って頬を急激に赤らめた。

「わっ!？す、すみませんティム様!! 僕・・・・・・・・!!」

「いい、気にするな。それより大丈夫か」

「はい、もうすっかり」

元氣そうで皆心底安心して、それから矢継ぎ早に質問が繰り返される。

「何があったの!？」

《どうした!？》

「えっと・・・・・・・・その。急に立ち眩みしてそのまま意識を失って気付いたら今でした・・・・・・・・」

自分でも訳が分からないと言って苦笑いする彼は、ゆっくりとティムの背から降ろされた。

支えを失った途端、レウインの身体がふらつく。

すぐさま綾乃が彼の背に手を回し、転倒を防いだ。

「エステイ君、足が……」

「はい……申し訳ありませんが、足に力が入りません……」

《ちよつと休むか。オイ、ティム。あの辺安全そうだぞ》

溶岩が噴き出す地帯から少し離れたところに、比較的安全そんなところがあった。

皆今まで休み無しに一日歩いてきたので、すぐさま座り込んでしまった。

「ひ、膝が笑ってる……」

「私も……こんな歩いたの初めて」

《足場も良くないしな、そりゃキツいだろ》

うんうんと腕——ではなく、胸鰭を組んだ湊生が頷く。

それに関して綾乃は気になる点があった。

空を飛んでる湊生には足場なんて関係ないんじゃない……

だが疲れ切っていて言う気も起らない。

寧ろ、無駄な体力の消費は控えさせていたきたい、ということ
で無視。

「火星国の入り口だからこそ問題はないが、木星国付近には陣が張られている。休めるのは今だけかもしれないから今のうちにゆつくりしておけ」

「うん、わかった」

「はい。そうします」

《ほい》

綾乃だけは、返事をしなかった。

自分のバッグの中を漁り、必死に何かを探している。

そうして取り出したのは、一つの木箱。

「綾乃？それはなあに？」

「これにはね、サラちゃんやティムの表世界のもう一人の自分が入っているの」

「もう一人の私……?」

「そう。お父様が信用に足る人物だと判断したなら、これを渡しなさいって」

木箱のふたを開けると、中には五つの玉が入っていた。

それぞれ色が異なっていて、綾乃はサフィール王から教えられた色の宝玉をそれぞれに渡した。

水色は水星国の色。これを水星国守護神であるティムに。

黄色は金星国の色。これを金星国守護神であるサラに。

緑色は木星国の色。それを木星国守護神であるステアに。

青色は海王星国の色。それを海王星国守護神であるレイトに。

最後の紫色は冥王星国の色。これは誰の手にも渡らぬよう、守り抜くように、と。

見せられた木箱の中の五つの玉。

何て言うか……どれも寒色なのが何気に悲しい。

黄色は一応暖色に含まれるけれど、ちょっと微妙だ。

他の国のイメージカラーだが、

太陽国は橙色。

地球国は白色。

火星国は赤色。

土星国は茶色。

天王星国は紺色という感じになっている。

綾乃は黄色の宝玉をサラに、水色の宝玉をティムに差し出した。

それを受け取った二人は、直径十センチの玉を凝視する。

くるくる回しながら見ていたサラが不意に声を上げた。

第五章『火の掟』・第一話『宝玉の意味・湧き満ちる溶岩』Part 3

綾乃は黄色の宝玉をサラに、水色の宝玉をティムに差し出した。それを受け取った二人は、直径十センチの玉を凝視する。

くるくる回しながら見ていたサラが不意に声を上げた。

「これ……！このヒビは……！！」

《ヒビ？……お、ホントだな》

「サラちゃん、そのヒビからもう一人の貴女の魂は抜け出て、眠っていたサラちゃんの傍にずっといたんだって。」

《これを今、このタイミングで渡す訳は？》

湊生の表情が少し険しい。

場に会わない行動だと思ったのかもしれない。

綾乃は弁解しようと口を開いた。

「戦いになるなら、その宝玉を体内に取り込んでもらうのが一番か
と
思
っ
て」

どんな効力があるのかは分からない。

けれど、綾乃自身には何の力も無いから。

もしかしたら守り切れないかもしれないから。

宝玉を綾乃が持ったままにいること、それはつまり、綾乃が他の守護神達の命を握っているということ。

表世界で湊生が死んでも綾乃が死ななかったように、本来であれば例え表世界か裏世界のどちらか一方、あるいは両方が亡くなったとしても、また同じ魂を持つ者がそれぞれの世界に生まれてくるのだ。

その輪は無限に続き、絶えることは無い。

そうではあるが、今は表世界の者達が召喚され裏世界に来てしま
っていて、宝玉の中に入れられてしまっている。

無理矢理、留めている状態にあるのだ。

湊生と綾乃は、中でも更に例外だった。

同じ魂を持ちながら、表世界で兄妹として生まれ、育ち、兄であ
った湊生が命を落とした。

魂は新たに生まれてくる訳でもなく、不安定なまま湊生は霊体と
して裏世界にやってきてそれを追うように後々綾乃も召喚された。

要は、表・裏が2…0から1…1（霊体）、0…2と移り変わっ
て行っていたのだ。

二人の間に一時も安定した時など存在せず、常に不安定……。

《綾乃の言っていることも一理あるな。お前ら、それを取り込め》

「え、ちよっ、どうやってだ!？」

《飲み込め!!》

「無茶言うな!デカ過ぎるぞ」

「そうですよっ」

湊生とティム、サラの言い合いが始まり、綾乃とレウインは顔を
見合わせる。

言い分的にはティムとサラの方が正しい。

直径十センチの玉を飲み込むなんて不可能だ。

「で、湊生さん結局のところどうなんです?綾乃さんもご存じでは
ないんですか?」

《知らん》

「私も……でも、取り込むことが出来るのは確かだって。
一体化した後……どうなるのかは……」

「あ、綾乃さんが湊生さんと一体化した時は、確か……」

性別は男性に。

でも外見は綾乃。

髪の毛は短くなり。

「もしかして、一体化することで要素を共有するのかもしれませんが」
《男になったのに綾乃の身長に変化が無かったのは、多分俺が十四歳で死に、本来なら十七歳だが成長は一切していないからかな》
レウィンと湊生は冷静を始めた。

「なるほど・・・」

「綾乃、お前意味分かんのか？俺にやさっぱりなんだけど」
「私も・・・」

アホキヤラと見せ掛けて、意外にもエリート校出身の湊生と、普通校ながら情報処理能力のある綾乃は理解していた。

当然、言い出しっぺのレウィンは博識なので分かっている。

と、サラとティムは宝玉を持つ右手に違和感を感じた。

「わわっ！？サラちゃん、ティム、宝玉が！！」

宝玉は、手から吸収されるようにして消えて行った。

第五章『火の掟』・第二話『白衣の少女・碧き森のワナ』Part 1

火星国の木星国寄りの場所に、敵陣がある。

通過出来るか偵察に行こうと考え、人数を絞ろうとした。

まず参加者として例外なのが、病み上がりのレウイン。

彼は魔力もないし、ここまで言うと言失礼だが足手纏いになりうる人だ。

他はおそらく大丈夫。

今は非戦闘員である綾乃と湊生は合体したら魔法が使えるし。

緊急時はそうすればいい。

サラは癒し——回復系の属性のものと、ティムの水属性は火星においては有利だ。

二人のそれぞれの特殊能力の守護、工作っていうのも役立つだろう。

サラの守護はもとより、ティムの工作——必要な道具や乗り物を即効で作り出す発明能力は、一番三つの中では実用的だと言える。こうなると、レウインだけ残していくのは不安であるから結局全員で行くことになってしまった。

ふと敵陣への道すがら、綾乃は地面に真っ直ぐ見える影に気が付いた。

その影は何のものなのか上を見上げた。

そこにはまっすぐガラス造りの巨大なエスカレーターっぽいものが上空を横断していた。

ずっと向こう側から続いているようで、果てが見えない。

「ん？ エステイ君、あれなあに？」

「あれですか？ あれは、ワールドコネクトベルトっていいます」

《ワールドコネクトベルト？》

ワールドコネクトベルト（通称・エスカレーター）は、太陽国から冥王星国まで各国を総じて繋ぐ移動手段である。

料金は無料だが犯罪防止の為、ポーズポイント（止まる地点）と呼ばれる一国間当たり三ヶ所ある停止ボードからその国に入国する際、身分証明を提示することが義務付けられている。

ポーズポイントの呼び方は、例えば火星国の一つ目（太陽国側から数えて）のポーズポイントは火星国？（ファースト）ポーズポイントという。

火星国とか天王星国とかはいいが、冥王星国本国だけは危険な為、海王星国の？ ポーズポイントを含めてそれ以降は通行禁止となっている。

つまり、海王星国だけは入国ゲートが一つしか存在しないのだ。

「それが使えたらこの旅すぐに終わるのにね」

「仕方ないですよ、綾乃さん。冥王星国に悟られてはならないんですから」

《だよなー、ったくめんどくせ》

第一防衛ラインと呼ばれる火星国の陣の近くまで来ると、そこに大きなクレーターのような窪みが見えた。

レウィン曰く、そこには昔火星城とその城下町があったらしい。

それが冥王星国の襲撃によって失われてそのようになってしまったのだという。

「一体どうやったらこんなことに……」

《それ程までに物凄い戦力を持つということだな》

初めて王家に魔力を持つ者が絶えた王家はこの国・火星。

それは1800年のことだった。

次に地球、天王星、土星の順に絶えていき——冥王星は2006年以降その4国を潰しにかかった。

新たに、魔力を持つ者が生まれる可能性をゼロにする為に。

そうして消えた国には、どの国にも巨大な穴が存在する。

生存している者で直に目撃した者はいない。

だから何があったのかもわからない。

「何があったのか・・・それは分かりません」

けれど、とレウインの言葉を継いで、サラが説明役を買って出る。

「その時国内にいた者は皆、一瞬にして消えたというわ」

「サラちゃん、それって死んだってこと？」

「分からない。でもどちらにせよ、百年以上前のことなの。生きて覚えていられる人なんていないわ」

《そっか》

と、レウインが急に走り出す。

続けてサラや湊生と会話中だった綾乃は、それに気付くのに遅れてしまう。

気付いた頃にはレウインとの距離は結構あって。

意外とレウインは足が速いのではないだろうか。

彼は、城跡とは反対方面で、マグマがより活性化しているところを目指している。

もしかして、身投げ？

そう考えて綾乃は焦った。

「ちょ、ちょっと！どこ行くの？」と綾乃が追いかけているが問い掛けた。

第五章『火の掟』・第二話『白衣の少女・碧き森のワナ』Part 2

もしかして、身投げ？

そう考えて綾乃は焦った。

「ちょ、ちよつと！どこ行くの？」と綾乃が追いかけている間、
「向こうに人がいるんです！・・・そんな報告は受けたことが無い
のですが、話を伺うべきだと思うんです！！」レウインは振り返り
ながらそう叫んだ。

すぐに皆も米粒サイズに見えるほど遠くに立っている人の姿を捉
えた。

「すみませーんっ！少しお時間よろしいですかー？」

どこの口説き文句だ。

レウインがこの国の出身の方ですか、と尋ねると、綾乃やレウイ
ンと同じ年位の少女が小さく肯定の意を示す。

「何でここにいる！？火星国は危険だと教わらなかったのか」

綾乃は男勝りな女の子と捉えたが、村娘としては普通の口調であ
る。

「知っている上で、こちらを通らせていただきたいと思ひまして」
と、レウインは苦笑した。

少女は半ば呆れ顔で目の前のレウインの手首を掴み、また近くに
いる他のメンバーの服やら荷物の紐やらを引っ張って早歩きで立ち
去ろうとする。

「アタシの名前はリフィア。木星国出身なんだけど、小さい頃“民
狩り”に合ってこの国の牢屋に入れられてたんだ」

「じゃあ、貴女は逃げてきたの！？」

「そうだ!! なのにお前らはバカか!?! わざわざこんなところに・・・。しかも、分かっているのか、一度この国に入ったら出られないってことだよ!!」

引っ張られる力に抵抗するかのよう、皆無理矢理立ち止まった。
今、何て・・・・・?

《オイ、今何て言った!?! 出られないだと!?!》

「冥王星国王の許し無しには、出ることは叶わない!」

「なら貴女は何で、出られないと分かっているで逃げ出したの!?!」

「そうですよ。リフィアさん、どうしてそんなことを・・・・・?」

「それどころではない!! 後で説明するから、あそこ森まで走れ!!」

リフィアの焦りが相当なものと察し、全員頷いた。

火星国と木星国の国境付近、木星国の影響が結構広い森があり、隠れるには格好の場所だった。

広さで、例えば森が疑われようと逃れられる可能性は高い。

少なくとも、何も隠れられるようなものが無いところに突っ立っているよりはいい。

皆一斉に駆け出した。

「帰られねえなら・・・・・自活か!?! ・・・カッコイイな」

走りながら何故かわくわくしているティムの頭を湊生が殴った。

因みに自活がどうか言っているが、木星国で既に一時的自活をしているのに気付いていない。

「ティムさん! そんな暢気な事を言わないで下さい!」

「すまん・・・」

ティムが横でレウィンと湊生に叱られているのを聞きながら、帰れないことに綾乃は恐怖を感じていた。

《……何だそれ?》

湊生は、ティムが捕まえてきた生き物を見て呟いた。

ウサギのような外見をしつつも、二足歩行をしていて、その顔はあまりにもキモい。

「え? ……何って、食用ウサギさ」

ウサギなんだ、やっぱり……。と、まじまじと見る綾乃にサラが説明しようと近寄ってくる。

「これはね、立ちウサギ科のオクタヴィアヌス。金星は砂漠の国だからいないの——だから私、実物見たの初めて!」

「綾乃さん、湊生さん、この食用ウサギは太陽国でも養殖されているんですよ」

《こんなの養殖すんの!? わざわざ!?!》

食用ウサギの長い耳は一つに束ねられ、しっかりとティムに掴まれてしまっている。

既に抵抗することをやめ、荒んだ目をしているその姿はなんとも言い難い。

美味しくなさそう……。そう、食べたことも見たことも無いメンバーは思った。

《今日も野宿だな。しかも見つからないようにハンモックもダメだな。地べたに寝ることになるが……。俺はいいとして、皆は一応一国の王子・姫が大丈夫か?》

「うい」「大丈夫です」「いいよ」と、それぞれ了承した。

ただ、ティムが一応という言葉に過剰反応していたが。

《皆タフだなあ。……。綾乃もいいのかあ、お肌の曲がり角》
「ちよつと黙つというて」

低空飛行中なのをいいことに、一言多い湊生を綾乃は踏み付けた。潰れた湊生を無視して、綾乃は森の中でもより安全な場所を探し始める。

幼い頃から木登りを遊びとしてよくやっていたので（ハンモック

愛用)、それゆえ木の上で見張り役を引き受けようとした綾乃に、先程の冗談の詫びか飛行能力のある湊生が見張りを買って出た。

ティムもレウインもサラも綾乃が見張りをするのを反対し、湊生とティムとレウインがその順番で見張りをする事になった。

次第に日が暮れ、オクタヴィアヌスがティム所持のロープで縛られ、焼かれそうになっていた。

確かにお腹は空いたけれど……。

「兎、まさに食われんとす」などと綾乃が冷静に述べ、それを聞いて青褪めたサラはそれを引き止めて、

「ね、やっぱりやめましょ？可哀相よ」と言った。

「でも暗いし、食料他には手に入らないと思うぞ。それにコイツ美味いんだよなあ」

《俺もサラに賛成。そんな生き物口に入れたくない》

ティムは異議を唱え、湊生は眉間にしわを寄せてウサギを見つめる。

と、そこら辺をうろろろしていたレウインが嬉しそうな顔をして戻ってきた。

「やめましよう。木の実が意外と近くにあるそうですよ。そっちを食べましようか」

その提案を聞いて喜んだのは湊生とサラだけでなく、ウサギもであつたようで、サラとレウインに急激な懐きを見せる。

一方湊生は酷いことを言ったために嫌われ、勿論ティムも嫌われてしまった。

木の実はすぐに見つかり、量もあつたので腹一杯食べ、森に入っ
てすぐに眠ってしまったリフィアの分をハンカチに包んでとっておいた。

まだ九時にもならないうちに一本の巨木の下に並んで寝転んだ。
端からティム、レウイン、ウサギ、綾乃、サラ、リフィア。木の上
に湊生といった感じである。

「この子私が飼う」と、ウサギを抱き締めてサラが言った。

「そっか。じゃあ名前を決めないとね」

隣に寝転がる綾乃は、気持ち良さそうに眠っているウサギを撫でた。

「うん、考えてみる」

「にしても——火星も夜は冷えるね。砂漠も夜は寒いから似ているなあ」

湊生はその会話を、興味津々かつ楽しそうに耳を傾けていた。

どうやらタイムやレウインは早々と寝てしまったようだ。

それも仕方がない、交代の見張りであるから寝られる時に寝ておいて貰わなければならないし。

じゃあ、と夜空を見上げていたサラが綾乃の方を見た。

「表世界は？寒いのか？暑いのか？」

「いろいろ、かな」

「綾乃が住んでいたところは？」

「春夏秋冬があって……」

「シユンカシユウトウ？」

サラが首を傾げ、知らないことを示す。

「春、夏、秋、冬の四つのシーズンがあるんだよ。夏になれば暑しいし、冬になれば完全に川の表面が凍ってしまう」

「それは、地球国や海王星国の気候と似ているわ」

「そうなの？にしても、裏世界の国境線を跨いだ環境の変化は本当に面白くない？」

「見慣れてるから、面白いとか珍しいとかは特に思わないかも」

「国を越えることで、体の変化に適応出来なくて体調を崩す人……っていない？」

いるいる、と答えるサラにやっぱりと綾乃は苦笑交じりに言った。

「・・・マグマに満ちた大地に生まれた森・・・」

綾乃達が眠って暫くして。

さっさと眠ってしまった筈のレウインがその場にいつの間にか座っており、呟くように言った。

「気のせいで、あればいいのですが・・・」

その言葉を、木の上の湊生はしっかり聞き取っていた。

見張りをしなければいけないのにも関わらず、湊生はあまりの眠気に微睡み始めながらその言葉の意味を考え始めた。

確かに金星の砂漠にはオアシスがある。

しかし、マグマだらけのこの火星には水は一切無く、そもそもこんな場所に森があることがおかしい。

そういえばこの森に入る時、先程謎の言葉を発したレウインが渋っていたなあ、とふと湊生は思い出した。

それは――この森の存在を疑わしく思ったからではないのか？
レウインの独り言から少しして、どうやら本当に寝てしまったらしい。

静まって、そろそろ交代予定のティムを起こして自分は寝ようか、なんて考えていた時、ハッキリ何を言っているのか分からない感じの寝言が聞こえてきた。

多分、綾乃だ。

下を見ると、四人がまるで芋虫のように丸くなっている。

湊生はフツと鼻で笑って目を閉じた。

第五章『火の掟』・第二話『白衣の少女・碧き森のワナ』Part 3

翌朝木の実を朝食に食べた後、皆バラバラに散ってしまった。

最初にどこかへ行ったのは、昨日森に着いて早々そのまま今朝まで眠っていたリフィアだった。

行きたい場所がある、と言って。

そう告げた時の彼女の表情が気になったが、敢えて皆黙って頷いていた。

因みに他のメンバーは。

ティムはそこら辺を散歩してくると言って本当に適当に去って行った。

サラは例のウサギっぽい生物と寝床にした木の下で楽しそうに戯れている。

ウサギの方はと言うと、やはり何とも言えない顔でされるがままになっていたが。

綾乃は特に何をする訳でもなく、ただ立ち去って行く者やそこに留まって遊ぶ者をボーッと見ていた。

と、急に日が遮られて暗くなり、変に思った綾乃は顔を上げる。

そこに立つ、レウィンと目が合った。

レウィンだと認識してすぐ、綾乃は顔を背けてしまう。

頬の辺りに血が集まって行き、熱を帯びるのが分かる。

あからさますぎる反応であったが、レウィンはそれに全く気付いていないようだった。

「綾乃さん、今何かすることあります？」

綾乃は別にないよ、と手をパタパタと顔の前で振った。

「じゃあ、一緒に歩きませんか？」

「え？」

「敵の手の中なのに、少し暢気過ぎるかもしれませんが」と、綾乃に手を差し伸べるレウインは優しい顔をしていて、綾乃は無意識にその手に自分の手を重ねて立ち上がった。

「大丈夫じゃない？昨日陣の近くまで行っただけ、そんなに活発そうじゃなかったし。どうせ……火星国からは出られないでしょ？出るなら強行突破になる筈だから、今の内にリラックスしておけばいいと思う。レウイン君だって本調子じゃないしね」

「あはは、すみません。あと、その、湊生さんの方が……」

指差された先には、ぐったりとした湊生が木の根っこを枕にして寝転がっていた。

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

「何かまた体調が悪いそうですよ。酷くは無いらしいので、安静にしておいて下さいと言っておきました」

「そこら辺のもの拾って食べたんじゃない？」

「いくらなんでもそれはちょっと」

歩き出しながらレウインは苦笑した。

この兄妹は仲がいくせに、お互いにこんな口をきく。

でもそんな言葉の中に、優しさが籠っている。

レウインからしたら少しへそ曲がりを感じない訳でもないが、何だか暖かい感じがしているのでよしとする。

「で、どうしましょうか。ただ歩き回るよりも目的があった方がいいですよ」

「そうね、じゃあ火星国から出られる場所、探す？」

返事が無く、訝しく思っただけレウインを見る。

「ちょ、聞ってる？」

「綾乃さん」

「な、何!？」

「出られないってリフィアさん言ってましたよね。どう出られない

んでしょう？」

「結界？んーどうなんだろう？聞いてみる？」

はい、とレウインは強く同意して、一旦引き返しリフィアが歩いて行った方角を目指す。

結構時間が経っていた為、場所によっては追いつく前に迷ってしまうかもしれない。

もし簡単に見つからなかったら、自分から戻ってくるのを待つべきだな、なんて考えていると、前方見えるか見えないかの距離に小さくリフィアの姿が見えた。

思いの外あっさり見つかリ綾乃は胸を撫で下ろした。

「リ・・・あっ」

声を掛けようとして、その言葉を飲み込む。

リフィアの前には小さな塚があって、その上に大きめの岩が乗せられ。

彼女が手向けたらしい花が、そこを飾る。

思わず木に隠れた二人に気付いていたらしく、リフィアは手を合わせたまま目を開き、こちらを見た。

「いるの、わかってるよ。出てきな」

「お恥ずかしいです」

「ごめんなさい」

ひょっこり出て来た二人を、リフィアは手招きして自分の傍まで来させた。

綾乃もレウインも後ろめたく思えて苦笑いを浮かべる。

「ここには、アタシの父さんが眠ってんだよ」

「リフィアちゃんのお父さん？」

「そうさ」

そう、あれは五年前。

国境線近くの木星国領土で、“民狩り”があった。

連れて来られたのは老若男女、見境も無く、ただそこらにいた者達だった。

リフィアとその両親もその内の一人。

元々病持ちだった母は、牢の中の環境の悪さも相俟って早々と死した。

隙をついて逃げ出した父子であったが、その際深手を負ったりフィアの父親はやつとのことで辿り着いたこの森でその命を落とした・
・・・・。

幼いリフィアには生きる術などある訳もなく。

再び捕えられ、五年。

脱出を試みて成功したが・・・・・国境を越えられることは出来なかった。

「国境に・・・・・何があったの？」

「僕達、それが聞きたくてここまで来たんです」

「幻覚、だよ」

幻覚で、辿り着こうとしても元いたところに戻ってきてしまうのだという。

「唯一、出られるとしたら、個々の陣のボスを倒すしかないんだ、多分」

「それは厄介ですね」

レウインは大きく一つ溜め息を落とした。

寝床にした木の近くまで行くと、その上空に黒い雲が立ち込めているのが見えた。

「きゃあっ!？」

次いで聞こえたのはサラの悲鳴。

綾乃達三人は不測の事態に備え、気を引き締めた。

「湊生様!!」

サラに容赦なく揺さぶられて湊生が呻いた。

「囲まれてしまってるぞ」

「・・・何にイ?・・・うわっ!? 本当だ! でも何故だ!？」

湊生達三人は、冥王星国軍に囲まれてしまっていた。

その中の一人の男が前に出てきて彼らを嘲笑う。

強力そうな武具からして、どうやら身分が高そうだ。

「俺は『ルーク』のデイレイテ。よろしくな」

冥王星の軍人は、チェスの駒の名称が地位によって付けられている。

ルークは所謂小隊長で、ポーン（一般兵士）を纏めるのが仕事だ。

「リファイアって小娘を追ってきたのか？」

「ああ。そうだ。それだけではない。・・・お前達もだ」

「・・・まさか、・・・いや、やっぱり、この森は魔法で作ったニセモノ。迷い込んだ者達が逃げて隠れられるのはこの森のみ・・・そういうことですか」

やっと戻ってきたレウインが現れる。

その後ろには綾乃とリファイアがいる。

「ほう。分かっていたか」

「分からない方がおかしいです」

レウイン以外“全員知らなかったよ”といった顔をしている。

ただ湊生は、先日のレウインの言葉を聞いていた為、このことを言っていたのかと思った。

攻撃に備えてこっそりとティムは覚醒モードになる。

守護神は覚醒モードが本来の姿で、髪の毛や瞳の色が変わり、翼が生える。

タイムが魔力を手に入れた。

ディライトの視線がサラを捉えると、彼はにやりと笑った。

「どうもサラネリア姫。お兄さんから話は聞いている」

「お兄様から!?!? お兄様が今、どこにいるか知っているの!

? 金星城にはもうずっと戻っていないとお父様もお母様も……」

その言葉に驚いたのはタイムだ。

金星城に到着したその日、直に会話したのだから。

「俺、金星城でフェンと話したぞ?」

「え!?!? それは本当なの、タイムお兄様!!」

「ああ。そんなこととは知らなかった」

「近々自分からお前らの前に現れる筈だ。冥王星王の命令でな。さて。話はここまでだ。お前達、冥王星王の命により生きて帰すな!」

「「オウ!!」」

ポーン達が腰の剣を抜き放ち、こちらに向けた。

第五章『火の掟』・第三話『銀色の光・放たれた力』Part 1

「サラ！！ “守護”だ！」

ティムは全体を水のレーザーで全体攻撃を仕掛けながら叫ぶ。

小さくサラは頷いて一歩後ろに下がり、綾乃達戦闘員を確認して結界を張った。

守護が発動して不可視の膜が形成されていく中、綾乃の腕に抱かれた湊生は見上げるようにして綾乃を見た。

必死に前を見据え、敵の数に恐怖する綾乃はその視線に気づく訳も無く。

湊生は綾乃の手から伝わる震えを直に感じ、少し悲しげな表情を浮かべた。

恐怖もある。

加えて綾乃の目につくのは、ティムの魔法。

魔法が使われる様は湊生との分離の際に見た———というか体験

？したことはあったが、守護神の使う魔法を見たのは初めてのことににかく命綱はティムの魔法だ。

人数的に不利としか言えないが、どうしようもない。

サラに攻撃系の魔法はなく、レウィン、綾乃、湊生、リフィアは非戦闘員。

そうなれば……………。

「水よ、俺に従いて…………その力、顕現させん！！」

紡がれた呪文が、ティムの足元から水を召喚し、上空に集うところから大量の水が降り注ぐ。

タイムの頭上に水球は浮かんでいるのだが、その外見とは比にならない量が流れていた。

ポーン達はその水に翻弄されていたように見えた……が、その都度姿勢を立て直す。

もしかしたらあまり効果は無く、一方的に疲労させられているのではないだろうか。

不意にディライトが不敵な笑みを浮かべた。

「確か水星国守護神、お前はDランクだったな」

「それがどうした」

「言わなかったが、聞いて驚くなよ」

「早く言え」

魔法発動中に加え、立て続けに行使して魔力が消耗し、それが体力にも影響を及ぼし掛けている。

そんな状態で、タイムはイライラし始めていた。

「ここにいるポーン、最低はFランクもいるが……平均はEランク、勿論Dランクの奴もいるんだ」

その言葉に、タイムは眉を顰めた。

「Dランク一人に対して、あんなに多くの敵……しかも、ランクは同等、ディライトに至ってはそれ以上として……勝ち目ないですね……」

サラの織り成した結界の中。

綾乃の傍らに立つレウインが齒噛みして言った。

「ランクって何のこと？」

「あ、このことまだ綾乃さんには説明していませんでしたね。状況が状況です、手短に言いますね」

守護神達魔力持ちには、魔力のレベルで最低ランクFから最高ラ

ンクSまで7ランクに分けられている。

たった1ランク違うだけで、魔力の差は半端でないという。
そのランクが、ティムはDランクということだ。

「じゃあ……」

「はい、かなりまずい状態です」

「ごめんなさい、私が戦力になればよかったのに……」と、
サラが自己嫌悪に入ってしまう。

「守ってくれてるじゃない。気にしないでっ」

「うん、ありがとう……」

とはいえ、やはり一人でも戦える人がいてくれたら……と、
思わずにはいられない。

サラには申し訳ないけれど。

目の前、結界の向こう側ではティムが必死に戦っているのだ、手
助け出来ないのはサラ同様綾乃だって歯痒い。

魔力の無いことが。

自分が、守護神でないことが。

第五章『火の掟』・第三話『銀色の光・放たれた力』Part 2

《綾乃……身体、借りていいか》

何度も綾乃の顔を彼女の腕の中から見上げていた湊生が、遠慮がちに問うた。

その言葉の意図を正確に読み取った綾乃は、ハッとその可能性に気付く。

目に、炎が灯る。

だが気になるのは、湊生の体調の方。

ぐったりと木の幹に凭れていた様を思い出せば、戦うのは大丈夫なのか疑えてくる。

況して、魔法を使ったことなど無いのだ。

魔法の練習をしておこうとか言いながら、いざ旅をすると敵があまりに現れず、安心し切っていた。

初めてで暴走などしたら。

おそらく、その体調不良が影響して止めることなど出来ないだろう。

けれど、湊生が出撃しなければいけないのも分かってはいる。

綾乃は取り敢えず念を押した。

「いいけど、お兄ちゃん体調は大丈夫なの？」

《大したことないし、そんなことも言ってられないだろ。あの人数では、タイムはすぐにバテる。サラム、一斉攻撃されたら結界を維持してることは出来ないだろ。一か八かの力だが、可能性があるなら……！！》

「わかった。早く、お兄ちゃん」

こくり、と湊生が頷く。

途端、魚の身体が光り出し、同時に綾乃の魂が身体から抜ける。交換するかのように魚から出て来た光が綾乃の身体の中に、綾乃の魂は魚の中に入った。

光が綾乃の身体と一体化すると、光は全身に広がって。

そして、次の瞬間には白衣に純白の翼の少年が立っていた。

それは水星城で、ティムが演技を打って綾乃を殺そうとした時に現れた湊生の人間版の姿。

あの時と同じ。

神官のようで、でもそれよりもっと高貴で神々しい。

「レウィン、綾乃を頼む」

「はい」

湊生は手に持っている綾乃が入った魚のぬいぐるみをレウィンに託した。

レウィンはその姿を見るのは2度目だが、サラは初めてで驚き、口をパクパクとしている。

「戦えそうですか」

《大丈夫なの、お兄ちゃん？》と、意識がぬいぐるみに完全に定着し、目を覚ました綾乃も再度問う。

「ああ、大丈夫だ!!」

そう言ってサラの結界から抜け出て行った。

隣にやってきた湊生に一瞬ティムは驚いた顔をしたが、すぐに正面を見た。

「行くぞ、湊生」

「お前もくたばんなよ、ティム」

「うるさい」

「って人に言ってるけど、俺魔法使ったことないんだよなーははっ」

湊生は苦笑し、ティムは先程までの苦戦の強いられた攻防による脂汗を流しつつ呆れ顔になる。

そういう顔が出来るのも、少し余裕が出来たからか。

「湊生こそ大丈夫かよ」

どこからくるのかわからないが、湊生は何故か自信に満ちている。やってみるだけやってみるさあ」と相変わらずの能天気さ。

だが、その次の瞬間そのテンションはどこへやら、目が真剣なものへと転じる。

「・・・・・・光よ」

呪文の冒頭が紡がれた時、湊生の周りに気の波紋が広がる。

「我に仇なす者に・・・・・・永久の戒めを与えよ!!」

弾けた光りに、皆目を塞ぐ。

やがて収束し、目を開いた綾乃の前に何かが飛んで来て、思わずそれを掴んだ。

・・・・・・羽？

・・・・・・確かに羽だけど、違う。

「銀色・・・・・・ですね」

綾乃の持っている羽を見たレウィンが眩き、綾乃もうん、と言った。

今覚醒しているティムやサラにも湊生同様翼がある。

彼等のは純白の翼。

勿論、羽も白い。

でも、今手に持っているのは・・・・・・銀色の、羽。

「銀翼！？ 貴様、何者だ!!・・・・・・“麒麟”の守護神がいるなど、そんな報告は受けておらん!!」

ディライテが叫ぶ。

思い出したようにそちらを見れば、敵全員がぐったりとしていた。「ちっ。ミスった・・・・・・威力全然だな」

悪態をつく湊生に皆どこがだよ、と内心突っ込む。

そして湊生はディライテの質問完全に無視。

「失礼な奴だな・・・・・・まあいい、どうしてなんて問題ではない。

いること、それが事実だ。しかも二段階覚醒の麒麟とは……

上に報告せねばならない」

「左様で、ございますね」

「一旦引き、ます……か、隊……長」

片腕を押さえた兵が、苦しそうに尋ねた。

その後ろにたくさんの方傷兵が目映る。

「負傷者多数だしな……出直そう。どうせ、出られはしまい。奴らには唯一の出口に気付ける筈も無いしな。行くぞ」

へい、とぞろぞろ敵軍が退いていく。

それを見送りながら、綾乃もレウィンもほっと胸を撫で下ろした。サラが織り成していた結界を解く。

「オイこら、湊生」

「何だよ」

「敵攻撃すんのはいいけどな」

「あん？」

「味方まで衰弱させるなよ……」

装束の袖を下に引かれる。

視線を移すと敵と同じくへたり込んでいるティムがいた。

「あー悪い悪い。こりゃダブルミスだな」

「ふっざけんな！！物理的には痛くねーけど、苦しくてしょうがないだろ！！」

湊生曰く、この技は本来なら熱傷系の魔法で、上手くいったら体内の水分が完全に蒸発し、追加効果として目晦ましになるのだという。

それにおいて、湊生がミスったのは二点。

不慣れによる、攻撃効果の半端でない減少。

効果範囲のコントロール。

因みに、サラの結界の中にいれば影響は皆無で、“あ、ちょっと眩しいな”程度だ。

「おほほほほ」

「誤魔化すな素人！！」

「ほほ」

怪しげな笑い方をして湊生はそっぽを向いた。

第五章『火の掟』・第三話『銀色の光・放たれた力』Part 3

「つたく．．．．それより。お前、ディライトの言った通り．．．麒麟だったのか」

そこではた、と思い出す。

何かディライトが言っていたような．．．．。

「麒麟”って．．．．．」

《お兄ちゃん、これ》

近付いてきて差し出された羽に、湊生は何だそれと言わんばかりの顔をする。

「羽？銀色じゃないか。変わってんな」

「湊生さん、自分の．．．．翼を。翼を、見てみて下さい」

「は？翼？」

ひょいっと大きく広げた翼に。

皆あんぐりとした。

視界を覆い尽くす銀色．．．．。

《銀色になってる．．．．．》

その翼から離れて尚シャラシャラと光の零れる羽とその銀色に輝く神々しい翼を交互に見ながら、見惚れたように綾乃が呟く。

湊生もあまりの変化に呆然としてしまっている。

「おそらく、力を解放したからでしょう。麒麟とは、そのように銀色の――銀翼の持ち主のことを言います。麒麟の潜在的な魔力は、通常の羽である白翼の者の比ではないと聞きます。ランクはS―Cまでであると考えられ、稀少にしてまず目に掛かることは無いと言わ

れているのです」

「それが……この銀の翼」

湊生は自分の翼をばさばさと動かして、ティムはその翼をまじまじと見た。

「ああ……俺も、初めて見た……」

「僕もです。しかも、何といいますか……ティム様。これは”二段階覚醒”というオプション付きですね」

「そうだな。元々は白翼だったから……」

《白から銀になるのが、二段階覚醒……ってこと、エスティ君?》

隣に立つレウインの顔を覗き込むようにして問うと、僅かにレウインは動揺したように見えた。

「はい。二段階覚醒の麒麟は、銀翼Sランクの上に位置します」

《じゃあ、訓練次第で十分戦力になるってことね》

「十分過ぎますよ……って、あ、あれ?」

きよろきよろして、最終的に上空を見上げたレウインに、皆の視線が集まる。

代表して湊生がどうしたのかと訊くと、レウインは可笑しなことを言い出した。

「風だ……」

「は?」

「微かなんですけど……上から、風が」

「お、ホントだ」と、湊生も風を感じたらしく納得する。

他のメンバーはは?と言った顔をしていた。

「気になることがあるからちよっくら上まで行ってくらあ」

「はい、お願いします」

《どうということ?お兄ちゃんは何しに上に飛んで行ったの?》

「先程の戦いで、上空に結界の穴が開いたみたいです。もしかしたらそこが薄いという結界の造りだったのかもしれない……
・あ、湊生さん。どうです?脱出出来そうですか?」

大丈夫！！とジェスチャーで湊生が答える。

出られるなら長居は無用と言わんばかりに、翼を持つ者達はそれぞれ無翼者達を抱え込んだ。

ティムはレウインを。

湊生はリフィアを。

そしてサラは魚のぬいぐるみ状態の綾乃をずっと抱えていたレウインから受け取って、更に立ちウサギを腕に抱えて空に舞い上がり、遙か上空の結界の歪みから無事に火星国を抜けた――――。

第六章『木の掟』・第一話『仮初めの繁栄・常春の世界』Part 1

麒麟は最初に覚醒した時点で既に銀翼である。

しかし、銀翼のSランクより事実上魔力が上ならば“白翼の時”が存在する。

翼の色は魔力だけで決まる訳ではない。

故に、白翼でも魔力は天麒麟並である者は有り得ない訳ではない。

ただし。

それでも可能性やその他いろいろの総合的な潜在能力において劣るところがあるのもまた、事実である―――。

「何かいろいろあったけど、無事木星国に到着だな」

一行は火星国の上空にある結界の歪みを抜け、一気に木星国中央まで飛んできた。

木星国は木が激しく生い茂っている為、彼らが飛んでいる姿を目

にした者はいないようだった。

《そういえば木星国には守護神がいるのよね?》

「ステアお姉様ね! とっても優しい人よ。大丈夫、旅にはあっさり参加してくれる筈だから」

どうやらサラは非常にステアを慕っているようで、目を輝かせている。

サラに抱っこされたままの綾乃は軽く伸びをした。

《それ聞いて肩の荷が下りた……っていうか、お兄ちゃん!

! もう木星国に着いたんだし、私の身体返して!!》

隣に舞い降り、リフィアをそっと降ろした湊生を綾乃は物凄い形相で睨みつける。

慣れとは恐ろしいもので、若干怯えた様子のレウインとは裏腹に湊生は動じない。

寧ろ、結構飄々としている。

「あ、そのことなんだけど、もう少し借りてていいか?」

まさかの切り返しに、綾乃は調子抜けしてしまった。

《どうして? 何するつもりなの?》

「タイムには言ったんだけどな、魔法の特訓しようと思って」

口元に拳を当て、暫く悩んだ末。

《うん……わかった。この魚にも慣れたし。いいよ》

「よっしゃ」

ガッツポーズをして、湊生はサラから綾乃を取って、やけにハイテンションで歩き出す。

《お、お兄ちゃん!? どこへ?》

「ステアとか言う木星国守護神のトコだ。こっちにもタイムリミットがあるんだから、早く行かないと」

《あ、そっか》

そうして木星城に押し掛けて言った訳だが……兵士によって門前払いを食らったのだった……。

「くそ、腹立つアイツ！！俺は太陽大命神サマだぞ！？単なる一国のトップじゃない、この裏世界のトップだぞ！？それなのに何なんだ、あの態度！！俺が正式に継承したら即、首切ってやる」

完全に切れている湊生は愚痴を吐き散らす。

因みに、城で綾乃とサラトリフィアとは別れた。

三人娘はそこから城下町でショッピングを楽しみらしい。

男性陣は特にしたいことも無く、最初に降り立った場所に戻ってきていた。

湊生は木に登って一番太い枝に寝転がって、レウインはその木に凭れ掛かるようにして立ち、ティムは根っこを枕にして昼寝しようとしていた。

「まあまあ、落ち着いて下さいよ、湊生さん」

「落ち着いてなんかいられっかよー！！あー腹が立つ！！魔法の練習でストレス発散だー！！付き合えティム！！」

木から飛び降りてティムの手を掴み、無理矢理立ち上がらせようとしたが……重くて不可能だった。

「えー俺怠い」

「だーまーれー！つべこべ言わずに付き合う！！」

「でしたら、わたくしがお相手致しましょうか？」

そう言って現れたのは、灰色の髪を三つ編みして頭の上に纏めている十七・八歳の少女。

服装は村娘みたいな感じのものが、その風格は隠せていない。
刺繍の入った緑のワンピースに腰から下の白いエプロン。

所謂、エプロンドレスというヤツだ。

男性陣三人の中で唯一人、タイムだけが指を指して口をパクパク
させ、小さく”あ・・・ああ・・・あ”と声を漏らしている。

次いで呟いた言葉に、レウインと湊生は驚愕した。

「ステア・・・」

第六章『木の掟』・第一話『仮初めの繁栄・常春の世界』Part 1（後書き）

この章の後半？くらいに大量に画廊でイラストを發表します！
他にも、本編とは少し違うアナザー”太陽系の王様”、超短編漫画
を載せるつもりです。

そちらもヨロシクお願いします♪

第六章『木の掟』・第一話『仮初めの繁栄・常春の世界』Part 2

「なるほど……火星国でそのようなことがあったのですね。で、練習をしておきたいということなんですか？」

彼女がステアだと知ったところで、湊生は今まであったことを話した。

こういうことは、共有しておかなければ国防において都合が悪いというのもある。

「そうそう。また絶対来ると思うし、守護神集めてるっていうのも、現在地もバレちゃったよな」

半日前まで火星国にいたというのに、もうしみじみ感溢れる発言。本来ツツコミ役を自然と買って出るレウィンも流してしまっている。

「まだ脱出したことが知れていなかったらいいですね。少しは足止めになるかもしれないですよ」

「で、先程までイライラなさっていたのはどうしてなのでしょう？」
ステアが思い出したように問うと、湊生が頭を抱えて立ち上がった。

あまりにも急に立ち上がったため、ステアはびくりと肩を震わせる。

痛い話題に触れちゃったーと思わずにはいられないティムとレウインは呆れて若干の疲れが窺える。

「あー思い出したらまたムカついてきたー!!」

「湊生さんがあんななので僕がご説明致します。先刻木星城へ赴き、

ステア様を訪ねて行きましたところ、”出直してまいれ”と門前払いされてしまったのです。それで、あの通りで……」

「それは、失礼致しました……衛兵の無礼、代わりまして謝罪致しますわ」

「そんな……気にしないで下さい。こうして貴女に会えたのですから」

うわ、来た天然タラシとティムは思った。

レウインはたまにこのような誤解を招きやすいと言うか……ちよつとプレイボーイな発言をする。

これまた彼の人柄がいいもんだから、イチコロ状態になっているのをティムは今までの旅で何度も見掛けて来た。

見たところ綾乃はそれに対して嫉妬心があるらしいが、あくまでも無自覚でしている超天然ちゃんなのでどうしようもない。

それで救われたこともあるから一概に止めさせることなど出来ない……いや、そもそも天然行動なので止めさせるなど最初から不可能なのだが。

「優しいですね。ありがとうございます。あ、あの。良かったら、その魔法訓練を手伝わせて頂きたいのですが、よろしいですか？」

「お、いいのか!？」

今の今までイライラで頭を抱えたまま体を前後に振っていた——それをティムはエビダンスと名付けた——湊生が、突如食いついてきた。

「守護神の主でいらっしゃる太陽大神様のお力になるのは当然のことですわ。貴方様は、確かアストレインⅡヴァーイェルド様とおっしゃいましたわね? どうお呼びすれば宜しいですか?」

「あー、別に何でも。けど、俺には表世界名に”篠原湊生”っていうのがあるから皆そっちで呼ぶな。基本的にどっちでもいい」

「では、湊生様で?」

「それでいい」

「それでは湊生様、まず基礎知識から始めましょうか」

「おー、受けて立つ」

「湊生様はそれぞれの守護神の属性と特殊能力をどこまでご存知ですの？」

聞かれて、湊生は綾乃のバッグから紙を一枚と表世界から持ってきたらしいボールペンを一本取り出して、分かるところから記入することにした。

自分と、他の守護神数人のものはしょっちゅう聞く。
だからそこから・・・。

太陽の守護神は光属性で特殊能力は制御。

サラの金星の守護神は癒し。特殊能力は守護。

ティムの水星の守護神は水属性。特殊能力は工作。

で、ステアの木星の守護神は・・・。

「・・・ん？えっと？うーんと・・・」

「ちよっと湊生様？私のところが分からないなんておっしゃいますよね？」

「・・・あは。」

「木星の守護神は木属性！特殊能力は入魂です！」

属性はそのままでございますわ、当てずっぽうでも仰れば当たるものです、とステアが言うと、レウィンもティムも深く何度も頷いた。

ついでに痛い子を見るような目線を送られてくるような気がして、湊生の口元が引き攣る。

その様子に苦笑しつつ、湊生は手元の用紙に書き込んだ。

書いてみて、見返すと何か凄いことを書いた気がした。

「ステア、じゃなくて先生、今サラッと凄いこと言われませんか？

た？」

「何でしょう？」

「入魂、とかなんとかって」

「そうですね？入魂、それがわたくしの特殊能力。一度も使ったことがないので、どういった力なのか分からないのですが」

特殊能力や属性は古い本に纏めてあった。だが、それぞれがどういったものなのかは触れられていない。

ステアの特殊能力がその例だ。

入魂、それは死者を生き返らせる力なのか、それともステア自身の魂、または心を何か他のものに宿せる力なのかは定かでない。

「恐ろしい・・・入魂って・・・ホラーだ」

「うるさいですわね。次、お書きなさい！」

結構ステアはスパルタだった。

そして、完全に本来の目的である魔法の練習からはずれ始めていたのだった・・・。

第六章『木の掟』・第一話『仮初めの繁栄・常春の世界』Part 3

「・・・先生」

「はい？」

「残り全部分かりません」と、湊生が紙を一通り目を通して言い放った。

それをひらひらと振ってお手上げだと示す。

湊生の隣で、それ以上は教えていませんからねーそれはそうでしょうと思っている元教官レウインは黙って行く末を案じていた。

と、湊生は殺気を感じて後ろを振り向くと、視界一杯に仁王立ちした本来居ない筈の人物の姿が映った。

・・・クイル。

「アレン様あ。お勉強サボってましたね！私はそこを少なくとも三回は教えましたよっ！なのになったくアレン様ときたら・・・歯あ食い縛れ！　おりゃあ！」

「ひっ」

「・・・あの、何してるんですかティムさん」

「お？クイルのマネしてみた。よくやられたんだよな、アレ」

どうやら湊生は幻覚のような物が見えていたようだ。

実際は、クイルの物真似をしたティムが押し掛かろうとしていただけ。

流石クイルに家庭教師をして貰っていただけあって、特徴が掴めている。

湊生は彼女から直接勉強を教わったことは幸いなことに無いが、近くで綾乃が踏まれている様を何度も見ているのだ。

想像が出来る分、効果は絶大であったようで固まっている。

それくらい怖れられるクイルはもつと格闘技系で優勝してそっちで活躍すればいいのにと思わずにはいられない。

知識はあるし、彼女に教えられた内容は嫌でも忘れない。

でも、先生には向かないんじゃない。

そう誰もが思う女傑だ。

クイルは勉強を教える時、必ず大きなテーブルの向かい側に座っていた。

その上彼女は超ド近眼なのに眼鏡をかけてなかったので、クイルの言葉からα波を受信して爆睡するティムは、バレずに済んでいたのである。

けれどたまにそれが発覚することがある。

寝ていたおかげで勉強が当然全然分らない。

ティムがそれを白状したところで、

「歯あ食い縛れ！ おりゃあ！」といつも押し掛かりがくるのだ。

椅子に座っていた状態なので、いつもガターンという大きな音が立つ。

大抵次の瞬間にはティムは完全に気絶していた。

ソファにクイルはティムを担ぎ上げて連れて行き、寝転がせる。

そしてクイルはアレンの耳元に呟きかけた。

「・・・地球の守護神は水属性で特殊能力は幻想。火星の守護神は火属性で回数。土星は地属性で把握。天王星は雷属性で強化・増幅。冥王星は闇属性で複写・・・」

こうして無理矢理覚えさせられるのだ・・・。

「クイルさん・・・鬼です・・・」

そんな学習スタイルだと知らなかったレウインはただただ苦笑するだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2733v/>

太陽系の王様 THE KING OF SOLAR SYSTEM

2011年11月26日21時58分発行